

したが、何時でも抽象的な理論に落ちてしまふ丈でした。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と學問の話と、未來の事業と、抱負と、修養の話位で持ち切つてゐたのです。いくら親しくつても斯う堅くなつた日には、突然調子を崩せるものではありません。二人はたゞ堅いなりに親しくなる丈です。私は御嬢さんの事をKに打ち明けやうと思ひ立つてから、何遍齒搔ゆい不快に悩まされたか知れませんか。私はKの頭の何處か一ヶ所を突き破つて、其所から柔らかい空気を吹き込んでやりたい氣がしました。

貴方がたから見て笑止千萬な事も其時の私には實際大困難だつたのです。私は旅先でも宅にゐた時と同じやうに卑怯でした。私は始終機會を捕える氣でKを観察してゐながら、變に高踏的な彼の態度を何うする事も出来なかつたのです。私に云はせると、彼の心臓の周圍は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けやうとする血潮は、一滴も其心臓の中へは入らないで、悉く彈き返されてしまふのです。

或時はあまりにKの様子が強くて高いので、私は却つて安心した事もあります。さうして自分の疑を腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のやうに見えて、急に厭な心持になるのです。然し少時すると、以前の疑が又逆戻りをして、強く打ち返して來ます。凡てが疑ひから割り出されるのですから、凡てが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるやうに見えました。性質も私のやうにこせ／＼してゐない所が、異性には氣に入らうと思はれました。何處か間が抜けてゐて、それで何處かに確かりした男らしい所のある點も、私よりは優勢に見えました。學

力になれば專問こそ違ひますが、私は無論Kの敵でないと自覺してゐました。——凡て向ふの好い所丈が斯う一度に眼先へ散らつき出すと、一寸安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭なら一先東京へ歸つても可いと云つたのですが、さう云はれると、私は急に歸りたくなくなりました。實はKを東京へ歸したくなかつたのかも知れませんが、二人は房州の鼻を廻つて向ふ側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思ひをして、上總の其所一里に驅されながら、うん／＼歩きました。私にはさうして歩いてゐる意味が丸で解らなかつた位です。私は冗談半分Kにさう云ひました。するとKは足があるから歩くのだと答へました。さうして暑くなると、海に入つて行かうと云つて、何處でも構はず潮へ漬りました。その後を又強い日で照り付けられるのですから、身體が倦怠くてぐた／＼になりました。

三十

「斯んな風にして歩いてゐると、暑さと疲勞とで自然身體の調子が狂つて來るものです。尤も病氣とは違ひます。急に他の身體の中へ、自分の靈魂が宿替をしたやうな氣分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、何處かで平生の心持と離れるやうになりました。彼に對する親しみも憎しみも、旅中限りといふ特別な性質を帯びる風になつたのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、又歩行のため、在來と異なつた新しい關係に入る事が出來たのでせう。其時の我々は恰も道づれになつた行商のやうなものでした。いくら話をしても何時もと違つて、頭を使ふ込み入つた問題には觸れませんでした。

我々は此調子でとうとう銚子迄行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事が出来ないので。まだ房州を離れない前、二人は小湊といふ所で、鯛の浦を見物しました。もう年數も餘程経つてゐますし、それに私には夫程興味の無い事ですから、判然とは覚えてゐませんが、何でも其所は日蓮の生れた村だとか云ふ話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられてたとかいふ言傳へになつてゐるのです。それ以來村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が澤山ゐるのです。我々は小舟を備つて、其鯛をわざと見に出掛けたのです。

其時私はたゞ一圖に波を見てゐました。さうして其波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。然しKは私程それに興味を有ち得なかつたものと見えます。彼は鯛よりも却つて日蓮の方を頭の中で想像してゐたらしいのです。丁度其所に誕生寺といふ寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでせう、立派な伽藍でした。Kは其寺に行つて住持に會つて見るといひ出しました。實をいふと、我々は随分變な服装をしてゐたのです。ことにKは風のため帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買つて被つてゐました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなつてゐました。私は坊さんなどに會ふのは止さうと云ひました。Kは強情だから聞きません。厭なら私丈外に待つてゐろといふのです。私は仕方がないから一所に玄關にかゝりましたが、心のうちでは屹度斷られるに違ないと思つてゐました。所が坊さんといふものは案外丁寧なもので、廣い立派な座敷へ私達を通して、すぐ會つて呉れました。其時分の私はKと大分考が違つてゐましたから、坊さんとKの談話をそれ程耳を傾ける氣も起りませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いてゐたやうです。日

蓮は草日蓮と云はれる位で、草書が大變上手であつたと坊さんが云つた時、字の拙いKは、何だ下らないといふ顔をしたのを私はまだ覚えてゐます。Kはそんな事よりも、もつと深い意味の日蓮が知りたかつたのでせう。坊さんが其點でKを満足させたか何うかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向つて日蓮の事を云々し出しました。私は暑くて草臥れて、それ所ではありませんでしたから、唯口の先で好い加減な挨拶をしてゐました。夫も面倒になつてしまひには全く黙つてしまつたのです。たしかその翌る晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯を食つて、もう寐やうといふ少し前になつてから、急に六づかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事に就いて、私を取り合はなかつたのを、快よく思つてゐなかつたのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だと云つて、何だか私をさも輕薄ものゝやうに遣り込めるのです。ところが私の胸には御嬢さんの事が蟠まつてゐますから、彼の侮蔑に近い言葉をたゞ笑つて受け取る譯に行きません。私は私で辯解を始めたのです。

「其時私はしきりに人間らしいといふ言葉を使ひました。Kは此人間らしいといふ言葉のうちに、私

らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先丈では人間らしくないやうな事を云ふのだ。又人間らしくないやうに振舞はうとするのだ。

私が斯う云つた時、彼はたゞ自分の修養が足りないから、他にはさう見えるかも知れないと答へた丈で、一向私を反駁しやうとしませんでした。私は張合が抜けたといふよりも、却つて氣の毒になりました。私はすぐ議論を其所で切り上げました。彼の調子もだん／＼沈んで來ました。もし私が彼の知つてゐる通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだらうと云つて悵然としてゐました。Kの口にした昔の人は、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。靈のために肉を虐けたり、道のために體を鞭つたりした所謂難行苦行の人を指すのです。Kは私に、彼がどの位そのために苦しんでゐるか解らないのが、如何にも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寐てしまひました。さうして其翌る日から又普通の行商の態度に返つて、うん／＼汗を流しながら歩き出したのです。然し私は路々其晩の事をひよい／＼と思ひ出しました。私には此上もない好い機會が與へられたのに、知らない振をして何故それを遣り過ぎたのだらうといふ悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいといふ抽象的な言葉を用ひる代りに、もつと直截で簡單な話をKに打ち明けてしまへば好かつたと思ひ出したのです。實を云ふと、私がそんな言葉を創造したのも、御嬢さんに對する私の感情が土臺になつてゐたのですから、事實を蒸溜して拵らえた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原の形そのまゝを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だつたでせう。私にそれが出來なかつたのは、學問の交際が基調を構成してゐる二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思ひ切つて

それを突き破る丈の勇氣が私に缺けてゐたのだといふ事を、こゝに自白します。氣取り過ぎたと云つても、虚榮心が祟つたと云つても同じでせうが、私のいふ氣取るとか虚榮とかいふ意味は、普通のとは少し違ひます。それがあなたに通じさへすれば、私は満足なのです。

我々は眞黒になつて東京へ歸りました。歸つた時は私の氣分が又變つてゐました。人間らしいとか、人間らしくないとかいふ小理窟は殆んど頭の中に残つてゐませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。恐らく彼の心のどこにも靈がどうの肉がどうのといふ問題は、其時宿つてゐなかつたでせう。二人は異人種のやうな顔をして、忙がしさうに見える東京をぐる／＼眺めました。それから兩國へ來て、暑いのに軍鶏を食ひました。Kは其勢で小石川迄歩いて歸らうと云ふのです。體力から云へばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ應じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚ろきました。二人はたゞ色が黒くなつたばかりでなく、無暗に歩いてゐるうちに大變瘡せてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫さうになつたと云つて賞めて呉れるのです。御嬢さんは奥さんの矛盾が可笑しいと云つて又笑ひ出しました。旅行前時々腹の立つた私も、其時丈は愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久し振に聞いた所爲でせう。

「それのみならず私は御嬢さんの態度の少し前と變つてゐるのに氣が付きしました。久し振で旅から歸つた私達が平生の通り落付く迄には、萬事に就いて女の手が必要だつたのですが、其世話をして呉れる奥

さんは兎に角、御嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするやうに見えたのです。それを露骨に遣られては、私も迷惑したかも知れません。場合によつては却つて不快の念さへ起しかねなかつたらうと思ふのですが、御嬢さんの所作は其點で甚だ要領を得てゐるから、私は嬉しかつたのです。つまり御嬢さんは私だけに解るやうに、持前の親切を餘分に私の方へ割り宛て、呉れたのです。だからKは別に厭な顔もせず平氣でゐました。私は心の中でひそかに彼に對する懽歌を奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃から我々はまた學校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で、出入の刻限にまた遅速が出来てきました。私がKより後れて歸る時は一週に三度ほどありましたが、何時歸つても御嬢さんの影をKの室に認める事はないやうになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、『今歸つたのか』を規則の如く繰り返しました。私の會釋も殆んど器械の如く簡單で且つ無意味でした。

たしか十月の中頃と思ひます、私は痲坊をした結果、日本服の儘急いで學校へ出た事があります。穿物も編上などを結んでゐる時間が惜しいので、草履を突つかけたなり飛び出したのです。其日は時間割からいふと、Kよりも私の方が先へ歸る筈になつてゐました。私は戻つて來ると、其積で玄關の格子をがらりと開けたのです。すると居ないとと思つてゐたKの聲がひよいと聞こえました。同時に御嬢さんの笑ひ聲が私の耳に響きました。私は何時ものやうに手数のかゝる靴を穿いてゐないから、すぐ玄關に上がつて仕切の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐つてゐるKを見ました。然し御嬢さんは今も其所にはゐなかつたのです。私は恰もKの室から逃れ出るやうに去る其後姿をちらりと認めたまはりました。私はKに何

うして早く歸つたのかと問ひました。Kは心持が悪いから休んだのだと答へました。私が自分の室に這入つて其儘坐つてゐると、間もなく御嬢さんが茶を持って來て呉れました。其時御嬢さんは始めて御歸りといつて私に挨拶をしました。私は笑ひながらさつきは何故逃げたんですと聞けるやうな捌けた男ではありませんが、それでゐる腹の中では何だか其事が氣にかゝるやうな人間だつたのです。御嬢さんはすぐ座を立てて縁側傳ひに向ふへ行つてしまひました。然しKの室の前に立ち留まつて、一言二言内と外とで話をしてゐました。それは先刻の續きらしかつたのですが、前を聞かない私には丸で解りませんでした。

そのうち御嬢さんの態度がだん／＼平氣になつて來ました。Kと私が一所に宅にゐる時でも、よくKの室の縁側へ來て彼の名を呼びました。さうして其所へ入つて、ゆつくりしてゐました。無論郵便を持つて來る事もあるし、洗濯物を置いて行く事もあるのですから、其位の交通は同じ宅にゐる二人の關係上、當然と見なければならぬのでせうが、是非御嬢さんを専有したいといふ強烈な一念に動かされてゐる私には、何うしてもそれが當然以上に見えたのです。ある時は御嬢さんがわざ／＼私の室へ來るのを回避して、Kの方ばかりへ行くやうに思はれる事さへあつた位です。それなら何故Kに宅を出て貰はないのかと貴方は聞くでせう。然しさうすれば私がKを無理に引張て來た主意が立たなくなる丈です。私にはそれが出來ないのです。

「十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒺藜圍魔を抜けて細い坂路を上

つて宅へ歸りました。Kの室は空虚でしたけれども、火鉢には繼ぎたての火が暖かさうに燃えてるました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳さうと思つて、急いで自分の室の仕切を開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残つてゐる丈で、火種さへ盡きてゐるのです。私は急に不愉快になりました。其時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙つて室の真中に立つてゐる私を見て、氣の毒さうに外套を脱がせて呉れたり、日本服を着せて呉れたりしました。それから私が寒いといふのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持つて来て呉れました。私がKはもう歸つたのかと聞きましたら、奥さんは歸つて又出たと答へました。其日もKは私より後れて歸る時間割だつたのですから、私は何うした譯かと思ひました。奥さんは大方川事でも出来たのだらうと云つてゐました。

私はしばらく其所に坐つたまゝ、書見をしました。宅の中がしんと静まつて、誰の話し聲も聞こえないうちに、初冬の寒さと佗びしさとが、私の身體に食ひ込むやうな感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私は不圖賑やかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇つたやうですが、空はまだ冷たい鉛のやうに重く見えたので、私は用心のため、蛇の目を肩に擔いで、砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。其時分はまだ道路の改正が出来ない頃なので、坂の勾配が今よりもずつと急でした。道幅も狭くて、あゝ眞直ではなかつたのです。其上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞がつてゐるのと、放水がよくないので、往來はどろ／＼でした。ことに細い石橋を渡つて柳町の通りへ出る間が非道かつたのです。足駄でも長靴でも無暗に歩く譯には行きません。誰でも路の真中に自然と細長く泥が掻き分けられた所を、後生大事に辿つて行かなければならないのです。其幅は僅か一二尺しかないのですから、手

もなく往來に敷いてある帯の上を踏んで向へ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になつてそろ／＼通り抜けれます。私は此細帯の上で、はたりとKに出合ひました。足の方にはかり氣を取られてゐた私は、彼と向き合ふ迄、彼の存在に丸で氣が付かずゐるたのです。私は不意に自分の前が塞がつたので偶然眼を上げた時、始めて其所に立つてゐるKを認めたのです。私はKに何處へ行つたのかと聞きました。Kは一寸其所迄と云つたぎりでした。彼の答へは何時もの通りふんといふ調子でした。Kと私は細い帯の上で身體を替せました。するとKのすぐ後に一人の若い女が立つてゐるのが見えました。近眼の私には、今迄それが能く分らなかつたのですが、Kを遣り越した後で、其女の顔を見ると、それが宅の御嬢さんだつたので、私は少からず驚ろきました。御嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。其時分の束髪は今と違つて脰が出てゐるのです。さうして頭の真中に蛇のやうにぐる／＼巻きつけてあつたものです。私はほんやり御嬢さんの頭を見てゐましたが、次の瞬間に、何方か路を譲らなければならぬのだといふ事に氣が付きました。私は思ひ切つてどろ／＼の中へ片足踏ん込みました。さうして比較的通り易い所を空けて、御嬢さんを渡して遣りました。それから柳町の通りへ出た私は何處へ行つて好いか自分にも分らなくなりました。何處へ行つても面白くないやうな心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構はずに、糠る海の中を自暴にどし／＼歩きました。それから直ぐ宅へ歸つて來ました。

「私はKに向つて御嬢さんと一所に出たのかと聞きました。Kは左右ではないと答へました。眞砂町で偶然出會つたから連れ立つて歸つて來たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入つた質問を控えなければなりません。然し食事の時、又御嬢さんに向つて、同じ問を掛けたくありません。すると御嬢さんは私の嫌な例の笑ひ方をするので。さうして何處へ行つたか中て、見ると仕舞に云ふのです。其頃の私はまだ癩癩持でしたから、さう不眞面目に若い女から取り扱はれると腹が立ちました。所が其所に氣の付くのは、同じ食卓に着いてゐるもの、うちで奥さん一人だつたのです。Kは寧ろ平氣でした。御嬢さんの態度になると、知つてわざと遣るのか、知らないで無邪氣に遣るのか、其所の區別が一寸判然しない點がありました。若い女として御嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、其若い女に共通な私の嫌な所も、あると思へば思へなくもなかつたのです。さうして其嫌な所は、Kが宅へ來てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに對する私の嫉妬に歸して可いものか、又は私に對する御嬢さんの技巧と見做して然るべきものか、一寸分別に迷ひました。私は今でも決して其時の私の嫉妬心を打ち消す氣はありません。私はたび／＼繰り返した通り、愛の裏面に此感情の働きを明らかに意識してゐたのです。しかも傍のものから見ると、殆んど取るに足りない瑣事に、此感情が屹度首を持ち上げたがるのでしたから。是は餘事ですが、かういふ嫉妬は愛の半面ぢやないでせうか。私は結婚してから、此感情がだん／＼薄らいで行くのを自覺しました。其代り愛情の方も決して元のやうに猛烈ではないのです。私はそれ迄躊躇してゐた自分の心を、一思ひに相手の胸へ擲き付けやうかと考へ出しました。私の相手といふのは御嬢さんではありません。奥さんの事です。奥さんに御嬢さんを呉れると明白な談判を開かう

かと考へたのです。然しさう決心しながら、一日／＼と私は斷行の日を延ばして行つたのです。さういふと私はいかにも優柔な男のやうに見えます、又見えても構ひませんが、實際私の進みかねたのは、意志の力に不足があつた爲ではありません。Kの來ないうちは、他の手に乗るのが厭だといふ我慢が私を抑え付けて、一步も動けないやうにしてゐました。Kの來た後は、もしかすると御嬢さんがKの方に意があるのではなからうかといふ疑念が絶えず私を制するやうになつたのです。果して御嬢さんが私よりもKに心を傾むけてゐるならば、此戀は口へ云ひ出す價値のないものと私は決心してゐたのです。耻を搔かせられるのが辛いなど、云ふのとは少し譯が違ふます。此方できくと思つても、向ふが内心他人に愛の眼を注いでゐるならば、私はそんな女と一所になるのは厭なのです。世の中では否應なしに自分の好いた女を嫁に貰つて嬉しがつてゐる人もありますが、それは私達より餘程世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、當時の私は考へてゐたのです。一度貰つて仕舞へば何うか斯うか落ち付くものだ位の哲理では、承知する事が出來ない位私は熱してゐました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だつたのです。同時に尤も迂遠な愛の實際家だつたのです。

肝心の御嬢さんに、直接此私といふものを打ち明ける機會も、長く一所にゐるうちには時々出て來たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、さういふ事は許されてゐないのだといふ自覺が、其頃の私には強くありました。然し決してそれ許が私を束縛したとは云へません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に氣兼ねなく自分の思つた通りを遠慮せず口にする丈の勇氣に乏しいものと私は見込んでゐたのです。

「斯んな譯で私はどちらの方面へ向つても進む事が出来ずに立ち竦んでゐました。身體の悪い時に午睡などをすると、眼だけ覺めて周囲のものが判然見えるのに、何うしても手足の動かさない場合がありませう。私は時としてあゝいふ苦しみを人知れず感じたのです。

其内年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多を遣るから誰か友達を連れて來ないかと云つた事があります。するとKはすぐ友達などは一人もないと答へたので、奥さんは驚ろいてしまいました。成程Kに友達といふ程の友達は一人もなかつたのです。往來で會つた時挨拶をする位のもは多少ありましたが、それ等だつて決して歌留多などを取る柄ではなかつたのです。奥さんはそれぢや私の知つたものでも呼んで來たら何うかと云ひ直しましたが、私も生憎そんな陽氣な遊びをする心持になれないので、好い加減な生返事をしたなり、打ち遣つて置きました。所が晩になつてKと私はとう／＼御嬢さんに引つ張り出されてしまひました。客も誰も來ないのに、内々の小人數丈で取らうといふ歌留多ですから頗る静なものでした。其上斯ういふ遊技を遣り付けないうは、丸で懷手をしてゐる人と同様でした。私はKに一體百人一首の歌を知つてゐるのかと尋ねました。Kは能く知らないと答へました。私の言葉を聞いた御嬢さんは、大方Kを輕蔑するでも取つたのでせう。それから眼に立つやうにKの加勢を出しました。仕舞には二人が殆んど組になつて私に當るといふ有様になつて來ました。私は相手次第では喧嘩を始めたかも知れなかつたのです。幸ひにKの態度は少しも最初と變りませんでした。彼の何處にも得意らしい様子を

認めなかつた私は、無事に其場を切り上げる事が出来ました。

それから二三日経つた後の事でしたらう、奥さんと御嬢さんは朝から市ヶ谷にゐる親類の所へ行くといつて宅を出ました。Kも私もまだ學校の始まらない頃でしたから、留守居同様あとに残つてゐました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭だつたので、たゞ漠然と火鉢の縁に肱を載せて凝と頭を支へたなり考へてゐました。隣の室にゐるKも一向音を立てませんでした。双方とも居るのだから居ないのだから分らない位靜でした。尤も斯ういふ事は、二人の間柄として別に珍らしくも何ともなかつたのですから、私は別段それを氣にも留めませんでした。

十時頃になつて、Kは不意に仕切の襖を開けて私と顔を見合せました。彼は敷居の上に立つた儘、私に何を考へてゐると聞きました。私はもとより何も考へてゐなかつたのです。もし考へてゐたとすれば、何時もの通り御嬢さんが問題だつたかも知れませんが、其御嬢さんには無論奥さんも食つ付けてゐますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のやうに、私の頭の中をぐる／＼回つて、此問題を複雑にしてゐるのです。Kと顔を見合せた私は、今迄臙氣に彼を一種の邪魔もの、如く意識してゐながら、明らかに左右と答へる譯に行かなかつたのです。私は依然として彼の顔を見て黙つてゐました。するとKの方からつか／＼と私の座敷へ入つて來て、私のあたつてゐる火鉢の前に坐りました。私はすぐ兩肱を火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押し遣るやうにしました。

Kは何時にも似合はない話を始めました。奥さんと御嬢さんは市ヶ谷の何處へ行つたのだらうと云ふのです。私は大方叔母さんの所だらうと答へました。Kは其叔母さんは何だと又聞きます。私は矢張り軍人

の細君だと教へて遣りました。すると女の年始は大抵十五日過だのに、何故そんなに早く出掛けたのだらうと質問するのです。私は何故だか知らないと挨拶するより外に仕方ありませんでした。

三十六

「Kは中々奥さんと御嬢さんの話を已めませんでした。仕舞には私も答へられないやうな立ち入った事迄聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思ひ出すと、私は何うしても彼の調子の變つてゐる所に気が付かずにはゐられないのです。私はとうとう何故今日に限つてそんな事ばかり云ふのかと彼に尋ねました。其時彼は突然黙りました。然し私は彼の結んだ口元の肉が顫へるやうに動いてゐるのを注視しました。彼は元來無口な男でした。平生から何か云はうとすると、云ふ前に能く口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するやうに容易く開かない所に、彼の言葉の重みも籠つてゐたのでせう。一旦聲が口を破つて出るとなると、其聲には普通の人の倍の強い力がありました。

彼の口元を一寸眺めた時、私はまた何か出て来るなとすぐ疝付いたのですが、それが果して何の準備なのか、私の豫覺は丸でなかつたのです。だから驚ろいたのです。彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに對する切ない戀を打ち明けられた時の私を想像して見て下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたやうなものです。口をもぐもぐさせる働さへ、私にはなくなつて仕舞つたのです。其時の私は恐ろしさの塊りと云ひませうか、又は苦しみの塊りと云ひませうか、何しろ一つの塊りでし

た。石か鐵のやうに頭から足の先までが急に固くなつたのです。呼吸をする弾力性さへ失はれた位に堅くなつたのです。幸ひな事に其状態は長く續きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい氣分を取り戻しました。さうして、すぐ失策つたと思ひました。先を越されたなと思ひました。

然し其先を何うしやうといふ分別は丸で起りません。恐ろしく起る丈の餘裕がなかつたのでせう。私は腋の下から出る氣味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動かさぬに耐えました。Kは其間何時もの通り重い口を切つては、ほつり／＼と自分の心を打ち明けて行きます。私は苦しくつて堪りませんでした。恐らく其苦しきは、大きな廣告のやうに、私の顔の上に判然とした字で貼り付けられてあつたらうと私は思ふのです。いくらKでも其所に氣の付かない筈はないのですが、彼は又彼で、自分の事に一切を集中してゐるから、私の表情などに注意する暇がなかつたのでせう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫ぬいてゐました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないといふ感じを私に與へたのです。私の心は半分其自白を聞いてゐながら、半分何うしやう／＼といふ念に絶えず掻き亂されてゐましたから、細かい點になると殆んど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前いつた苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしさを感じるやうになつたのです。つまり相手は自分より強いのだといふ恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも云ふ事が出来ませんでした。此方も彼の前に同じ意味の自白をしたものだらうか、夫とも打ち明けずにいる方が得策だらうか、私はそんな利害を考へて黙つてゐたのではありません。たゞ何事も云へなかつたのです。又云ふ氣にもならなかつたのです。

午食の時、Kと私は向ひ合せに席を占めました。下女に給仕をして貰つて、私はいつにない不味い飯を済ませました。二人は食事中も殆んど口を利きませんでした。奥さんと御嬢さんは何時歸るのだから分りませんでした。

三十七

「二人は各自の室に引き取つたぎり顔を合はせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝と考へ込んでました。

私は當然自分の心をKに打ち明けろべき筈だと思ひました。然しそれにはもう時機が後れてしまつたといふ氣も起りました。何故先刻Kの言葉を遮ぎつて、此方から逆襲しなかつたのか、其所が非常な手落りのやうに見えて來ました。責めてKの後に續いて、自分は自分の思ふ通りを其場で話して仕舞つたら、まだ好かつたらうにと考へました。Kの自由一段落が付いた今となつて、此方から又同じ事を切り出すのは、何う思案しても變でました。私は此不自然に打ち勝つ方法を知らなかつたのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらくしました。

私はKが再び仕切の襖を開けて向ふから突進してきて呉れ、ば好いと思ひました。私に云はせれば、先刻は丸で不意撃に會つたと同じでした。私にはKに應ずる準備も何もなかつたのです。私は午前失なつたものを、今度は取り戻さうといふ下心を持つてゐました。それで時々眼を上げて、襖を眺めました。然し其襖は何時迄経つても開きません。さうしてKは永久に静かなのです。

其内私の頭は段々此静かさに掻き亂されるやうになつて來ました。Kは今襖の向で何を考へてゐるだらうと思ふと、それが氣になつて堪らないのです。不斷も斯んな風に御互が仕切一枚を間に置いて黙り合つてゐる場合は始終あつたのですが、私はKが靜であればある程、彼の存在を忘れるのが普通の状態だつたのですから、其時の私は餘程調子が狂つてゐたものと見なければなりません。それでゐる私は此方から進んで襖を開ける事が出来なかつたのです。一旦云ひそびれた私は、また向ふから働らき掛けられる時機を待つより外に仕方がなかつたのです。

仕舞に私は凝として居られなくなりました。無理に凝としてゐれば、Kの部屋へ飛び込みたくないので、私は仕方なしに立つて縁側へ出ました。其所から茶の間へ來て、何といふ目的もなく、鏡瓶の湯を湯呑に注いで一杯呑みました。それから玄關へ出ました。私はわざとKの室を回避するやうにして、斯んな風に自分を往來の真中に見出したのです。私には無論何處へ行くといふ的もありません。たゞ凝としてゐられない丈でした。それで方角も何も構はずに、正月の町を、無暗に歩き廻つたのです。私の頭はいくら歩いてもKの事で一杯になつてゐました。私もKを振り落す氣で歩き廻る譯ではなかつたのです。寧ろ自分から進んで彼の姿を咀嚼しながらうろついて居たのです。

私には第一に彼が解しがたい男のやうに見えました。何うしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、又何うして打ち明けないければならぬ程に、彼の戀が募つて來たのか、さうして平生の彼は何處に吹き飛ばされてしまつたのか、凡て私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知つてゐました。又彼の眞面目な事を知つてゐました。私は是から私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければなら

ない多くを有つてゐると信じました。同時に是からさき彼を相手にするのが變に氣味が悪かつたのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に擬と坐つてゐる彼の容貌を始終眼の前に描き出しました。しかもいくら私が歩いても彼を動かす事は到底出来ないのだといふ聲が何處かで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のやうに思へたからでせう。私は永久彼に祟られたのではなからうかといふ氣がへしました。

私が疲れて宅へ歸つた時、彼の室は依然として人氣のないやうに静でした。

三十八

「私が家へ這入ると間もなく俥の音が聞こえました。今のやうに護謨輪のない時分でしたから、がらがらいふ厭な響が可なりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり経つた後の事でしたが、まだ奥さんと御嬢さんの晴着が脱ぎ棄てられた儘、次の室を亂雑に彩どつてゐました。二人は遅くなるかと私達に濟まないといふので、飯の支度間に合ふやうに、急いで歸つて來たのださうです。然し奥さんの親切はKと私とに取つて殆んど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のやうに、素氣ない挨拶ばかりしてゐました。Kは私よりも猶寡言でした。たまに親子連で外出した女二人の氣分が、また平生よりは勝れて晴やかだつたので、我々の態度は猶の事眼に付きます。奥さんは私に何うかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答へました。實際私には心持が悪いのです。すると今度は御嬢さんがKに

同じ間を掛けました。Kは私のやうに心持が悪いとは答へません。たゞ口が利きたくないからだと言ひました。御嬢さんは何故口が利きたくないのかと追窮しました。私は其時ふと重たい臉を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答へるだらうかといふ好奇心があつたのです。Kの唇は例のやうに少し顫へてゐました。それが知らない人から見ると、丸で返事に迷つてゐるとしか思はれないのです。御嬢さんは笑ひながら又何か六づかしい事を考へてゐるのだらうと云ひました。Kの顔は心持薄赤くなりました。

其晩私は何時よりも早く床へ入りました。私が食事の時氣分が悪いと云つたのを氣にして、奥さんは十時頃蕎麥湯を持つて來て呉れました。然し私の室はもう眞暗でした。奥さんはおやくくと云つて、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜にほんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きてゐたものと見えます。奥さんは枕元に坐つて、大方風邪を引いたのだらうから身體を暖ためるが可いと云つて、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私は已を得ず、どろ／＼した蕎麥湯を奥さんの見てゐる前で飲みました。

私は遅くなる迄暗いなかで考へてゐました。無論一つ問題をぐる／＼廻轉させる丈で、外に何の効力もなかつたのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしてゐるだらうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと聲を掛けました。すると向ふでもおいと返事をしました。Kもまだ起きてゐたのです。私はまだ寐なのかと襖ごしに聞きました。もう寐るといふ簡単な挨拶がありました。何をしてゐるのだと私は重ねて聞きました。今度はKの答がありません。其代り五六分経つたと思ふ頃に、押入をがらりと開けて、床を延べる音が手に取るやうに聞こえました。私はもう何時かと又尋ねました。Kは一時二十分だと答へまし

た。やがて洋燈をふつと吹き消す音がして、家中が眞暗なうちに、しんと静まりました。然し私の眼は其暗いなかで愈々光りて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに聲を掛けました。Kも以前と同じやうな調子で、おいと答へました。私は今朝彼から聞いた事に就いて、もつと詳しい話をしたいが、彼の都合は何うだと、とうとう此方から切り出しました。私は無論横越にそんな談話を交換する氣はなかつたのですが、Kの返答だけは即座に得られる事と考へたのです。所がKは先刻から二度おいと呼ばれて、二度おいと答へたやうな素直な調子で、今度は應じません。左右だなあといひ聲で溢つてゐます。私は又はつと思はせられました。

三十九

「Kの生返事は翌日になつても、其翌日になつても、彼の態度によく現はれてゐました。彼は自分から進んで例の問題に觸れようとする氣色を決して見せませんでした。尤も機會もなかつたのです。奥さんと御嬢さんが揃つて一日宅を空けでもしなければ、二人はゆつくり落付いて、左右いふ事を話し合ふ譯にも行かないのですから。私はそれを能く心得てゐました。心得てゐながら、變にいら／＼出すのです。其結果始めは向ふから来るのを待つ積で、暗に用意をしてゐた私が、折があつたら此方で口を切らうと決心するやうになつたのです。

同時に私は黙つて家のものゝ様子を觀察して見ました。然し奥さんの態度にも御嬢さんの素振にも、別に平生と變つた點はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼等の舉動に是といふ差違が生じないならば、彼の自白は單に私丈に限られた自白で、肝心の本人にも、又其監督者たる奥さんにも、まだ通じてゐないのは慥でした。さう考へた時、私は少し安心しました。それで無理に機會を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の與へて呉れるものを取り逃さないやうにする方が好からうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにそつとして置く事にしました。

斯う云つて仕舞へば大變簡單に聞こえますが、さうした心の経過には、潮の満干と同じやうに、色々の高低があつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加へました。奥さんと御嬢さんの言語動作を觀察して、二人の心が果して其所に現はれてゐる通なのだらうかと疑つても見ました。さうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のやうに、明瞭に偽りなく、盤上の數字を指し得るものだらうかと考へました。要するに私は同じ事を斯うも取り、彼も取りした揚句、漸く此處に落ち付いたものと思つて下さい。更に六づかしく云へば、落ち付くなどいふ言葉は、此際決して使はれた義理でなかつたのかも知れません。

其内學校がまた始まりました。私達は時間の同じ日には連れ立つて宅を出ます。都合が可ければ歸る時にも矢張り一所に歸りました。外部から見たKと私は、何にも前と違つた所がないやうに親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考へてゐるに違ありません。ある日私は突然往來でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、此間の自白が私丈に限られてゐるか、又は奥さんや御嬢さんにも通じてゐるかの點にあつたのです。私の是から取るべき態度は、此間に對する彼の答次第で極めなければならぬと、私は思つたのです。すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けてゐないと明言し

ました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのを能く知つてゐました。彼の度胸にも敵はないといふ自覺があつたのです。けれども一方では又妙に彼を信じてゐました。學資の事で養家を三年も欺むいてゐた彼ですけれども、彼の信用は私に對して少しも損はれてゐなかつたのです。私はそれがために却つて彼を信じ出した位です。だからいくら疑ひ深い私でも、明白な彼の答を腹の中で否定する氣は起りやうがなかつたのです。

私は又彼に向つて、彼の戀を何う取り扱かふ積かと尋ねました。それが單なる自白に過ぎないのか、又は其自白について、實際的の効果をもち收める氣なかと問ふたのです。然るに彼は其所になると、何にも答へません。黙つて下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立をして呉れるな、凡て思つた通りを話して呉れと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然斷言しました。然し私の知らうとする點には、一言の返事も與へないのです。私も往來だからわざ／＼立ち留まつて底迄突き留める譯に行きません。ついそれなりに爲てしまひました。

四十

「ある日私は久し振に學校の圖書館に入りしました。私は廣い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外國雑誌を、あちら此方と引繰り返して見てゐました。私は擔任教師から專攻の學科に關して、次の週までにある事項を調べて來いと命ぜられたのです。然し私に必要な事柄が中々見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替へなければならませんでした。最後に私はやつと自分に必要な論文

を探し出して、一心にそれを讀み出しました。すると突然幅の廣い机の向ふ側から小さな聲で私の名を呼ぶものがあります。私は不圖眼を上げて其所に立つてゐるKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲るやうにして、彼の顔を私に近付けました。御承知の通り圖書館では他の人の邪魔になるやうな大きな聲で話をする譯に行かないのですから、Kの此所作は誰でも遣る普通の事なのですが、私は其時に限つて、一種變な心持がしました。

Kは低い聲で勉強かと聞きました。私は一寸調べものがあるのだと答へました。それでもKはまだ其顔を私から放しません。同じ低い調子で一所に散歩をしないかといふのです。私は少し待つてゐれば爲ても可いと答へました。彼は待つてゐると云つた儘、すぐ私の前の空席に腰を卸しました。すると私は氣が散つて急に雑誌が讀めなくなりました。何だかKの胸に一物があつて、談判でもしに來られたやうに思はれて仕方がないので、私は已を得ず讀みかけた雑誌を伏せて、立ち上がらうとしました。Kは落付き拂つてもう濟んだのかと聞きます。私は何うでも可いのだと答へて、雑誌を返すと共に、Kと圖書館を出ました。

二人は別に行く所もなかつたので、龍岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。其時彼は例の事件について、突然向ふから口を切りました。前後の様子を綜合して考へると、Kはそのために私をわざ／＼散歩に引つ張出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ實際的の方面へ向つてちつとも進んでゐませんでした。彼は私に向つて、たゞ漠然と、何う思ふと云ふのです。何う思ふといふのは、さうした戀愛の淵に陥いつた彼を、何んな眼で私が眺めるかといふ質問なのです。一言でいふと、彼は現在の自

分について、私の批判を求めたい様なのです。其所に私は彼の平生と異なる點を確かに認める事が出来たと思ひました。度々繰り返すやうですが、彼の天性は他の思はくを憚る程弱く出来上つてはゐなかつたのです。斯うと信じたら一人でどん／＼進んで行く丈の度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件で其特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、是は様子が違ふと明らかに意識したのは當然の結果なのです。私がKに向つて、此際何んで私の批評が必要なかと尋ねた時、彼は何時にも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際耻づかしいと云ひました。さうして迷つてゐるから自分で自分が分らなくなつてしまつたので、私に公平な批評を求めより外に仕方がないと云ひました。私は隙かさず迷ふといふ意味を聞き糺しました。彼は進んで可いか退ぞいて可いか、それに迷ふのだと説明しました。私はすぐ一步先へ出ました。さうして退ぞかうと思へば退ぞけるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉が其所で不意に行き詰りました。彼はたゞ苦しいと云つた丈でした。實際彼の表情には苦しうな所がありありと見えてゐました。もし相手が御嬢さんでなかつたならば、私は何んなに彼に都合の好い返事を、その渴き切つた顔の上に慈雨の如く注いで遣つたか分りません。私はその位の美くしい同情を有つて生れて来た人間と自分ながら信じてゐます。然し其時の私は違つてゐました。

四十一

「私は丁度他流試合でもする人のやうにKを注意して見てゐたのです。私は、私の眼、私の心、私の身體、すべて私といふ名の付くものを五分の隙間もないやうに用意して、Kに向つたのです。罪のないKは穴だらけといふより寧ろ明け放しと評するのが適當な位に無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管してゐる要塞の地圖を受取つて、彼の眼の前でゆつくりそれを眺める事が出来たも同じでした。

Kが理想と現實の間に彷徨してふら／＼してゐるのを發見した私は、たゞ一打で彼を倒す事が出来るだらうといふ點にばかり眼を着けました。さうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向つて急に嚴肅な改たまつた態度を示し出しました。無論策畧からですが、其態度に相應する位な緊張した氣分もあつたのですから、自分に滑稽だの羞耻だのを感じる餘裕はありませんでした。私は先づ『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と云ひ放ちました。是は二人で房州を旅行してゐる際、Kが私に向つて使つた言葉です。私は彼の使つた通りを、彼と同じやうな口調で、再び彼に投げ返したのです。然し決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味を有つてゐたといふ事を自白します。私は其一言でKの前に横たはる戀の行手を塞がうとしたのです。

Kは眞宗寺に生れた男でした。然し彼の傾向は中學時代から決して生家の宗旨に近いものではなかつたのです。教義上の區別をよく知らない私が、斯んな事をいふ資格に乏しいのは承知してゐますが、私はただ男女に關係した點についてのみ、さう認めてゐたのです。Kは昔から精進といふ言葉が好でした。私は其言葉の中に、禁慾といふ意味も籠つてゐるのだからと解釋してゐました。然し後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれてゐるので、私は驚ろきました。道のためには凡てを犠牲にするべきものだといふのが彼の第一信条なのです。から、攝慾や禁慾は無論、たとひ慾を離れた戀そのものでも道の妨害になるのです。Kが自活生活をしてゐる時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。

其頃から御嬢さんを思つてゐた私は、勢ひ何うしても彼に反対しなければならなかつたのです。私が反対すると、彼は何時でも氣の毒さうな顔をしました。其所には同情よりも侮蔑の方が餘計に現はれてゐました。

斯ういふ過去を二人の間に通り抜けて來てゐるのでから、精神的に向上心のないものは馬鹿だといふ言葉は、Kに取つて痛いに違ひなかつたのです。然し前にも云つた通り、私は此一言で、彼が折角積み上げた過去を蹴散らした積ではありません。却つてそれを今迄通り積み重ねて行かせやうとしたのです。それが道に達しやうが、天に届かうが、私は構ひません。私はたゞKが急に生活の方向を轉換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は單なる利己心の發現でした。

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

私は二度同じ言葉を繰り返しました。さうして、其言葉がKの上に何う影響するかを見詰めてゐました。

『馬鹿だ』とやがてKが答へました。『僕は馬鹿だ』

Kはびたりと其所へ立ち留つた儘動きません。彼は地面の上を見詰めてゐます。私は思はずぎよつとしました。私にはKが其利那に居直り強盜の如く感ぜられたのです。然しそれにしては彼の聲が如何にも力に乏しいといふ事に氣が付きました。私は彼の眼遣を参考にしたかつたのですが、彼は最後迄私の顔を見ないので。さうして、徐々と又歩き出しました。

「私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。或は待ち伏せと云つた方がまだ適當かも知れません。其時の私はたとひKを騙し打ちにしても構はない位に思つてゐたのです。然し私にも教育相當の良心はありますから、もし誰か私の傍へ來て、御前は卑怯だと言ひ私語いて呉れるものがあつたなら、私は其瞬間に、はつと我に立ち歸つたかも知れません。もしKが其人であつたなら、私は恐らく彼の前に赤面したでせう。たゞKは私を窘めるには餘りに正直でした。餘りに單純でした。餘りに人格が善良だつたのです。目のくらんだ私は、其所に敬意を拂ふ事を忘れて、却つて其所に付け込んだのです。其所を利用して彼を打ち倒さうとしたのです。」

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私は其時やつとKの眼を眞向に見る事が出来たのです。Kは私より脊の高い男でしたから、私は勢ひ彼の顔を見上げるやうにしなければなりません。私はさうした態度で、狼の如き心を罪のない羊に向けたのです。

『もう其語は止めやう』と彼が云ひました。彼の眼にも彼の言葉にも變に悲痛な所がありました。私は一寸挨拶が出来なかつたのです。するとKは、『止めて呉れ』と今度は頼むやうに云ひ直しました。私は其時彼に向つて残酷な答を與へたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食ひ付くやうに。

『止めて呉れつて、僕が云ひ出した事ぢやない、もとく君の方から持ち出した話ぢやないか。然し君が止めたければ、止めても可いが、たゞ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止める丈の覺悟がなければ、一體君は君の平生の主張を何うする積なのか』

私が斯う云つた時、脊の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるやうな感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方では又人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平氣でゐられない質だつたのです。私は彼の様子を見て漸やく安心しました。すると彼は卒然「覺悟？」と聞きました。さうして私がまだ何とも答へない先に「覺悟、——覺悟ならぬ事もない」と付け加へました。彼の調子は獨言のやうでした。又夢の中の言葉のやうでした。二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿の方に足を向けました。割合に風のない暖たかな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋しいものでした。ことに霜に打たれて着味を失つた杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べて聳えてゐるのを振り返つて見た時は、寒さが脊中へ嚙り付いたやうな心持がしました。我々は夕暮の本郷臺を急ぎ足でどしどし通り抜けて、又向ふの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私は其頃になつて、漸やく外套の下に體の温味を感じ出した位です。急いだためでもありませんが、我々は歸り路には殆んど口を聞きませんでした。宅へ歸つて食卓に向つた時、奥さんは何うして遅くなつたのかと尋ねました。私はKに誘はれて上野へ行つたと答へました。奥さんは此寒いのにと云つて驚ろいた様子を見せました。御嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがりです。私は何も無いが、たゞ散歩したのだといふ返事丈して置きました。平生から無口なKは、いつもより猶黙つてゐました。奥さんが話しかけても、御嬢さんが笑つても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むやうに掻き込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。

「其頃は覺醒とか新しい生活とかいふ文字のまだない時分でした。然しKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかつたのは、現代人の考へが彼に缺けてゐたからではないのです。彼には投げ出す事の出来ない程尊とい過去があつたからです。彼はそのため今日迄生きて來たと云つても可い位なのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて猛進しないと云つて、決して其愛の生温い事を證據立てる譯には行きません。いくら熾烈な感情が燃えてゐても、彼は無暗に動けないのです。前後を忘れる程の衝動が起る機会を彼に與へない以上、Kは何うしても一寸踏み留まつて自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。さうすると過去が指し示す路を今迄通り歩かなければならなくなるのです。其上彼には現代人の有たない強情と我慢がありました。私は此双方の點に於て能く彼の心を見抜いてゐた積なのです。

上野から歸つた晩は、私に取つて比較的安靜な夜でした。私はKが室へ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机の傍に坐り込みました。さうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑さうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いてゐたでせう。私の聲にはたしかに得意の響があつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に歸りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、其時丈は恐るゝに足りないといふ自覺を彼に對して有つてゐたのです。私は程なく穩やかな眠に落ちました。然し突然私の名を呼ぶ聲で眼を覺ましました。見ると、間の襖

三三三
が二尺ばかり開いて、其所にKの黒い影が立つてゐます。さうして彼の室には宵の通りまだ燈火が點いてゐるのです。急に世界の變つた私は、少しの間口を利く事も出來ずに、ほうつとして、其光景を眺めてゐました。

其時Kはもう寐たのかと聞きました。Kは何時でも遅く迄起きてゐる男でした。私は黒い影法師のやうなKに向つて、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、たゞもう寐たか、まだ起きてゐるかと思つて、便所へ行つた序に聞いて見た丈だと答へました。Kは洋燈の灯を脊中に受けてゐるので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の聲は不斷よりも却つて落ち付いてゐた位でした。

Kはやがて開けた襖をびたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に歸りました。私は其暗闇より静かな夢を見るべく又眼を閉ぢました。私はそれぎり何も知りません。然し翌朝になつて、昨夕の事を考へて見ると、何だか不思議でした。私はことによると、凡てが夢ではないかと思ひました。それで飯を食ふ時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと云ひます。何故そんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もしません。調子の抜けた頃になつて、近頃は熟睡が出来るのかと却つて向ふから私に問ふのです。私は何だか變に感じました。

其日は丁度同じ時間に講義の始まる時間割になつてゐたので、二人はやがて一所に宅を出ました。今朝から昨夕の事が氣に掛つてゐる私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるやうな答をしません。私はあの事件に就いて何か話す積ではなかつたのかと念を押して見ました。Kは左

右ではないと強い調子で云ひ切りました。昨日上野で『其話はもう止めよう』と云つたではないかと注意する如くにも聞こえました。Kはさういふ點に掛けて鋭い自尊心を有つた男なのです。不圖其處に氣のついた私は突然彼の用ひた『覺悟』といふ言葉を連想し出しました。すると今迄丸で氣にならなかつた其二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。

四十四

「Kの果斷に富んだ性格は私によく知れてゐました。彼の此事件に就いてのみ優柔な譯も私にはちやんと呑み込めてゐたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしつかり攫まへた積りで得意だつたのです。所が『覺悟』といふ彼の言葉を、頭ななかで何遍も咀嚼してゐるうちに、私の得意はだん／＼色を失なつて、仕舞にはぐらく／＼搖き始めるやうになりました。私は此場合も或は彼にとつて例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。凡ての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに疊み込んでゐるのではなからうかと疑ぐり始めたのです。さうした新らしい光で覺悟の二字を眺め返して見た私は、はつと驚ろきました。其時の私が若し此驚きを以て、もう一返彼の口にした覺悟の内容を公平に見廻したらば、まだ可かつたかも知れません。悲しい事に私は片眼でした。私はたゞKが御嬢さんに對して進んで行くといふ意味に其言葉を解釋しました。果斷に富んだ彼の性格が、戀の方面に發揮されるのが即ち彼の覺悟だらうと一圖に思ひ込んでしまつたのです。私は私にも最後の決斷が必要だといふ聲を心の耳で聞きました。私はすぐ其聲に應じて勇氣を振り起

しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覺悟を極めました。私は黙つて機會を窺つてみました。しかし二日経つても三日経つても、私はそれを捕まへる事が出来ません。私はKのゐない時、又御嬢さんの留守な折を待つて、奥さんに談判を開かうと考へたのです。然し片方がゐなければ、片方が邪魔をするといつた風の日ばかり續いて、何うしても『今だ』と思ふ好都合が出て來て呉れないのです。私はいら／＼しました。

一週間の後、私はとう／＼堪え切れなくなつて假病を遣ひました。奥さんからも御嬢さんからも、K自身からも、起きろといふ催促を受けた私は、生返事をした丈で、十時頃迄蒲團を被つて寐てるました。私はKも御嬢さんもゐなくなつて、家の内がひっそり静まつた頃を見計つて寐床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐ何處が悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もつと寐てるたら可からうと忠告しても呉れませんでした。身體に異状のない私は、とても寐る氣にはなれません。顔を洗つて何時もの通り茶の間で飯を食ひました。其時奥さんは長火鉢の向側から給仕をして呉れたのです。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手に持つた儘、何んな風に問題を切り出したものだらうかと、そればかりに屈托してゐたから、外觀からは實際氣分の好くない病人らしく見えただらうと思ひます。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる譯に行きません。下女を呼んで膳を下けさせた上、鏡瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合はせてゐます。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問ひました。奥さんはいゝえと答へましたが、今度は向ふで何故ですと聞き返して來ました。私は實は少し話したい事があるのだと云ひました。奥さんは何ですか

と云つて、私の顔を見ました。奥さんの調子は丸で私の氣分に這入り込めないうやうな軽いものでしたから、私の次に出すべき文句も少し溢りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻つた末、Kが近頃何か云ひはしなかつたかと奥さんに聞いて見ました。奥さんは思ひも寄らないといふ風をして、『何を?』とまた反問して來ました。さうして私の答へる前に、『貴方には何か仰やつたんですか?』と却つて向うで聞くのです。

四十五

「Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに傳へる氣のなかつた私は、『いゝえ』といつてしまつた後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覺はないのだから、Kに關する用件ではないのだと云ひ直しました。奥さんは『左右ですか?』と云つて、後を待つてゐます。私は何うしても切り出さなければならなくなりました。私は突然『奥さん、御嬢さんを私に下さい』と云ひました。奥さんは私の豫期してかゝつた程驚ろいた様子も見せませんでした。それでも少時返事が出来なかつたものと見えて、黙つて私の顔を眺めてゐました。一度云ひ出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてゐられませぬ。『下さい、是非下さい』と云ひました。『私の妻としては是非下さい』と云ひました。奥さんは年を取つてゐる丈に、私よりもずつと落付いてゐました。『上げてもしゝが、あんまり急ぢやありませんか?』と聞くのです。私が『急に貰ひたいのだ』とすぐ答へたら笑ひ出しました。さうして『よく考へたのですか?』と念を押すのです。私は云ひ出したのは突然でも、考へたのは突然でないとい

ふ譯を強い言葉で説明しました。

それから未だ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れて仕舞ひました。男のやうに判然とした所のある奥さんは、普通の女と違つて斯んな場合には大變心持よく話の出来る人でした。『宜ごさんす、差し上げませう』と云ひました。『差し上げるなんて威張つた口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰つて下さい。御存じの通り父親の憐れな子です』と後では向ふから頼みました。

話は簡單でかつ明瞭に片付けてしまひました。最初から仕舞迄に恐らく十五分とは掛らなかつたでせう。奥さんは何の條件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から斷ればそれで澤山だと云ひました。本人の意嚮さへたしかめるに及ばないと明言しました。そんな點になると、學問をした私の方が、却つて形式に拘泥する位に思はれたのです。親類は兎に角、當人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは『大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子を遣る筈がありませんから』と云ひました。

自分の室へ歸つた私は、事のあまりに譯もなく進行したのを考へて、却つて變な氣持になりました。果して大丈夫なのだらうかといふ疑念さへ、どこからか頭の底に這ひ込んで來た位です。けれども大體の上

に於て、私の未來の運命は、是で定められたのだといふ觀念が私の凡てを新たにしました。私は午頃又茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝の話を御嬢さんに何時通じてくれる積かと尋ねました。奥さんは、自分さへ承知してゐれば、いつ話しても構はなからうといふやうな事を云ふのです。斯うなると何だか私よりも相手の方が男見たやうなので、私はそれぎり引き込まうとしました。すると奥さん

んが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でも可い、稽古から歸つて來たら、すぐ話さうと云ふのです。私はさうして貰ふ方が都合が好いと答へて又自分の室に歸りました。然し黙つて自分の机の前に坐つて、二人のこそく話を遠くから聞いてゐる私を想像して見ると、何だか落ち付いてゐられないやうな氣もするのです。私はとう／＼帽子を被つて表へ出ました。さうして又坂の下で御嬢さんに行き合ひました。何にも知らない御嬢さんは私を見て驚ろいたらしかつたのです。私が帽子を脱つて『今御歸り』と尋ねると、向ふではもう病氣は癒つたのかと不思議さうに聞くのです。私は『え、癒りました、癒りました』と答へて、すん／＼水道橋の方へ曲つてしまひました。

四十六

「私は猿樂町から神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私が此界限を歩くのは、何時も古本屋をひやかすのが目的でしたが、其日は手摺のした書物などを眺める氣が、何うしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅の事を考へてゐました。私には先刻の奥さんの記憶がありました。夫から御嬢さんが宅へ歸つてからの想像がありました。私はつまり此二つのもので歩かせられてゐた様なものです。其上私は時々往來の真中で我知らず不圖立ち留まりました。さうして今頃は奥さんが御嬢さんにもうあの話をしてゐる時分だらうなどと考へました。また或時は、もうあの話が濟んだ頃だとも思ひました。私はとう／＼萬世橋を渡つて、明神の坂を上つて、本郷臺へ來て、夫から又菊坂を下りて、仕舞に小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離は此三區に跨がつて、いびつな圓を描いたとも云はれるでせうが、

私は此長い散歩の間殆んどKの事を考へなかつたのです。今其時の私を回顧して、何故だと自分に聞いて見ても一向分りません。たゞ不思議に思ふ丈です。私の心がKを忘れ得る位、一方に緊張してゐたと見ればそれ迄ですが、私の良心が又それを許すべき筈はなかつたのですから。

Kに對する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄關から坐敷へ通る時、即ち例のごとく彼の室を抜けやうとした瞬間でした。彼は何時もの通り机に向つて書見をしてゐました。彼は何時もの通り書物から眼を放して、私を見ました。然し彼は何時もの通り今歸つたのかとは云ひませんでした。彼は「病氣はもう癒いのか、醫者へでも行つたのか」と聞きました。私は其利那に、彼の前に手を突いて、詫まりたくなつたのです。しかも私の受けた其時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の真中にでも立つてゐたならば、私は屹度良心の命令に従つて、其場で彼に謝罪したうと思ひます。然し奥には人がゐます。私の自然はすぐ其所で食ひ留められてしまつたのです。さうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはたゞ沈んでゐた丈で、少しも疑ひ深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんは何時もより嬉しさうでした。私だけが凡てを知つてゐたのです。私は鉛のやうな飯を食ひました。其時御嬢さんは何時ものやうにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答へる丈でした。それをKは不思議さうに聞いてゐました。仕舞に何うしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方極りが悪いのだらうと云つて一寸私の顔を見ました。Kは猶不思議さうに、なんで極りが悪いのかと追窮しに掛りました。奥さんは微笑しながら又私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初から、奥さんの顔付で、事の成行を畧推察してゐました。然しKに説明を與へるために、私のゐる前で、それを悉く話されては堪らないと考へました。奥さんはまた其位の事を平氣でする女なのですから、私はひや／＼したのです。幸にKは又元の沈黙に歸りました。平生より多少機嫌のよかつた奥さんも、とう／＼私の恐れを抱いてゐる點までは話を進めずに仕舞ひました。私はほつと一息して室へ歸りました。然し私が是から先Kに對して取るべき態度は、何うしたものだらうか、私はそれを考へずにはゐられませんでした。私は色々の辯護を自分の胸で拵らえて見ました。けれども何の辯護もKに對して面と向ふには足りませんでした。卑怯な私は終に自分で自分をKに説明するのが厭になつたのです。

四十七

「私は其儘二三日過ぎました。其二三日の間Kに對する絶えざる不安が私の胸を重くしてゐたのは云ふ迄もありません。私はたゞでさへ何とかしななければ、彼に濟まないと思つたのです。其上奥さんの調子や、御嬢さんの態度が、始終私を突ツつくやうに刺戟するのですから、私は猶辛かつたのです。何處か男らしい氣性を具へた奥さんは、何時私を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。それ以來ことに目立つやうに思へた私に對する御嬢さんの舉止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは斷言出来ません。私は何とかして、私と此家族との間に成り立つた新しい關係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。然し倫理的に弱點をもつてゐると、自分で自分を認めてゐる私には、それがまた至

難の事のやうに感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改ためてさう云つて貰はうかと考へました。無論私のあるな
い時にです。然しありの儘を告げられては、直接と間接の區別がある丈で、面目のないのに變りはありません。
と云つて、拵え事を話して貰はうとすれば、奥さんから其理由を詰問されるに極つてゐます。もし
奥さんに總ての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱點を自分の愛人と其母親の前に曝け
出さなければなりません。眞面目な私には、それが私の未來の信用に關すると思はれなかつたのです。
結婚する前から戀人の信用を失ふのは、たとひ一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のやうに見えまし
た。

要するに私は正直な路を歩く積で、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。さう
して其所に氣のついてゐるものは、今の所たゞ天と私の心だけだつたのです。然し立ち直つて、もう一步
前へ踏み出さうとするには、今滑つた事を是非共周圍の人に知らなければならぬ窮境に陥つたので
す。私は飽くまで滑つた事を隠したがりでした。同時に、何うしても前へ出すには居られなかつたのです。
私は此間に挟まつてまた立ち竦みました。

五六日経つた後、奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さない
と答へました。すると何故話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私は此問の前に固くなりました。
其時奥さんが私を驚ろかした言葉を、私は今でも忘れずに覚えてゐます。
『道理で妾が話したら變な顔をしてゐましたよ。貴方もよくないぢやありませんか、平生あんなに親し

くしてゐる間柄なのに、黙つて知らん顔をしてゐるのは』

私はKが其時何か云ひはしなかつたかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも云はないと答へまし
た。然し私は進んでもつと細かい事を尋ねずにはゐられませんでした。奥さんは固より何も隠す譯があり
ません。大した話もないかと云ひながら、一々Kの様子を語つて聞かせて呉れました。

奥さんの云ふ所を綜合して考へて見ると、Kは此最後の打撃を、最も落付いた驚をもつて迎へたらしい
のです。Kは御嬢さんと私との間に結ばれた新しい關係に就いて、最初は左右ですかとたゞ一口云つた
丈だつたさうです。然し奥さんが、『あなたも喜んで下さい』と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見
て微笑を洩らしながら、『御目出たう御座います』と云つた儘席を立つたさうです。さうして茶の間の障子
を開ける前に、また奥さんを振り返つて、『結婚は何時ですか』と聞いたさうです。それから『何か御祝ひ
を上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません』と云つたさうです。奥さんの前に坐つてゐる私
は、其話を聞いて胸が塞るやうな苦しさを覺えました。

四十八

「勘定して見ると奥さんがKに話をしてからも二日餘りになります。其間Kは私に對して少しも以前
と異なつた様子を見せなかつたので、私は全くそれに氣が付かずゐたのです。彼の超然とした態度はた
とひ外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考へました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が
遙かに立派に見えました。『おれは策畧で勝つても人間としては負けたのだ』といふ感じが私の胸に渦巻

いて起りました。私は其時さぞKが輕蔑してゐる事だらうと思つて、一人で顔を赧らめました。然し今更

Kの前に出て、耻を搔かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。

私が進まうか止さうかと考へて、兎も角も翌日迄待たうと決心したのは土曜の晩でした。所が其晩に、

Kは自殺して死んで仕舞つたのです。私は今でも其光景を思ひ出すと慄然とします。何時も東枕で寐る私

が、其晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒

い風で不圖眼を覺したのです。見ると、何時も立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、此間の晩と同

じ位開いてゐます。けれども此間のやうに、Kの黒い姿は其所には立つてゐません。私は暗示を受けた人

のやうに、床の上に眩を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く點つてゐるのです。

それで床も敷いてあるのです。然し掛蒲團は跳返されたやうに裾の方に重なり合つてゐるのです。さうし

てK自身は向ふむきに突つ伏してゐるのです。

私はおいと云つて聲を掛けました。然し何の答もありません。おい何うかしたのかと私は又Kを呼びま

した。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際迄行きました。其所から彼の

室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

其時私の受けた第一の感じは、Kから突然戀の自由を聞かされた時のそれと畧同じでした。私の眼は

彼の室の中を一目見るや否や、恰も硝子で作つた義眼のやうに、動く能力を失ひました。私は棒立に立竦

みました。それが疾風の如く私を通過したあとで、私は又あゝ失策つたと思ひました。もう取り返しが付

かないといふ黒い光が、私の未來を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横はる全生涯を物妻く照らしました。さ

うして私がかたく顫へ出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事が出来ませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けま

した。それは豫期通り私の名宛になつてゐました。私は夢中で封を切りました。然し中には私の豫期した

やうな事は何にも書いてありませんでした。私は私に取つて何んなに辛い文句が其中に書き列ねてある

だらうと豫期したのです。さうして、もし夫が奥さんや御嬢さんの眼に觸れたら、何んなに輕蔑されるか

も知れないといふ恐怖があつたのです。私は一寸眼を通した丈で、まづ助かつたと思ひました。(固より

世間體の上で助かつたのですが、其世間體が此場合、私にとつては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡單でした。さうして寧ろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、

自殺するといふ丈なのです。それから今迄私に世話になつた禮が、極あつさりした文句で其後に付け加

へてありました。世話序に死後の片付方も頼みたいといふ言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて濟ま

んから宜しく詫をして呉れといふ句もありました。國元へは私から知らせさせて貰ひたいといふ依頼もありま

した。必要な事はみんな一口づゝ書いてある中に御嬢さんの名前は何處にも見えません。私は仕舞迄讀

んで、すぐKがわざと回避したのだといふ事に氣が付きました。然し私の尤も痛切に感じたのは、最後に

墨の餘りで書き添へたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐるのだらうといふ意味

の文句でした。

私は顫へる手で、手紙を巻き收めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆なの眼に着くやう

に、元の通り机の上に置きました。さうして振り返つて、襖に迸ばしつてゐる血潮を始めて見たのです。

「私は突然Kの頭を抱えるやうに両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかつたのです。然し俯伏になつてゐる彼の顔を、斯うして下から覗き込んだ時、私はすぐ其手を放してしまひました。慄とした許ではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今觸つた冷たい耳と、平生に變らない五分刈の濃い髪を少時眺めてゐました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はたゞ恐ろしかつたのです。さうして其恐ろしさは、眼の前の光景が官能を刺戟して起る單調な恐ろしさ許ではありません。私は忽然と冷たくなつた此友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。私は何の分別もなくまた私の室へ歸りました。さうして八疊の中をぐる／＼廻り始めました。私の頭は無意味でも當分さうして動いてゐると私に命令するのです。私は何うかしなければならぬと思ひました。同時にもう何うする事も出来ないのだと思ひました。座敷の中をぐる／＼廻らなければならぬと思ひました。のです。檻の中へ入れられた熊の様な態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起さうといふ氣になります。けれども女に此恐ろしい有様を見せては悪いといふ心持がすぐ私を遮ります。奥さんは兎に角、御嬢さんを驚ろかす事は、とても出来ないといふ強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐる／＼廻り始めるのです。

私は其間に自分の室の洋燈を点けました。それから時計を折々見ました。其時の時計程埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかつた事は明らかです。ぐる／＼廻りながら、其夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が續くのではなからうかといふ思ひに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。學校は八時に始まる事が多いので、それでないといふ授業に間に合はないのです。下女は其關係で六時頃に起きる譯になつてゐました。然し其日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと云つて注意して呉れました。奥さんは私の足音で眼を覺したのです。私は奥さんに眼が覺めてゐるなら、一寸私の室迄来て呉れと頼みました。奥さんは寐巻の上へ不斷着の羽織を引掛けて、私の後に跟いて來ました。私は室へ這入るや否や、今迄開いてゐた仕切の襖をすぐ立て切りました。さうして奥さんに飛んだ事が出來たと小聲で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顯で隣の室を指すやうにして、『驚ろいちや不可ません』と云ひました。奥さんは蒼い顔をしました。『奥さん、Kは自殺しました』と私がまた云ひました。奥さんは其所に居竦まつたやうに、私の顔を見て黙つてゐました。其時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下けました。『濟みません。私が悪かつたのです。あなたにも御嬢さんにも濟まない事になりました』と詫まりました。私は奥さんと向ひ合ふ迄、そんな言葉を口にする氣は丸でなかつたのです。然し奥さんの顔を見た時不意に我とも知らず左右云つて仕舞つたのです。Kに詫まる事の出来ない私は、斯うして奥さんと御嬢さんに詫びなければならなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらく／＼と懺悔の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釋しなかつたのは私にとつて幸でした。蒼い顔をしながら、『不慮の出來事なら仕方がないぢやありませんか』と慰さめるやうに云つて呉れました。然し其顔

には驚ろきと怖れとが、彫り付けられたやうに、硬く筋肉を攪んでゐました。

五、十

「私は奥さんに氣の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。其時Kの洋燈に油が盡きたと見えて、室の中は殆んど眞暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手にした。入口に立つて奥さんを顧みました。奥さんは私の後から隠れるやうにして、四疊の中を覗き込みました。然し這入らうとはしません。其所は其儘にして置いて、雨戸を開けて呉れと私に云ひました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあつて要領を得てゐました。私は醫者の所へも行きました。又警察へも行きました。然しみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはさうした手續の濟む迄、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んで仕舞つたのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のやうな薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸ばしつたものと知れました。私は日中の光で明らかに其迹を再び眺めました。さうして人間の血の勢といふものの劇しいのに驚ろきました。

奥さんと私は出来る丈の手際と工夫を用ひて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸ひ彼の蒲團に吸収されてしまつたので、疊はそれ程汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不斷の通り寐てる體に横にしました。私はそれから彼の實家へ電報を打ち

に出たのです。

私が歸つた時は、Kの枕元にもう線香が立てられておりました。室へ這入るとすぐ佛臭い烟で鼻を撲たれた私は、其烟の中に坐つてゐる女二人を認めました。私が御嬢さんの顔を見たのは、昨夜來此時が始めてでした。御嬢さんは泣いてゐました。奥さんも眼を赤くしてゐました。事件が起つてからそれ迄泣く事を忘れてゐた私は、其時漸やく悲しい氣分に誘はれる事が出來たのです。私の胸はその悲しさのために、何の位寛ろいだけ知れませんが、苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を與へてくれたものは、其時の悲しさでした。

私は黙つて二人の傍に坐つてゐました。奥さんは私にも線香を上げてやれと云ひます。私は線香を上げて又黙つて坐つてゐました。御嬢さんは私には何とも云ひません。たまに奥さんと一口二口言葉を換はす事がありました。それは當座の用事に即いてのみでした。御嬢さんにはKの生前に就いて語る程の餘裕がまだ出て來なかつたのです。私はそれでも昨夜の物凄いやつを見せずに済んでまだ可かつたと心のうちで思ひました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しくさが、其爲に破壊されて仕舞ひさうで私は怖かつたのです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端迄來た時ですら、私はその考を度外に置いて行動する事は出來ませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じやうな不快がそのうちに籠つてゐたのです。

國元からKの父と兄が出て來た時、私はKの遺骨を何處へ埋めるかに就いて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雜司ヶ谷近邊をよく一所に散歩した事があります。Kには其所が大變氣に入つてゐたの

です。それで私は笑談半分に、そんなに好なら死んだら此所へ埋めて遣らうと約束した覚があるのです。私も今其約束通りKを雜司ヶ谷へ葬つたところで、何の位の功德になるものかとは思ひました。けれども私は私の生きてゐる限り、Kの墓の前に跪まづいて月々私の懺悔を新たにしたかつたのです。今迄構ひ付けなかつたKを、私が萬事世話をして來たといふ義理もあつたのでせう、Kの父も兄も私の云ふ事を聞いて呉れました。

五十一

「Kの葬式の歸り路に、私はその友人の一人から、Kが何うして自殺したのだらうといふ質問を受けました。事件があつて以來、私はもう何度となく此質問で苦しめられてゐたのです。奥さんも御嬢さんも、國から出て來たKの父兄も、通知を出した知り合ひも、彼とは何の縁故もない新聞記者迄も、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかつたのです。私の良心は其度にちく／＼刺されるやうに痛みました。さうして私は此質問の裏に、早く御前が殺したと白状してしまへといふ聲を聞いたのです。私の答は誰に對しても同じでした。私は唯彼の私宛で書き残した手紙を繰返す丈で、外に一口も附加へる事はしませんでした。葬式の歸りに同じ問を掛けて、同じ答を得たKの友人は、懐から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながら其友人によつて指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘當された結果厭世的な考を起して自殺したと書いてあるのです。私は何にも云はずに、其新聞を疊んで友人の手に歸しました。友人は此外にもKが氣が狂つて自殺したと書いた新聞があると云つて教

へて呉れました。忙がしいので、殆んど新聞を読む暇がなかつた私は、丸でさうした方面の知識を缺いてゐましたが、腹の中では始終氣にかゝつてゐた所でした。私は何よりも宅のもの、迷惑になるやうな記事の出るのを恐れたのです。ことに名前丈にせよ御嬢さんが引合に出たら堪らないと思つてゐたのです。私は其友人に外に何とか書いたのではないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、たゞ其一種ぎりだと答へました。

私が今居る家へ引越したのはそれから間もなくでした。奥さんも御嬢さんも前の所にあるのを厭がりませんでしたし、私も其夜の記憶を毎晩繰返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極めたのです。

移つて二ヶ月程してから私は無事に大學を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとう御嬢さんと結婚しました。外側から見れば、萬事が豫期通りに運んだのですから、目出度と云はなければなりません。奥さんも御嬢さんも如何にも幸福らしく見えました。私も幸福だつたのです。けれども私の幸福には黒い影が隨いてゐました。私は此幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思ひました。

結婚した時御嬢さんが、——もう御嬢さんではありませんから、妻と云ひます。——妻が、何を思ひ出したのか、二人でKの墓参をしやうと云ひ出しました。私は意味もなく唯ぎよつとしました。何うしてそんな事を急に思ひ立つたのかと聞きました。妻は二人揃つて御参りをしたら、Kが無喜こぶだらうと云ふのです。私は何事も知らない妻の顔をしげじげ眺めてゐましたが、妻から何故そんな顔をするのかと問はれて始めて氣が付きました。

私は妻の望通り二人連れ立って雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗って遣りました。妻は其前へ線香と花を立てました。二人は頭を下けて、合掌しました。妻は定めて私と一所になった頭末を述べてKに喜んで貰ふ積でしたらう。私は腹の中で、たゞ自分が悪かつたと繰り返す丈でした。其時妻はKの墓を撫で、見て立派だと評してゐました。其墓は大したものではないのですけれども、私自身が石屋へ行つて見立たりした因縁があるので、妻はとくに左右云ひたかつたのでせう。私は其新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新しい白骨とを思ひ比べて、運命の冷罵を感じずにはゐられなかつたのです。私はそれ以後決して妻と一所にKの墓参りをしない事にしました。

五十二

「私の亡友に對する斯うした感じは何時迄も續きました。實は私も初からそれを恐れてゐたのです。年來の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を挙げたと云へば云へない事もないでせう。然し自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによると或は是が私の心持を一轉して新しい生涯に入る端緒になるかも知れないとも思つたのです。所が愈夫として朝夕妻と顔を合せて見ると、私の果敢ない希望は手厳しい現實のために脆くも破壊されてしまひました。私は妻と顔を合せてゐるうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私を何處迄も結び付けて離さないやうにするのです。妻の何處にも不足を感じない私は、たゞ此一點に於て彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐ夫が

映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻から何故そんなに考へてゐるのだとか、何か氣に入らない事があるのだらうとかいふ詰問を受けました。笑つて濟ませる時はそれで差支ないのですが、時によると、妻の痼も高じて來ます。しまひには『あなたは私を嫌つてゐらつしやるんでせう』とか、『何でも私に隠してゐらつしやる事があるに違ない』とかいふ怨言も聞かなくてはなりません。私は其度に苦しみました。

私は一層思ひ切つて、有の儘を妻に打ち明けやうとした事が何度もあります。然しいざといふ間際になると自分以外の有る力が不意に來て私を抑え付けるのです。私を理解してくれる貴方の事だから、説明する必要もあるまいと思ひますが、話すべき筋だから話して置きます。其時分の私は妻に對して己を飾る氣は丸でなかつたのです。もし私が亡友に對すると同じやうな善良な心で、妻の前に懺悔の言葉を並べたら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違ないのです。それを敢てしない私に利害の打算がある筈はありません。私はたゞ妻の記憶に暗黒な一點を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに一雫の印氣でも容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大變な苦痛だつたのだと解釋して下さい。

一年経つてもKを忘れる事の出来なかつた私の心は常に不安でした。私は此不安を驅逐するために書物に溺れやうと力めました。私は猛烈な勢をもつて勉強し始めたのです。さうして其結果を世の中に公にする日の來るのを待ちました。けれども無理に目的を拵えて、無理に其目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私は何うしても書物のなかに心を埋めてゐられなくなりました。私は又腕組をして

世の中を眺めだしたのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと観察してゐたやうでした。妻の家にも親子二人位は坐つてゐて何うか斯うか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支のない境遇にゐたのですから、さう思はれるのも尤もです。私も幾分かスポイルされた氣味がありませう。然し私の動かなかつた原因の主なもの、全く其所にはなかつたのです。叔父に欺むかれた當時の私は、他の頼みにならぬ事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取る丈あつて、自分はまだ確な氣がしてゐました。世間は何うあらうとも此己は立派な人間だといふ信念が何處かにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらくしました。他に愛想を盡かした私は、自分にも愛想を盡かして動けなくなつたのです。

五十三

「書物の中に自分を生理にする事の出来なかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れやうと試みた時期もあります。私は酒が好きだとは云ひませんが、けれども飲めば飲める質でしたから、たゞ量を頼みに心を盛り潰さうと力めたのです。此淺薄な方便はしばらくするうちに私を猶厭世的にしました。私は爛醉の眞最中に不圖自分の位置に氣が付くのです。自分はわざと斯んな眞似をして己れを偽つてゐる愚物だといふ事に氣が付くのです。すると身振ひと共に眼も心も醒めてしまひます。時にはいくら飲んでも斯うした假裝状態にさへ入り込めないで無暗に沈んで行く場合も出て來ます。其上技巧で愉快を買つた後には、屹度

沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛してゐる妻と其母親に、何時でも其所を見せなければならなかつたのです。しかも彼等は彼等に自然な立場から私を解釋して掛ります。

妻の母は時々氣拙い事を妻に云ふやうでした。それを妻は私に隠してゐました。然し自分は自分で、單獨に私を責めなければ氣が濟まなかつたらしいのです。責めると云つても、決して強い言葉ではありません。妻から何か云はれた爲に、私が激した例は殆んどなかつた位ですから。妻は度々何處か氣に入らないのか遠慮なく云つて呉れと頼みました。それから私の未來のために酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて「貴方は此頃人間が違つた」と云ひました。それ丈なら未可いのですけれども、「Kさんが生きてゐたら、貴方もそんなにはならなかつたでせう」と云ふのです。私は左右かも知れないと答へた事がありました。したが、私の答へた意味と、妻の了解した意味とは全く違つてゐたのですから、私は心のうちで悲しかつたのです。それでも私は妻に何事も説明する氣にはなれませんでした。

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔つて遅く歸つた翌日の朝でした。妻は笑ひました。或は黙つてゐました。たまにほろ／＼と涙を落す事もありました。私は何方にしても自分が不愉快で堪らなかつたのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのと詰り同じ事になるのです。私はしまひに酒を止めました。妻の忠告で止めたといふより、自分で厭になつたから止めたと云つた方が適當でせう。

酒は止めたけれども、何もする氣にはなりません。仕方がないから書物を読みます。然し讀めば讀んだなりで、打ち遣つて置きます。私は妻から何の爲に勉強するのかといふ質問を度々受けました。私はたゞ苦笑してゐました。然し腹の底では、世の中で自分が最も信愛してゐるたつた一人の人間すら、自分を理

解してゐないのかと思ふと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思ふと益々悲しかったのです。私は寂寞でした。何處からも切り離されて世の中になつた一人住んでゐるやうな氣のした事も能くありました。

同時に私はKの死因を繰り返し／＼考へたのです。其當座は頭がたゞ戀の一字で支配されてゐた所爲でもありませうが、私の觀察は寧ろ簡單でしかも直線的でした。Kは正しく失戀のために死んだものとすぐ極めてしまつたのです。しかし段々落ち付いた氣分で、同じ現象に向つて見ると、さう容易くは解決が着かないやうに思はれて來ました。現實と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じやうに辿つてゐるのだといふ豫覺が、折々風のやうに私の胸を横通り始めたからです。

五十四

「其内妻の母が病氣になりました。醫者に見せると到底癒らないといふ診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。是は病人自身の爲でもありますし、又愛する妻の爲でもありましたが、もつと大きな意味からいふと、ついに人間の爲でした。私はそれ迄にも何かしたくつて堪らなかつたのだけれど、何もする事が出来ないで已を得ず懷手をしてゐたに違ありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善い事をしたといふ自覺を得たのは此時でした。私は罪滅しとでも

名づけなければならぬ、一種の氣分に支配されてゐたのです。

母は死にました。私と妻はたつた二人ぎりになりました。妻は私に向つて、是から世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたと云ひました。自分自身さへ頼りにする事の出来ない私は、妻の顔を見て思はず涙ぐみました。さうして妻を不幸な女だと思ひました。又不幸な女だと口へ出して云ひました。妻は何故だと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事が出来ないのです。妻は泣きました。私不斷からひねくれた考で彼女を觀察してゐるために、そんな事も云ふやうになるのだと恨みました。

母の亡くなつた後、私は出来る丈妻を親切に取り扱かつて遣りました。たゞ當人を愛してゐたから許ではありません。私の親切には簡人を離れてもつと廣い背景があつたやうです。丁度妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれども其満足のうちには、私を理解し得ないために起るほんやりした稀薄な點が何處かに含まれてゐるやうでした。然し妻が私を理解し得たにした所で、此物足りなさは増すとも減る氣遣はなかつたのです。女には大きな人道の立場から來る愛情よりも、多少義理をはづれても自分丈に集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いやうに思はれますから。

妻はある時、男の心と女の心とは何うしてもぴたりと一つになれないものだらうかと云ひました。私はたゞ若い時ならなれるだらうと曖昧な返事をして置きました。妻は自分の過去を振り返つて眺めてゐるやうでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。

私の胸には其時分から時々恐ろしい影が閃めきました。初めはそれが偶然外から襲つて來るのです。私は驚ろきました。私はぞつとしました。然ししばらくしてゐる中に、私の心が其物凄く閃めきに應ずるやうになりました。しまひには外から來ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでゐるもの、如くに思はれ出して來たのです。私はさうした心持になるたびに、自分の頭が何うかしたのではなからうかと疑つて見ました。けれども私は醫者にも誰にも診て貰ふ氣にはなりませんでした。

私はたゞ人間の罪といふものを深く感じたのです。其感じが私をKの墓へ毎月行かせます。其感じが私に妻の母の看護をさせます。さうして其感じが妻に優しくして遣れと私に命じます。私は其感じのために、知らない路傍の人から鞭たれたいと迄思つた事もあります。斯うした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つ可きだといふ氣になります。自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだといふ考が起ります。私は仕方がないから、死んだ氣で生きて行かうと決心しました。

私がさう決心してから今日迄何年になるでせう。私と妻とは元の通り仲好く暮して來ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。然し私の有つてゐる一點、私に取つては容易ならん此一點が、妻には常に暗黒に見えたりしいのです。それを思ふと、私は妻に對して非常に氣の毒な氣がします。

五十五

「死んだ積で生きて行かうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。然し私が何の方面かへ切つて出やうと思ひ立つや否や、恐ろしい力が何處からか出て來て、私の心をぐいと握り締めて少

しも動けないやうにするのです。さうして其力が私に御前は何をされる資格もない男だと抑え付けるやうに云つて聞かせます。すると私は其一言で直ぐたりと萎れて仕舞ひます。しばらくして又立ち上がらうとすると、又締め付けられます。私は齒を食ひしつて、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷かな聲で笑ひます。自分で能く知つてゐる癖にと云ひます。私は又ぐたりとなります。

波瀾も曲折もない單調な生活を續けて來た私の内面には、常に斯うした苦しい戦争があつたものと思つて下さい。妻が見て齒痒がる前に、私自身が何層倍齒痒い思ひを重ねて來たか知れない位です。私がこの牢屋の中に凝としてゐる事が何うしても出來なくなつた時、又その牢屋を何うしても突き破る事が出來なくなつた時、必竟私にとつて一番樂な努力で遂行出来るものは自殺より外にないと私は感ずるやうになつたのです。貴方は何故と云つて眼を睜るかも知れませんが、何時も私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食ひ留めながら、死の道丈を自由に私のために開けて置くのです。動かすにゐれば兎も角も、少しでも動く以上は、其道を歩いて進まなければ私には進みやうがなくなつたのです。

私は今日に至る迄既に二三度運命の導いて行く最も樂な方向へ進まうとした事があります。然し私は何時でも妻に心を惹かされました。さうして其妻を一所に連れて行く勇氣は無論ないので。妻に凡てを打ち明ける事の出來ない位な私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天壽を奪ふなど、いふ手荒な所作は、考へてさへ恐ろしかつたのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります。二人を一束にして火に燻べるのは、無理といふ點から見ても、痛ましい極端としか私には思へませんでした。

同時に私だけが居なくなつた後の妻を想像して見ると如何にも不憫でした。母の死んだ時、是から世の中頼りにするものは私より外になくなつたと云つた彼女の述懐を、私は腸に沁み込むやうに記憶させられてゐたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止して可かつたと思ふ事もありました。さうして又凝と凍んで仕舞ひます。さうして妻から時時物足りなさうな眼で眺められるのです。記憶して下さい。私は斯んな風にして生きて来たのです。始めて貴方に鎌倉で會つた時も、貴方と一所に郊外を散歩した時も、私の氣分に大した變りはなかつたのです。私の後には何時でも黒い影が括ッ付いてゐました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いてゐたやうなものです。貴方が卒業して國へ歸る時も同じ事でした。九月になつたらまた貴方に會はうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く會ふ氣でゐたのです。秋が去つて、冬が来て、其冬が盡きても、屹度會ふ積でゐたのです。すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな氣がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでした。何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戲ひました。

五十六

「私は殉死といふ言葉を殆んど忘れてゐました。平生使ふ必要のない字だから、記憶の底に沈んだ儘、腐れかけてゐたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思ひ出した時、私は妻に向つてもし自分

が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答へました。私の答も無論笑談に過ぎなかつたのですが、私は其時何だか古い不要な言葉に新らしい意義を盛り込めたやうな心持がしたのです。

それから約一ヶ月程経ちました。御大葬の夜私は何時もの通り書齋に坐つて、相圖の號砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知の如く聞こえました。後で考へると、それが乃木大將の永久に去つた報知にもなつてゐたのです。私は號外を手にして、思はず妻に殉死だ／＼と云ひました。

私は新聞で乃木大將の死ぬ前に書き残して行つたものを讀みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以來、申し譯のために死なう／＼と思つて、つい今日迄生きてゐたといふ意味の句を見た時、私は思はず指を折つて、乃木さんが死ぬ覺悟をしながら生きながらへて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。乃木さんは此三十五年の間死なう／＼と思つて、死ぬ機會を待つてゐたらしいのです。私はさういふ人に取つて、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。

それから二三日して、私はとう／＼自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する譯が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方があるかも知れません。或は箇人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かも知れませんが、私は私の出来る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の叙述で己れを盡した積です。

私は妻を残して行きます。私がるなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷

な驚怖を與へる事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬ積です。妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうにします。私は死んだ後で、妻から頓死したと思はれたいのです。氣が狂つたと思はれても満足なのです。

私が死なうと決心してから、もう十日以上になりませんが、その大部分は貴方に此長い自叙傳の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めは貴方に會つて話をする氣でゐたのですが、書いて見ると、却つて其方が自分を判然描き出す事が出来たやうな心持がして嬉しいのです。私は酔興に書くのではありません。私を生んだ私の過去は、人間の經驗の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上に於て、貴方にとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思ひます。渡邊華山は邯鄲といふ畫を描くために、死期を一週間繰り延べたといふ話をつい先達て聞きました。他から見たら餘計な事のやうにも解釋できませんが、當人にはまた當人相應の要求が心の中にあるのだから已むを得ないとも云はれるでせう。私の努力も單に貴方に對する約束を果すためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

然し私は今其要求を果しました。もう何にもする事はありません。此手紙が貴方の手に落ちる頃には、私はもう此世にはゐないでせう。とくに死んでゐるでせう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病氣で手が足りないといふから私が勸めて遣つたのです。私は妻の留守の間に、この長いものゝ大部分を書きました。時々妻が歸つて來ると、私はすぐそれを隠しました。私は私の過去を善惡ともに他の參考に供する積です。然し妻だけはたつた一人の例外だと承知して下

さい。私は妻には何にも知らせたくないので、妻が己れの過去に對してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのです。私から、私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなな限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい。

道

草

四、六、三——四、九、一四

健三が遠い所から歸つて来て駒込の奥に世帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋しみさへ感じた。

彼の身體には新しく後に見捨てた遠い國の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潛んでゐる彼の誇りと満足には却つて氣が付かなかつた。

彼は斯うした氣分を有つた人に有勝な落付のない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二遍つ、規則のやうに往來した。

ある日小雨が降つた。其時彼は外套も雨具も着けずに、たゞ傘を差した丈で、何時もの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行つた。すると車屋の少しさきで思ひ懸けない人にはたりと出會つた。其人は根津權現の裏門の坂を上つて、彼と反對に北へ向いて歩いて來たものと見えて、健三が行手を何氣なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。さうして思はず彼の眼をわきへ外させたのである。

彼は知らん顔をして其人の傍を通り抜けようとした。けれども彼にはもう一遍此男の眼鼻立を確める必要があつた。それで御互が二三間の距離に近づいた頃又眸を其人の方角に向けた。すると先方ではもう疾

くに彼の姿を凝と見詰めてゐた。

往來は静であつた。二人の間にはたゞ細い雨の絲が絶間なく落ちてゐる丈なので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかつた。健三はすぐ眼をそらして又眞正面を向いた儘歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ氣色なく、ぢつと彼の通り過ぎるのを見送つてゐた。健三は其の顔が彼の歩調につれて、少しづつ動いて廻るのに氣が着いた位であつた。

彼は此男に何年會はなかつたらう。彼が此男と縁を切つたのは、彼がまだ二十歳になるかならない昔の事であつた。それから今日迄に十五六年の月日が経つてゐるがその間彼等はつひそ一度も顔を合せた事になかつたのである。

彼の位地も境遇もその時分から見ると丸で變つてゐた。黒い髭を生やして山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさへ隔世の感が起らないとも限らなかつた。然しそれにしても相手があまりに變らな過ぎた。彼は何う勘定しても六十五六であるべき筈の其人の髪が、何故今でも元の通り黒いのだらうと思つて、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通してゐる其人の特色も、彼には異な氣分を與へる媒介となつた。

彼は固より其人に出會ふ事を好まなかつた。萬一出會つても其人が自分より立派な服装でもしてゐて呉れ、ば好いと思つてゐた。然し今目前見た其人は、あまり裕福な境遇に居るとは誰が見ても決して思へなかつた。帽子を被らないのは當人の自由としても、羽織なり着物なりに就いて判断したところ、何うしても中流以下の活計を營んでゐる町家の年寄としか受取れなかつた。彼は其人の差してゐた洋傘が、重さう

な毛織子であつた事に迄氣が付いてゐた。

其日彼は家へ歸つても途中で會つた男の事を忘れ得なかつた。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つてゐた其人の眼付に惱まされた。然し細君には何も打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も黙つてゐる夫に對しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

二

次の日健三は又同じ時刻に同じ所を通つた。其次の日も通つた。けれども帽子を被らない男はもう何處からも出て來なかつた。彼は機械のやうに又義務のやうに何時もの道を往つたり來たりした。

斯うした無事の日が五日續いた後、六日目の朝になつて帽子を被らない男は突然又根津權現の坂の蔭から現はれて健三を脅した。それが此前と略同じ場所、時間も殆ど此前と違はなかつた。

其時健三は相手の自分に近づくのを意識しつゝ、何時もの通り機械のやうに又義務のやうに歩かうとした。けれども先方の態度は正反對であつた。何人をも不安にしなければ已まない程な注意を雙眼に集めて彼を凝視した。隙さへあれば彼に近付かうとする其人の心が曇り出した。其のうちにありくと讀まれた。出來る丈容赦なく其傍を通り抜けた健三の胸には變な豫覺が起つた。

「とても是丈では濟むまい」

然し其日家へ歸つた時も、彼はつひに帽子を被らない男の事を細君に話さずにしたつた。

彼と細君と結婚したのは今から七八年前で、もう其時分には此男との關係がとくの昔に切れてゐたし、其上結婚地が故郷の東京でなかつたので、細君の方ではちかきにその人を知る筈がなかつた。然し噂として丈なら或は健三自身の口から既に話してゐたかも知れず、又彼の親類のものから聞いて知つてゐないとも限らなかつた。それは何れにしても健三にとつて問題にはならなかつた。

たゞ此事件に關して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事實が一つあつた。五六年前彼がまだ地方にゐる頃、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。其時彼は變な顔をして其手紙を読んだ。然しいくら讀んでも／＼讀み切れなかつた。半紙二十枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はつひにそれを細君の手に渡してしまつた。

其時の彼には自分宛でこんな長い手紙をかけた女の素性を細君に説明する必要があつた。それから其女に關聯して、是非とも此帽子を被らない男を引合に出す必要もあつた。健三はさうした必要にせまられた過去の自分を記憶してゐる。然し機嫌買な彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやつたか、その點になると、彼はもう忘れてゐた。細君は女の事だからまだ判然覺えてゐるだらうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問ひ訊して見る氣も起らなかつた。彼は此長い手紙を書いた女と、此帽子を被らない男とを一所に並べて考へるのが大嫌ひだつた。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介となるからであつた。幸ひ彼の目下の状態はそんな事に屈託してゐる餘裕を彼に與へなかつた。彼は家へ歸つて衣服を着換へると、すぐ自分の書齋へ這入つた。彼は始終その六疊敷の狭い疊の上に自分のする事が山のやうに積んであるやうな氣持であるのである。けれども實際から云ふと、仕事をするよりも、しなればならないとい

ふ刺戟の方が、遙に強く彼を支配してゐた。自然彼はいら／＼しなればならなかつた。彼が遠い所から持つて來た書物の箱を此六疊の中で開けた時、彼は山のやうな洋書の裡に胡坐をかいて一週間も二週間も暮らしてゐた。さうして何でも手に觸れるものを片端から取り上げては二三頁づつ讀んだ。それがため肝心の書齋の整理は何時迄經つても片付かなかつた。しまひに此體たらくを見るに見かねた或友人が來て、順序にも冊數にも頓着なく、ある丈の書物をさつさと書棚の上に並べてしまつた。彼を知つてゐる多數の人は彼を神經衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じてゐた。

三

健三は實際其日々の仕事に追はれてゐた。家へ歸つてからも氣樂に使へる時間は少しもなかつた。其上彼は自分の讀みたいものを讀んだり、書きたい事を書いたり、考へたい問題を考へたりしたかつた。それで彼の心は殆ど餘裕といふものを知らなかつた。彼は始終机の前にこびり着いてゐた。

娛樂の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙しがつてゐる彼が、ある時友達から謠の稽古を勧められて、體よくそれを斷つたが、彼は心のうちで、他人には何うしてそんな暇があるのだらうと驚いた。さうして自分の時間に対する態度が、恰も守錢奴のそれに似通つてゐる事には、丸で氣がつかかなかつた。

自然の勢ひ彼は社交を避けなければならなかつた。人間をも避けなければならなかつた。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなる程、人としての彼は孤獨に陥らなければならなかつた。彼は臍氣にその淋しさを感じる場合さへあつた。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるといふ自信を持つてゐた。

だから索寞たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それが却つて本來だとばかり心得てるた。温い人間の血を枯らしに行くのだとは決して思はなかつた。

彼は親類から變人扱にされてゐた。然しそれは彼に取つて大した苦痛にもならなかつた。

「教育が違ふんだから仕方がない」

彼の腹の中には常に斯ういふ答辯があつた。

「矢つ張り手前味噌よ」

是は何時でも細君の解釋であつた。

氣の毒な事に健三は斯うした細君の批評を超越する事が出来なかつた。さう云はれる度に氣不味い顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心から忌々しく思つた。ある時は叱り付けた。又ある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の癩癩が細君の耳に空威張をする人の言葉のやうに響いた。細君は「手前味噌」の四字を「大風呂敷」の四字に訂正するに過ぎなかつた。

彼には一人の腹違の姉と一人の兄があるぎりであつた。親類と云つた所で此二軒より外に持たない彼は、不幸にして其二軒ともあまり親しく往來をしてゐなかつた。自分の姉や兄と疎遠になるといふ變な事實は、彼に取つても餘り氣持の好いものではなかつた。然し親類づきあひよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ歸つて以後既に三四回彼等と顔を合せたといふ記憶も、彼には多少の言辭になつた。もし帽子を被らない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの通り千駄木の町を毎日二返規則正しく往來する丈で、當分の方角へは足を向けずにはしまつたらう。もし其間に身體の樂に出來

る日曜が来たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢を疊の上に横たへて半日の安息を食ふに過ぎなかつたらう。然し次の日曜が来た時、彼は不圖途中で二度會つた男の事を思ひ出した。さうして急に思ひ立つたやうに姉の宅へ出掛けた。姉の宅は四谷の津の守坂の横で、大通りから一町ばかり奥へ引込んだ所にあつた。彼女の夫といふのは健三の從兄にあたる男だから、つまり姉にも從兄であつた。然し年齢は同年か一つ違で、健三から見ると雙方とも、一廻りも上であつた。此夫がもと四谷の區役所へ勤めた縁故で、彼が其處を已めた今日でも、まだ馴染の多い土地を離れるのが厭だといつて、姉は今の勤先に不便なものも構はず、矢つ張り元の古ほけた家に住んでゐるのである。

四

此姉は喘息持であつた。年が年中せいく云つてゐた。それでも生れ付が非常な痲性なので、餘程苦しくないと決して癡としてゐなかつた。何か用を拵へて狭い家の中を始終ぐる／＼廻つて歩かないと承知しなかつた。其落付のないがさつな態度が健三の眼には如何にも氣の毒に見えた。

姉は又非常に喋舌る事の好きな女であつた。さうして其喋舌り方に少しも品位といふものがなかつた。彼女と對坐する健三は屹度苦い顔をして黙らなければならなかつた。

「是が己の姉なんだからなあ」

彼女と話をした後の健三の胸には何時でも斯ういふ述懐が起つた。

其日健三は例の如く櫛を掛けて戸棚の中を掻きまはしてゐる此姉を見出した。

「まあ珍しく能く来て呉れたこと。さあ御敷きなさい」
姉は健三に座蒲團を勧めて縁側へ手を洗ひに行つた。

健三は其留守に座敷のなかを見廻した。欄間には彼が子供の時から見覚えのある古ほけた額が懸つてゐた。其落款に書いてある筒井憲といふ名は、たしか旗本の書家か何かで、大變字が上手なんだと、十五六の昔此處の主人から教へられた事を思ひ出した。彼はその主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行つたものである。さうして年から云へば叔父甥程の相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲をとつては姉から怒られたり、屋根へ登つて無花果を撈いで食つて、其皮を隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたりした。主人が箱入りのコンパスを買つて遣ると云つて彼を騙したなり何時迄経つても買つてくれなかつたのを非常に恨めしく思つた事もあつた。姉と喧嘩をして、もう向うから謝罪つて來ても堪忍してやらないと覺悟を極めたが、いくら待つてゐても、姉が詫らないので、仕方なしに此方からのこゝく出掛けて行つた癖に、手持無沙汰なので、向うで御這入りといふ迄、黙つて門口に立つてゐた滑稽もあつた。

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明かな記憶の探照燈を向けた。さうして夫程世話になつた姉夫婦に、今は大した好意を有つ事が出來にくゝなつた自分を不快に感じた。

「近頃は身體の具合はどうです。あんまり非道く起る事もありませんか」
彼は自分の前に坐つた姉の顔を見ながら斯う訊ねた。

「え、有難う。御蔭さまで陽氣が好いもんだから、まあ何うか斯うか家の事丈は遣つてゐるんだけど、でも矢張り年が年だからね。とても昔の様にがせいに働く事は出來ないのさ。昔健ちやんの遊びに來てくれた時分にや、随分尻つ端折りで、夫こそ御釜の御尻迄洗つたもんだが、今ちやとてもそんな元氣はありやしない。だけど御蔭様で斯う遣つて毎日牛乳も飲んでるし……」

健三は些少ながら月々いくらかの小遣を姉に遣る事を忘れなかつたのである。

「少し瘦せた様ですね」
「なに是や私の持前だから仕方がない。昔から肥つた事のない女なんだから、矢つ張り癩が強いもんだからね。癩で肥る事が出來ないんだよ」

姉は肉のない細い腕を捲つて健三の前に出して見せた。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黒い半圓形の暈が、怠さうな皮で物憂げに染めてゐた。健三は黙つて其はさくした手の平を見詰めた。

「でも健ちやんは立派になつて本當に結構だ。御前さんが外國へ行く時なんか、もう二度と生きて會ふ事は六づかしからうと思つたのに、それでもよくまあ達者で歸つて來られたのね。御父さんや御母さんが生きて御出でだつたら嘸御喜びだらう」

姉の眼にはいつか涙が溜つてゐた。姉は健三の子供の時分「今に姉さんに御金が出來たら、健ちやんに何でも好きなものを買つて上げるよ」と口癖のやうに云つてゐた。さうかと思ふと、「こんな偏窟ぢや此子はとても物にやならない」とも云つた。健三は姉の昔の言葉やら語氣やらを思ひ浮べて、心の中で苦笑した。

そんな古い記憶を喚び起すにつけても、久しく會はなかつた姉の老けた様子が一層健三の眼についた。

「時に姉さんは幾何でしたかね」

「もう御婆さんさ。取つて一だもの御前さん」

姉は黄色い疎らな齒を出して笑つて見せた。實際五十一とは健三にも意外であつた。

「すると私とは一廻以上違ふんだね。私や又精々違つて十か十一だと思つてゐた」

「どうして一廻どころか。健ちゃんとは十六違ふんだよ、姉さんは。良人が未の三碧で姉さんが四線な

んだから。健ちゃんもは慥か七赤だつたね」

「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」

「繰つて見て御覽、屹度七赤だから」

健三はどうして自分の星を繰るのかそれさへ知らなかつた。年齢の話はそれぎり已めてしまつた。

「今日は御留守なんですか」と比田の事を訊いて見た。

「昨夕も宿直でね。なに自分の分だけなら月に三度か四度で済むんだけれども、他に頼まれるもんだか

らね。それに一晩でも餘計泊りさへすればやつぱり若干かになるだらう、それでつい他の分迄引受ける氣

にもなるのさ。此頃ちや彼方へ寝るのと此方へ歸るのと、まあ半々位なものだらう。ことによると、向う

へ泊る方が却つて多いかも知れないよ」

健三は黙つて障子の傍に据ゑてある比田の机を眺めた。硯箱や状態袋や巻紙がきちりで行儀よく並んでゐる傍に、簿記用の帳面が赤い脊皮を此方へ向けて、二三冊立て懸けてあつた。それから綺麗に光つた小さい算盤も其下に置いてあつた。

噂によると比田は此頃變な女に關係をつけて、それを自分の勤め先のつい近くに圍つてゐるといふ評判

であつた。宿直だ宿直だと云つて宅へ歸らないのは、或はその所爲ぢやなからうかと健三には思へた。

「比田さんは近頃どうです。大分年を取つたから元とは違つて眞面目になつたでせう」

「なに矢つ張り相變らずさ。ありや一人で遊ぶために生れて来た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席

だ、やれ芝居だ、やれ相撲だつて、御金さへありや年中飛んで歩いてるんだからね。でも奇體なもん

で、年の所爲だか何だか知らないが、昔に比べると、少しは優しくなつたやうだよ。もとは健ちゃんも知

つてる通りの始末で、随分烈しかつたもんだがね。蹴つたり、敲いたり、髪の手を持つて座敷中引摺廻し

たり……」

「其代り姉さんも負けてる方ぢやなかつたんだからな」

「なに私や手出しなんかした事あ、つい一度だつてありやしない」

健三は勝氣な姉の昔を考へ出してつい可笑しくなつた。二人の立ち廻りは今姉の自白するやうに受身の

ものばかりでは決してなかつた。ことに口は姉の方が比田に比べると十倍も達者だつた。それにしても此

利かぬ氣の姉が、夫に騙されて、彼が宅へ歸らない以上、屹度會社へ泊つてゐるに違ひないと信じ切つて

ゐるのが妙に不憫に思はれて来た。

「久し振に何か奢りませうか」と姉の顔を眺めながら云つた。

「ありがと、今御鯨をさういつたから、珍らしくもあるまいけれども、食べてつて御呉れ」

姉は客の顔さへ見れば、時間に關係なく、何か食はせなければ承知しない女であつた。健三は仕方がないから尻を落付けてゆつくり腹の中に持つて来た話を姉に切り出す氣になつた。

六

近頃の健三は頭を餘計遣ひ過ぎる所爲か、どうも胃の具合が好くなかつた。時々思ひ出したやうに運動して見ると、胸も腹も却つて重くなる丈であつた。彼は要心して三度の食事以外には成るべく物を口へ入れないやうに心掛けてゐた。それでも姉の悪強には敵はなかつた。

「海苔巻なら身體に障りやしないよ。折角姉さんが健ちゃんに御馳走しようと思つて取つたんだから、是非食べて御呉れな。厭かい」

健三は仕方なしに旨くもない海苔巻を頬張つて、好い加減煙草で荒らされた口のうちをもぐくさせた。姉が餘り饒舌るので、彼は何時迄も自分の云ひたい事が云へなかつた。訊きたい問題を持つてゐながら、斯う受身な會話ばかりしてゐるのが、彼には段々むづ痒くなつて来た。然し姉にはそれが一向通じないらしかつた。

他に物を食はせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三が此前賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣らうかと云ひ出した。

「あんなものあ、宅にあつたつて仕方がないんだから、持つて御出でよ。なに比田だつて要りやしないやね、汚い達磨なんか」

健三は貰ふとも貰はないとも云はずにたゞ苦笑してゐた。すると姉は何か秘密話でもするやうに急に調子を低くした。

「實は健ちゃん、御前さんが歸つて来たら、話さう／＼と思つて、つい今日迄黙つてたんだがね。健ちゃんも歸りたてで嘸忙しからうし、夫に姉さんが出掛けて行くにしたところで、お住さんが居ちや、少し話し悪い事だしね。さうかつて、手紙を書かうにも御存じの無筆だらう……」

姉の前置は長たらしくもあり、又滑稽でもあつた。小さい時分いくら手習をさせても記憶が悪くつて、どんなに平易しい字も、とう／＼頭へ這入らず仕舞に、五十の今日迄生きて来た女だと思ふと、健三にはわが姉ながら氣の毒でもあり又うら恥づかしくもあつた。

「それで姉さんの話つてえな、一體どんな話だんです。實は私も今日は少し姉さんに話があつて来たんだが」

「さうかい夫ぢやお前さんの方のから先へ聴くのが順だつたね。何故早く話さなかつたの」

「だつて話せないんだもの」

「そんなに遠慮しないでもいゝやね。姉弟の間ぢやないか、お前さん」
姉は自分の多辯が相手の口を塞いでゐるのだといふ明白な事實には毫も氣が付いてゐなかつた。
「まあ姉さんの方から先へ片付けませう。何ですか、あなたの話つていふのは」

「實は健ちゃんにはまことに氣の毒で、云ひ悪いんだけれども、あたしも段々年を取つて身體は弱くなるし、夫に良人があの通りの男で、自分一人さへ好けりや女房なんか何うなつたつて、己の知つた事ぢやないつて顔をしてゐるんだから。——尤も月々の取高が少い上に、交際もあるんだから、仕方がないと云へば夫迄だけれどもね……」

姉の云ふ事は女丈に随分曲りくねつてゐた。中々容易な事で目的地へ達しさうになかつたけれども、其主意は健三によく解つた。つまり月々遣る小遣をもう少し増して呉れといふのだらうと思つた。今でさへそれをよく夫から借りられてしまふといふ話を耳にしてゐる彼には、此請求が憐れでもあり、又腹立たしくもあつた。

「どうか姉さんを助けると思つてね。姉さんだつて此身體ぢやどうせ長い事もあるまいから」
是が姉の口から出た最後の言葉であつた。健三はそれでも厭だとは云ひかねた。

七

彼は是から宅へ歸つて今夜中に片付けなければならぬ明日の仕事をもつてゐた。時間の價値といふものを少しも認めない此姉と對坐して、何時迄も、べんべんと喋舌つてゐるのは、彼にとつて多少の苦痛に違なかつた。彼は好加減に歸らうとした。さうして歸る間際になつてやつと帽子を被らない男の事を云ひ出した。

「實は此間島田に會つたんですがね」

「へえ何處で」

姉は吃驚したやうな聲を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい仰山な表情をしたがる女であつた。

「太田の原の傍です」

「ぢや御前さんのぢき近所ぢやないか。どうしたい、何か言葉でも掛けたかい」
「掛けるつて、別に言葉の掛けやうもないんだから」

「さうさね。健ちゃんの方から何とか云はなきや、向うで口なんぞ利けた義理でもないんだから」

姉の言葉は出来る丈健三の意を迎へるやうな調子であつた。彼女は健三に「どんな服装をしてゐたい」と訊き足した後で、「ぢや矢つ張り樂でもないんだね」と云つた。其處には多少の同情も籠つてゐるやうに見えた。然し男の昔を話し出した時にはさもなく悪らしさうな語氣を用ひ始めた。

「なんほ因業だつて、あんな因業な人つたらありやしないよ。今日が期限だから、是が非でも取つて行くつて、いくら言譯を云つても、坐り込んで動かないんだもの。仕舞に此方も腹が立つたから、お氣の毒さま、お金はありませんが、品物で好ければ、お鍋でもお釜でも持つてつて下さいつて云つたらね、ぢや釜を持つてくつて云ふんだよ。あきれぬぢやないか」

「釜を持つて行くつたつて、重くつて到底持てやしないでせう」
「ところがあの業突張の事だから、どんな事をして持つてかないとも限らないのさ。そら其日の御飯をあたしに炊かせまいと思つて、さういふ意地の悪い事をする人なんだからね。どうせ先へ寄つて好い事あ

ない善だあね」

健三の耳には此話がたゞの滑稽としては聞こえなかつた。其人と姉との間に起つた斯んな交渉のなかに引絡まつてゐる古い自分の影法師は、彼に取つて可笑しいといふよりも寧ろ悲しいものであつた。

「私や島田に二度會つたんですよ、姉さん。是から先又何時會ふか分らないんだ」

「い、から知らん顔をして御出でよ。何度會つたつて構はないぢやないか」

「然し、わざわざ彼處いらを通つて、私の宅でも探してゐるんだか、また用があつて通りが、りに偶然出つくはしたんだか、それが分らないんでね」

此疑問は姉にも解けなかつた。彼女はたゞ健三に都合の好ささうな言葉を無意味に使つた。それが健三には空御世辭のごとく響いた。

「此方へは其後丸で来ないんですか」

「あ、此二三年は丸つきり来ないよ」

「其前は？」

「其前はね、ちよく／＼つて程でもないが、それでも時々は來たのさ。それが又可笑しいんだよ。來ると何時でも十一時頃でね。鰻飯かなにか食べさせないと決して歸らないんだからね。三度の御まんまを一かたけでも好いから他の家で食べようつて云ふのがつまりあの人の腹なんだよ。其辯服装なんか可なりなものを着てゐるんだがね。……」

姉のいふ事は脱線しがちであつたけれども、それを聴いてゐる健三には、矢張り金錢上の問題で、自分が東京を去つたあとも、なほ多少の交際が二人の間に持續されてゐたのだといふ見當はついた。然しそれ以上何も知る事は出来なかつた。目下の島田に就いては全く分らなかつた。

八

「島田は今でも元の處に住んでゐるんだらうか」

斯んな簡単な質問さへ姉には判然答へられなかつた。健三は少し的が外れた。けれども自分の方から進んで島田の現在の居所を突き留めようと迄は思つてゐなかつたので、大した失望も感じなかつた。彼は此場合まだそれ程の手續を盡す必要がないと信じてゐた。たとひ盡すにした所で、一種の好奇心を満足するに過ぎないとも考へてゐた。其上今の彼は斯ういふ好奇心を輕蔑しなければならなかつた。彼の時間はそんな事に使用するには餘りに高價すぎた。

彼はたゞ想像の眼で、子供の時分見た其人の家と、其家の周囲とを、心のうちに思ひ浮べた。

其處には往來の片側に幅の廣い大きな堀が一丁も續いてゐた。水の變らない其堀の中は腐つた泥で不快に濁つてゐた。所々に蒼い色が湧いて厭な臭さへ彼の鼻を襲つた。彼はその汚ならしい一廓を——様のお屋敷といふ名で覚えてゐた。

堀の向う側には長屋がすつと竝んでゐた。其長屋には一軒に一つ位の割で四角な暗い窓が開けてあつた。石垣とすれ／＼に建てられた此長屋が何處迄も續いてゐるので、お屋敷のなかは丸で見えなかつた。

此お屋敷と反對の側には小さな平家が疎らに竝んでゐた。古いのも新しいのもごちや／＼に交つてゐた

其町並は無論不揃であつた。老人の齒のやうに所々が空いてゐた。その空いてゐる所を少し許り買つて島田は彼の住居を拵へたのである。

健三はそれが何時出来上つたか知らなかつた。然し彼が始めてそこへ行つたのは新築後まだ間もないうちであつた。四間しかない狭い家だつたけれども、木口杯は可成吟味してあるらしく子供の眼にも見えた。間取にも工夫があつた。六疊の座敷は東向で、松葉を敷き詰めた狭い庭に、大き過ぎる程立派な御影の石燈籠が据ゑてあつた。

綺麗好きで島田は、自分で尻端折りをして、絶えず濡雑巾を縁側や柱へ掛けた。それから跣足になつて、南の居間の前栽へ出て、草撈りをした。あるときは鋏を使つて、門口の泥溝も浚つた。其泥溝には長さ四尺ばかりの木の橋が懸つてゐた。

島田はまた此住居以外に粗末な貸家を一軒建てた。さうして雙方の家の間を通り抜けて裏へ出られるやうに三尺ほどの路を付けた。裏は野とも畠とも片のつかない湿地であつた。草を踏むとじくじく水が出た。一番凹んだ所などは始終淺い池のやうになつてゐた。島田は追々其處へも小さな貸家を建てる積であるらしかつた。然し其企ては何時迄も實現されなかつた。冬になると鴨が下りるから、今度は一つ捕つてやうらう杯と云つてゐた。……

健三は斯ういふ昔の記憶を夫から夫へと繰り返した。今其處へ行つて見たら定めし驚く程變つてゐるだらうと思ひながら、彼はなほ二十年前の光景を今日の事のやうに考へた。「いことによると、良人では年始状態まだ出してゐるかも知れないよ」

健三の歸る時、姉は斯んな事を云つて、暗に比田の戻る迄話して行けと勧めたが、彼にはそれ程の必要もなかつた。

彼は其日無沙汰見舞かたぐ市ヶ谷の薬王寺前にゐる兄の宅へも寄つて、島田の事を訊いて見ようかと考へてゐるが、時間の遅くなつたのと、どうせ訊いたつて仕方がないといふ氣が次第に強くなつたのとで、それなり駒込へ歸つた。其晩は又翌日の仕事に忙殺されなければならなかつた。さうして島田の事は丸で忘れてしまつた。

九

彼はまた平生の我に歸つた。活力の大部分を擧げて自分の職業に使ふ事が出来た。彼の時間は靜かに流れた。然し其靜かなうちには始終いら／＼するものがあつて、絶えず彼を苦しめた。遠くから彼を眺めてゐなければならなかつた細君は、別に手の出しやうもないので澄ましてゐた。それが健三には妻にあるまじき冷淡としか思へなかつた。細君はまた心の中で彼と同じ非難を夫の上に投げ掛けた。夫の書齋で暮らす時間が多くなればなる程、夫婦間の交渉は、用事以外に少くならなければならぬ筈だと云ふのが細君の方の理窟であつた。

彼女は自然の勢ひ健三を一人書齋に遺して置いて、子供丈を相手にした。其子供たちはまた滅多に書齋へ這入らなかつた。たまに這入ると、屹度何か悪戯をして健三に叱られた。彼は子供を叱る癖に、自分の傍へ寄り付かない彼等に對して、やはり一種の物足りない心持を抱いてゐた。

一週間後の日曜が来た時、彼は丸で外出しなかつた。気分を變へるため四時頃風呂へ行つて歸つたら、急にうつとりした好い氣持に襲はれたので、彼は手足を疊の上へ伸ばしたまゝ、つい假寐をした。さうして晩食の時刻になつて、細君から起される迄は、首を切られた人のやうに何事も知らなかつた。然し起きて膳に向つた時、彼には微かな寒氣が脊筋を上から下へ傳はつて行くやうな感じがあつた。その後で烈しい嚏が二つ程出た。傍にゐる細君は黙つてゐた。健三も何も云はなかつたが、腹の中では斯うした同情に乏しい細君に對する厭な心持を意識しつゝ、箸を取つた。細君の方ではまた夫が何故自分に何もかも隔意なく話して、能動的に細君らしく振舞はせないのかと、その方を却つて不愉快に思つた。

其晩彼は明かに多少風邪氣味であるといふ事に氣が付いた。用心して早く寢ようと思つたが、ついしかけた仕事に妨げられて、十二時過ぎ起きてゐた。彼の床に入る時には家内のものはもう皆寢てゐた。熱い葛湯でも飲んで、發汗したい希望をもつてゐた健三は、已むを得ず其儘冷い夜具の裏に潛り込んだ。彼は例にない寒さを感じて、寢付が大變悪かつた。然し頭腦の疲勞は程なく彼を深い眠りの境に誘つた。翌日眼を覺した時は存外安靜であつた。彼は床の中で、風邪はもう癒つたものと考へた。然し愈起きて顔を洗ふ段になると、何時もの冷水摩擦が退儀な位身體が倦怠くなつてきた。勇氣を鼓して食卓に着いて見たが、朝食は少しも旨くなかつた。いつもは規定として三膳食べる所を、其日は一膳で済ました後、梅干を熱い茶の中に入れてふう／＼吹いて呑んだ。然し其意味は彼自身にも解らなかつた。此時も細君は健三の傍に坐つて給仕をしてゐたが、別に何も云はなかつた。彼には其態度がわざと冷淡に構へてゐる技巧の如く見えて多少腹が立つた。彼はことさらな咳を二度も三度もして見せた。夫でも細君は依然として

十

取り合はなかつた。

健三はさつさと頭から白襦衣を被つて洋服に着換へたなり例刻に宅を出た。細君は何時もの通り帽子を持つて夫を立關迄送つて來たが、此時の彼にはそれがたゞ形式丈を重んずる女としか受取れなかつたので、彼は猶厭な心持がした。

外ではしきりに悪感を感じた。舌が重々しくばさつて、熱のある人のやうに身體全體が倦怠かつた。彼は自分の脈を取つて見て、其早いのに驚いた。指頭に觸れるピン／＼いふ音が、秒を刻む袂時計の音と錯綜して、彼の耳に異様な節奏を傳へた。それでも彼は我慢して、爲る丈の仕事を外でした。

彼は例刻に宅へ歸つた。洋服を着換へる時、細君は何時もの通り、彼の不斷着を持つた儘、彼の傍に立つてゐた。彼は不快な顔をして其方を向いた。

「床を取つて呉れ。寢るんだ」

「はい」

細君は彼のいふが儘に床を延べた。彼はすぐ其中に入つて寢た。彼は自分の風邪氣の事を一口も細君に云はなかつた。細君の方でも一向其處に注意してゐない様子を見せた。それで雙方とも腹の中には不平があつた。

健三が眼を塞いでうつら／＼してゐると、細君が枕元へ來て彼の名を呼んだ。

「あなた御飯を召上がりですか」

「飯なんか食ひたくない」

細君はしばらく黙つてゐた。けれどもすぐ立つて部屋の外へ出て行かうとはしなかつた。

「あなた、何うかなすつたんですか」

健三は何も答へずに、顔を半分ほど夜具の襟に埋めてゐた。細君は無言のまゝ、そつと其手を彼の額の上に加へた。

上に加へた。

晩になつて醫者が來た。たゞの風邪だらうと云ふ診察を下して、水薬と頓服を呉れた。彼はそれを細君の手から飲まして貰つた。

翌日は熱が猶高くなつた。醫者の注意によつて護謨の水囊を彼の頭の上に載せた細君は、蒲團の下に差し込むニッケル製の器械を下女が買つてくる迄、自分の手で落ちないやうにそれを抑へてゐた。

魔に襲はれたやうな気分が二三日つゝいた。健三の頭には其間の記憶といふものが殆どない位であつた。正氣に歸つた時、彼は平氣な顔をして天井を見た。それから枕元に坐つてゐる細君を見た。さうして急に其細君の世話になつたのだといふ事を思ひ出した。然し彼は何も云はずに又顔を背けてしまつた。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかつた。

「あなた何うなすつたんです」

「風邪を引いたんだつて、醫者が云ふぢやないか」

「そりや解つてます」

會話はそれで途切れてしまつた。細君は厭を顔をしてそれぎり部屋を出て行つた。健三は手を鳴らして又細君を呼び戻した。

「己が何うしたといふんだい」

「何うしたつて、——あなたが御病氣だから、私だつて斯うして水囊を更へたり、藥を注いだりして上げるんぢやありませんか。それを彼方へ行けの、邪魔だのつて、あんまり……」

細君は後を云はずに下を向いた。

「そんな事を云つた覚えはない」

「そりや熱の高い時仰しやつた事ですから、多分覚えちや居らつしやらないでせう。けれども平生からさう考へてさへ居らつしやらなければ、いくら病氣だつて、そんな事を仰しやる譯がないと思ひますわ」
斯んな場合に健三は細君の言葉の奥に果してどの位な眞實が潜んで居るだらうかと反省して見るよりも、すぐ頭力で彼女を抑へつけたがる男であつた。事實の問題を離れて、單に論理の上から行くと、細君の方が此場合も負であつた。熱に浮かされた時、魔睡薬に酔つた時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思つて居る事ばかり物語るとは限らないのだから。然しさうした論理は決して細君の心を服するに足らなかつた。

「よござんす。何うせあなたは私を下女同様に取り扱ふ積で居らつしやるんだから。自分一人さへ好ければ構はないと思つて、……」

健三は座を立つた細君の後姿を腹立たしさうに見送つた。彼は論理の權威で自己を伴つてゐる事には丸

二七八
で氣が付かなかつた。學問の力で鍛へ上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心底から大人しく従ひ得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

十一

其の晩細君は土鍋へ入れた粥をもつて、また健三の枕元に坐つた。それを茶椀に盛りながら、「御起になりませんか」と訊いた。

彼の舌にはまだ昔が一杯生えてゐた。重苦しいやうな厚ほつたいやうな口の中へ物を入れる氣には殆どなれなかつた。それでも彼は何故だか床の上へ起き返つて、細君の手から茶椀を取らうとした。然し舌障りの悪い飯粒が、ざらざらと咽喉の方へ滑り込んで行く丈なので、彼はたつた一膳で口を拭つたなり、すぐ故の通り横になつた。

「まだ食氣が出ませんね」

「少しも旨くない」

細君は帯の間から一枚の名刺を出した。

「斯ういふ人が貴方の寢て居らつしやるうちに來たんですが、御病氣だから斷つて歸しました」

健三は寢ながら手を出して、鳥の子紙に刷つた其名刺を受取つて、姓名を讀んで見たが、まだ會つた事も聞いた事もない人であつた。

「何時來たのかい」

「たしか一昨日でしたらう。一寸御話しようと思つたんですが、まだ熱が下らないから、わざと黙つてみました」

「丸で知らない人だかな」

「でも鳥田の事で一寸御主人に御目にかゝりたいつて、來たんださうですよ」

細君はとくに鳥田といふ二字に力を入れて斯う云ひながら、健三の顔を見た。すると彼の頭に此間途中で會つた帽子を被らない男の影がすぐひらめいた。熱から覺めた彼には、それ迄此男の事を思ひ出す機會が丸でなかつたのである。

「御前鳥田の事を知つてるのかい」

「あの長い手紙がお常さんつて女から届いた時、貴方が御話しなすつたぢやありませんか」

健三は何とも答へずに一旦下へ置いた名刺を又取り上げて眺めた。鳥田の事を其時どれ程詳しく彼女に話したかそれが彼には不確であつた。

「ありや何日だつたかね。餘つ程古い事だらう」

健三は其長々しい手紙を細君に見せた時の心持を思ひ出して苦笑した。

「さうね。もう七年位になるでせう。私達がまだ千本通りにゐる時分ですから」

千本通りといふのは、彼等が其頃住んでゐた或都會の外れにある町の名であつた。

細君はしばらくして、「鳥田の事なら、あなたに伺はないでも、御兄さんからも聞いて知つてますわ」と云つた。

「兄が何んな事を云つたかい」

「何んな事つて、——なんでも餘り善くない人だつていふ話ぢやありませんか」

細君はまだ其男の事に就いて、健三の心を知りたい様子であつた。然し彼にはまた反對にそれを避けた意向があつた。彼は黙つて眼を閉ぢた。盆に載せた土鍋と茶碗を持つて席を立つ前、細君はもう一度斯う云つた。

「其名刺の名前の人はまた來るさうですよ。いづれ御病氣が御癒りになつたら又伺ひますからつて、歸つて行つたさうですから」

健三は仕方なしに又眼を開いた。

「來るだらう。どうせ島田の代理だと名乗る以上は又來るに極つてるさ」

「然しあなたお會ひになつて？若し來たら」

實をいふと彼は會ひたくなかつた。細君はなほの事夫を此變な男に會はせたくなかつた。

「お會ひにならない方が好いでせう」

「會つても好い。何も怖い事はないんだから」

細君には夫の言葉が、また例の我が取れた。健三はそれを厭だけれども正しい方法だから仕方がないのだと考へた。

十一

健三の病氣は日ならず全快した。活字に眼を曝したり、萬年筆を走らせたり、又は腕組をしてたゞ考へたりする時が再び續くやうになつた頃、一度無駄足を踏ませられた男が突然また彼の玄關先に現れた。

健三は鳥の子紙に刷つた吉田虎吉といふ見覺のある名刺を受取つて、しばらくそれを眺めてゐた。細君は小さな聲で「御會ひになりますか」と訊ねた。

「會ふから座敷へ通してくれ」

細君は斷りたささうな顔をして少し躊躇してゐた。然し夫の様子を見てとつた彼女は、何も云はずにまた書齋を出て行つた。

吉田といふのは、でつぶり肥つた、かつぶくの好い、四十恰好の男であつた。縞の羽織を着て、其頃迄流行つた白縮緬の兵兒帯にびかくする時計の鎖を巻付けてゐた。言葉使ひから見ても、彼は全くの町人であつた。さうかと云つて、決して堅氣の商人とは受取れなかつた。「成程」といふべき所を、わざと「なある」と引張つたり、「御尤も」の代りに、さも感服したらしい調子で、「いかさま」と答へたりした。健三には會見の順序として、まづ吉田の身元から訊いてかゝる必要があつた。然し彼よりは能辯な吉田は、自分の方で、聞かれない先に、素性の概略を説明した。

彼はもと高崎に居た。さうして其處にある兵營に出入して、糧秣を納めるのが彼の商賣であつた。

「そんな關係から、段々將校方の御世話になるやうになりました、其内でも柴野の旦那には特別御最厚になつたものですから」

健三は柴野といふ名を聞いて急に思ひ出した。それは島田の後妻の娘が嫁に行つた先の軍人の姓であつ

た。

「其縁故で島田を御承知なんですね」

二人はしばらくその柴野といふ士官に就いて話し合つた。彼が今高崎に居ない事や、もつと遠くの西の方へ轉任してから幾年目になるといふ事や、相變らずの大酒で家計があまり裕でないといふ事や、すべて是等は、健三に取つて耳新しい報知に違なかつたが、同時に大した興味を惹く話題にもならなかつた。此夫婦に對して何等の悪感も抱いてゐない健三は、たゞ左右かと思つて平氣に聞いてゐる丈であつた。然し話が本筋に入つて、愈々島田の事を持ち出された時、彼は自然厭な心持がした。

吉田はしきりに此老人の窮迫の状を訴へ始めた。

「人間があまり好過ぎるもんですから、つい人に騙されてみんな損つちまふんです。とても取れる見込のないのに無暗に金を出してやつたり何かするもんですからな」

「人間が好過ぎるんでせうか。あんまり慾張るからぢやありませんか」

たとひ吉田のいふ通り老人が困窮して居るとした所で、健三には斯うより外に解釋の道はなかつた。しかも困窮といふからして既に怪しかつた。肝心の代表者たる吉田も強ひて其點は辯護しなかつた。「或はさうかも知れません」と云つたなり、後は笑に紛らしてしまつた。其癖月々若干か貢いで遣つて呉れる譯には行くまいかといふ相談をすぐ其後から持ち出した。

正直な健三はつい自分の經濟事情を打明けて、此一面識しかない男に話さなければならなくなつた。彼は自己の手に入る百二十圓の月収が、何う消費されつゝ、あるかを詳しく説明して、月々あとに残るもの

は零だと云ふ事を相手に納得させようとした。吉田は例の「なあある」と「いかさま」を時々使つて、神妙に健三の辯解を聞いた。然し彼が何處迄彼を信用して、何處から彼を疑ひ始めてゐるか、其點は健三にも分らなかつた。たゞ先方は何處迄も下手に出る手段を主眼としてゐるらしく見えた。不穩の言葉は無論、強請がましい様子は臆にも出さなかつた。

十三

是で吉田の持つて来た用件の片が付いたものと解釋した健三は、心のうちで暗に彼の歸るのを豫期した。然し彼の態度は明かに此豫期の裏を行つた。金の問題にはそれぎり觸れなかつたが、毒にも薬にもならない世間話を何時迄も續けて動かなかつた。さうして自然天然話頭をまた島田の身の上に戻して来た。

「何んなものでせう。老人も取る年で近頃は大變心細さうな事ばかり云つてゐますが、——元通りの御交際は願へないものでせうか」

健三は一寸返答に窮した。仕方なしに黙つて二人の間に置かれた煙草盆を眺めてゐた。彼の頭のなかには、重たさうに毛縷子の洋傘をさして、異様の瞳を彼の上に据ゑた其老人の面影があり／＼と浮かんた。彼は其人の世話になつた昔を忘れる譯に行かなかつた。同時に人格の反射から來る其人に對しての嫌惡の情も禁ずる事が出来なかつた。兩方の間に板挟みとなつた彼は、しばらく口を開き得なかつた。

「手前も折角斯うして上がったものですから、是丈は何うぞ曲けて御承知を願ひたいもので」
吉田の様子は愈々丁寧になつた。何う考へても交際ふのは厭でならなかつた健三は、また何うしてもそ

れを断るのを不義理と認めなければ濟まなかつた。彼は厭でも正しい方に従はうと思ひ極めた。

「さういふ譯なら宜しう御座います。承知の旨を向うへ傳へて下さい。然し交際は致しても、昔のやうな關係ではとても出来ませんから、それも誤解のないやうに申し傳へて下さい。それから私の今の状況では、私の方から時々出掛けて行つて老人に慰藉を與へるなんて事は六づかしいのですが……」

「するとまあたゞ御出入りをさせて戴くといふ譯になりますな」

健三には御出入といふ言葉を聞くのが辛かつた。左右だとも左右でないとも云ひかねて、また口を閉ぢた。

「いえなに夫で結構で、——昔と今とは事情も丸で違ひますから」

吉田は自分の役目が漸く濟んだといふ顔付をして斯う云つた後、今迄持ち扱つてゐた煙草入を腰へさしたなり、さつさと歸つて行つた。

健三は彼を玄關迄送り出すと、すぐ書齋へ入つた。其日の仕事を早く片付けようといふ氣があるので、いきなり机へ向つたが、心の何處かに引懸りが出来て、中々思ふ通りに抄取らなかつた。

其處へ細君が一寸顔を出した。「あなた」と二遍ばかり聲を掛けたが、健三は机の前に坐つたなり振り向かなかつた。細君が其儘黙つて引込んだ後、健三は進まぬながら仕事を夕方迄續けた。

平生よりは遅くなつて漸く夕飯の食卓に着いた時、彼は始めて細君と言葉を換はした。

「先刻來た吉田つて男は一體何なんですか」と細君が訊いた。

「元高崎で陸軍の用達か何かしてゐるんださうだ」と健三が答へた。

問答は固より夫丈で盡きる筈がなかつた。彼女は吉田と柴野との關係やら、彼と島田との間柄やらに就いて、自分に納得の行く迄夫から説明を求めようとした。

「何うせ御金か何か呉れつて云ふんでせう」

「まあ左右だ」

「それで貴方何うなすつて。——どうせ御断りになつたでせうね」

「うん、断つた。断るより外に仕方がないからな」

二人は腹の中で、自分等の家の經濟狀態を別々に考へた。月々支出してゐる、また支出しなければならぬ金額は、彼に取つて随分苦しい努力の報酬であると同時に、それで凡てを賄つて行く細君に取つても、少しも裕なものとは云はれなかつた。

十四

健三はそれぎり座を立たうとした。然し細君にはまだ訊きたい事が残つてゐた。

「それで素直に歸つて行つたんですか、あの男は。少し變ね」

「だつて断られ、ば仕方がないぢやないか。喧嘩をする譯にも行かないんだから」

「だけど、又來るんでせう。あゝして大人しく歸つて置いて」

「來ても構はないさ」

「でも厭ですわ、蒼蠅くつて」

健三は細君が次の間で先刻の會話を残らず聴いてるものと察した。

「御前聞いてたんだらう、悉皆」

細君は夫の言葉を肯定しない代りに否定もしなかつた。

「ぢや夫で好いぢやないか」

健三は斯う云つたなり、又立つて書齋へ行かうとした。彼は獨斷家であつた。これ以上細君に説明する必要は始めからないものと信じてゐた。細君もさうした點に於いて夫の權利を認める女であつた。けれど表向夫の權利を認める丈に、腹の中には何時も不平があつた。事々について出て來る權柄づくな夫の態度は、彼女に取つて決して心持の好いものではなかつた。何故もう少し打ち解けて呉れないのかといふ氣が、絶えず彼女の胸の奥に働いた。其癖夫を打ち解けさせる天分も技倆も自分に十分具へてゐないといふ事實には全く無頓着であつた。

「あなた島田と交際つても好いと受合つて居らしたやうですね」

「あゝ」

健三はそれが何うしたといつた風の顔付をした。細君は何時でも此處迄來て黙つてしまふのを例にしてゐた。彼女の性質として、夫が斯ういふ態度に出ると、急に厭氣がさして、それから先一步も前へ出る氣になれないのである。その不愛想な様子が又夫の氣質に反射して、益々彼を權柄づくにしがちであつた。

「御前や御前の家族に關係した事でないんだから、構はないぢやないか、己一人で極めたつて」

「そりや私に對して何も構つて頂かなくつても宜ござんす。構つて呉れたつて、どうせ構つて下さる

「ぢやないんだから……」

學問をした健三の耳には、細君のいふ事が丸で脱線であつた。さうして其脱線は何うしても頭の悪い證據としか思はれなかつた。「又始まつた」といふ氣が腹の中でした。然し細君はすぐ當の問題に立ち戻つて、彼の注意を惹かなければならぬやうな事を云ひ出した。

「然し御父さまに悪いでせう。今になつてあの人と御交際になつちやあ」

「御父さまつて己のおぢやないか」

「無論貴方の御父さまですわ」

「己のおぢやとうに死んだぢやないか」

「然し御亡くなりになる前、島田とは絶交だから、向後一切付合をしぢやならないつて仰しやつたさうぢやありませんか」

健三は自分の父と島田とが喧嘩をして義絶した當時の光景をよく覚えてゐた。然し彼は自分の父に對して左程情愛の籠つた優しい記憶を有つてゐなかつた。其上絶交云々に就いても、さう嚴重に云ひ渡された覺はなかつた。

「御前誰からそんな事を聞いたのかい。己は話した積りはないがな」

「貴方ぢやありません。御兄さんに伺つたんです」

細君の返事は健三に取つて不思議でも何でもなかつた。同時に父の意志も兄の言葉も、彼には大した影響を與へなかつた。

「おやぢは阿爺、兄は兄、己は己なんだから仕方がない。己から見ると、交際を拒絶する丈の根據がないんだから」
斯う云ひ切つた健三は、腹の中で其交際が厭でく堪らないのだといふ事實を意識した。けれどもその腹の中は丸で細君の胸に映らなかつた。彼女はたゞ自分の夫が又例の頑固を張り通して、徒らに皆の意見に反對するのだとばかり考へた。

十五

健三は昔其人に手を引かれて歩いた。其人は健三のために小さい洋服を拵へて呉れた。大人さへあまり外國の服装に親しみのない古い時分の事なので、裁縫師は子供の着るスタイル拵には丸で頼着しなかつた。彼の上着には腰のあたりに釦が二つ竝んで、胸は開いた儘であつた。霜降の羅紗も硬くごはくして、極めて手觸りが粗かつた。ことに洋袴は薄茶色に堅溝の通つた調馬師でなければ穿かないものであつた。然し當時の彼はそれを着て得意に手を引かれて歩いた。
彼の帽子も其頃の彼には珍らしかつた。淺い鍋底の様な形をしたフェルトをすほりと坊主頭へ頭巾のやうに被るのが、彼に大した満足を與へた。例の如く其人に手を引かれて、寄席へ手品を見に行つた時、手品師が彼の帽子を借りて、大事な黒羅紗の山の裏から表へ指を突き通して見せたので、彼は驚きながら心配さうに、再びわが手に歸つた帽子を、何遍か撫でまはして見た事もあつた。
其人は又彼のために尾の長い金魚をいくつも買つて呉れた。武者繪、錦繪、二枚つゞき二枚つゞきの繪

も彼の云ふがまゝに買つて呉れた。彼は自分の身體にあふ緋緘しの鏡と龍頭の兜さへ持つてゐた。彼は日に一度位づゝ其具足を身につけて、金紙で拵へた采配を振り舞はした。
彼はまた子供の差す位な短い脇差の所有者であつた。その脇差の目貫は、鼠が赤い唐辛子を引いて行く彫刻で出来上つてゐた。彼は銀で作つた此鼠と珊瑚で拵へた此唐辛子とを、自分の寶物のやうに大事がつた。彼は時々此脇差が抜いて見たくなつた。また何度も抜かうとした。けれども脇差は何時も抜けなかつた。——この封建時代の裝飾品も矢張其人の好意で小さな健三の手に渡されたのである。
彼はまた其人に連れられて、よく船に乗つた。船には屹度腰蓑を着けた船頭が居て網を打つた。いなだの鱈だのが水際迄来て跳ね躍る様子が小さな彼の眼に白金のやうな光を與へた。船頭は時々一里も二里も沖へ漕いで行つて、海鯽といふもの迄捕つた。さういふ場合には高い波が来て舟を揺り動かすので、彼の頭はすぐ重くなつた。さうして舟の中へ寝てしまふ事が多かつた。彼の最も面白がつたのは河豚の網にかゝつた時であつた。彼は杉箸で河豚の腹をかんから太鼓のやうに叩いて、その膨れたり怒つたりする様子を見て楽しんだ。……
吉田と會見した後の健三の胸には、不圖斯うした幼時の記憶が續々湧いて來る事があつた。凡てそれらの記憶は、斷片的な割に鮮明に彼の心に映るもの許りであつた。さうして斷片的ではあるが、どれもこれも決して其人と引離す事は出来なかつた。零碎の事實を手繰り寄せれば寄せる程、種が無盡藏にあるやうに見えた時、又其無盡藏にある種の各自のうちには必ず帽子を被らない男の姿が織り込まれてゐるといふ事を發見した時、彼は苦しんだ。

「斯んな光景をよく覚えてる癖に何故自分の有つてゐた其頃の心が思ひ出せないのだらう」
これが健三にとつて大きな疑問になつた。實際彼は幼少の時分是程世話になつた人に對する當時のわが心持といふものを丸で忘れてしまつた。

「然しそんな事を忘れる筈がないんだから、ことによると始めから其人に對しては、恩義相應の情合が缺けてゐたのかも知れない」

健三は斯うも考へた。のみならず多分此方だらうと自分を解釋した。

彼は此事情に就いて思ひ出した幼少の時の記憶を細君に話さなかつた。感情に脆い女の事だから、もし左右でもしたら、或は彼女の反感を和けるに都合が好からうとさへ思はなかつた。

十六

待ち設けた日がやがて來た。吉田と島田とはある日の午後連れ立つて健三の玄關に現はれた。

健三は此昔の人に對して何んな言葉を使つて、何んな應對をして好いか解らなかつた。思慮なしにそれ等を極めて呉れる自然の衝動が今の彼には丸で缺けてゐた。彼は二十年餘も會はない人と膝を突き合せながら、大した懐かしみも感じ得ずに、寧ろ冷淡に近い受答へばかりしてゐた。

島田はかねて横風だといふ評判のある男であつた。健三の兄や姉は單にそれ丈でも彼を忌み嫌つてゐる位であつた。實は健三自身も心のうちでそれを恐れてゐた。今の健三は、單に言葉遣ひの末でさへ、斯んな男から自尊心を傷けられるには、あまりに高過ぎると、自分を評價してゐた。

然し島田は思つたよりも丁寧であつた。普通初見の人が挨拶に用ひる「ですか」とか「ません」とかいふてには、言葉の語尾を切る注意をわざと怠らないやうに見えた。健三はむかし其人から健坊々々と呼ばれた幼い時分を思ひ出した。關係が絶えてからも、會ひさへすれば、矢張り同じ健坊々々で通すので、彼はそれを厭に感じた過去も、自然胸のうちに浮かんだ。

「然しこの調子なら好いだらう」

健三はそれで、出来る丈不快の顔を二人に見せまいと力めた。向うも成るべく穩かに歸る積りと思ひ、少しも健三の氣を悪くするやうな事は云はなかつた。それがために、當然雙方の間に話題となるべき懷舊談杯も殆ど出なかつた。従つて談話はやゝともすると途切れ勝になつた。

健三はふと雨の降つた朝の出來事を考へた。

「此間二度程途中で御目にかゝりましたが、時々あの邊を御通りになるんですか」

「實はあの高橋の總領の娘が片付いてゐる所が、此先にあるもんですから」

高橋といふのは誰の事だか健三には一向解らなかつた。

「はあ」

「そら知つてゐるでせう。あの芝の」

島田の後妻の親類が芝にあつて、其處の家は何でも神主か坊主だといふ事を健三は子供心に聞いて覚えてゐるやうな氣もした。然しその親類の人には、要さんといふ彼とおない年位な男に二三遍會つたきりで、他のものに顔を合せた記憶は丸でなかつた。

「芝といふと、たしかお藤さんの妹さんに當る方の御嫁に入らしつた所でしたね」

「いえ姉ですよ。妹ではないんです」

「はあ」

「要三丈は死にましたが、あとの姉妹はみんな好い所へ片付いてね、仕合せですよ。そら總領のは、多分知つておいでだらう、――へ行つたんです」

「――といふ名前は成程健三に耳新しいものではなかつた。然しそれはもう餘程前に死んだ人であつた。あとが女と子供ばかりで困るもんだから、何かにつけて、叔父さんくゝて重寶がられましてね。それに近頃は宅に手入をするんで監督の必要が出来たものだから、殆ど毎日のやうに此處の前を通ります」

健三は昔此男につれられて、池の端の本屋で法帖を買つて貰つた事をわれ知らず思ひ出した。たとひ一錢でも二錢でも負けさせなければ物を買つた例のない此人は、其時も僅か五厘の釣銭を取るべく店先へ腰を卸して頑として動かなかつた。董其昌の折手本を抱へて傍に佇立んでゐる彼に取つては其態度が如何にも見苦しくまた不愉快であつた。

「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だらう」

健三は斯う考へながら、島田の顔を見て苦笑を洩らした。しかし島田は一向それに氣が付かないらしかつた。

十七

「でも御蔭さまで、本を遺して行つて呉れたもんですから、あの男が亡くなつても、あとはまあ困らないで、何うにか斯うにか遣つて行けるんです」

島田は――の作つた書物を世の中の誰でもが知つてゐなければならぬ筈だといつた風の口調で斯う云つた。然し健三は不幸にして其著書の名前を知らなかつた。字引か教科書だらうとは推察したが、別に訊いて見る氣にもならなかつた。

「本といふものは實に有難いもので、一つ作つて置くとそれが何時迄も賣れるんですからね」

健三は黙つてゐた。仕方なしに吉田が相手になつて、何でも儲けるには本に限るやうな事を云つた。

「御祝儀は濟んだが、――が死んだ時後が女だけだもんだから、實は私が本屋に懸け合ひましてね。それで年々若干と極めて、向うから收めさせるやうにしたんです」

「へえ、大したもんですな。成程何うも學問をなさる時は、それ丈資金が要るやうで、一寸損な氣もしますが、さて仕上げて見ると、つまり其方が利廻りの好い譯になるんだから、無學のものはとても敵ひませんな」

「結局得ですよ」

彼等の應對は健三に何の興味も與へなかつた。其上いくら相槌を打たうにも打たれないやうな變な見當へ向いて進んで行くばかりであつた。手持無沙汰な彼は、已むを得ず二人の顔を見比べながら、時々庭の方を眺めた。

其庭はまた見苦しく手入の届かないものであつた。何時縁をとつたか分らないやうな一本の松が、息苦

しさに蒼黒い葉を垣根の傍に茂らしてゐる外に、木らしい木は殆どなかつた。箒に馴染まない地面は小石交りに凸凹してゐた。

「此方の先生も一つ御儲けになつたら如何です」

吉田は突然健三の方を向いた。健三は苦笑しない譯に行かなかつた。仕方なしに「え、儲けたいものですね」と云つて跋を合せた。

「なに譯はないんです。洋行迄すりや」

是は年寄の言葉であつた。それが恰も自分で學資でも出して、健三を洋行させたやうに聞こえたので、彼は厭な顔をした。然し老人は一向そんな事に頓着する様子も見えなかつた。迷惑さうな健三の體を見ても澄ましてゐた。仕舞に吉田が例の煙草入を腰へ差して「では今日は是で御暇を致す事にしませうか」と催促したので、彼は漸く歸る氣になつたらしかつた。

二人を送り出して又一寸座敷へ戻つた健三は、再び座蒲團の上に坐つたまゝ、腕組をして考へた。

「一體何の爲に來たのだらう。是ぢや他を厭がらせに來ると同じ事だ。あれで向うは面白いのだらうか」

彼の前には先刻島田の持つて來た手土産が其儘置いてあつた。彼はほんやり其粗末な菓子折を眺めた。何も云はずに茶碗だの煙草盆を片付け始めた細君は、仕舞に黙つて坐つてゐる彼の前に立つた。

「あなたまだ其處に坐つて居らつしやるんですか」

「いやもう立つても好い」

健三はすぐ立上らうとした。

「あの人達はまた來るんでせうか」

「來るかも知れない」

彼は斯う言ひ放つた儘、また書齋へ入つた。一しきり箒で座敷を掃く音が聞えた。それが濟むと、菓子折を奪り合ふ子供の聲がした。凡てがやがて靜になつたと思ふ頃、黄昏の空から又雨が落ちて來た。健三は買はうくと思ひながら、ついまだ買はずにゐるオーバーシユの事を思ひ出した。

十八

雨の降る日が幾日も續いた。それがからりと晴れた時、染付けられたやうな空から深い輝きが大地の上
に落ちた。毎日鬱陶しい思ひをして、縫針にばかり氣をとられてゐた細君は、縁鼻へ出て此蒼い空を見上
けた。それから急に箆筒の抽斗を開けた。

彼女が服装を改めて夫の顔を覗きに來た時、健三は頬杖を突いたまゝ、盆槍汚ない庭を眺めてゐた。

「あなた何を考へて居らつしやるの」

健三は一寸振り返つて細君の餘所行姿を見た。其利那に爛熟した彼の眼は不圖した新らし味を自分の妻
の上に見出した。

「何處かへ行くのかい」

「え、」

細君の答は彼に取つて餘りに簡潔過ぎた。彼はまたもとの佗びしい我に歸つた。

「子供は」

「子供も連れて行きます。置いて行くと八釜しくつて御蒼蠅いでせうから」
其日曜の午後を健三は獨り靜かに暮らした。

細君の歸つて來たのは、彼が夕飯を済まして又書齋へ引き取つた後なので、もう灯が點いてから一二時間経つてゐた。

「只今」

遅くなりましたとも何とも云はない彼女の無愛嬌が、彼には氣に入らなかつた。彼は一寸振り向いた丈で口を利かなかつた。するとそれが又細君の心に暗い影を投げる媒介となつた。細君も其儘立つて茶の間の方へ行つてしまつた。

話をする機會はそれぎり二人の間に絶えた。彼等は顔さへ見れば自然何か云ひたくなるやうな仲の好い夫婦でもなかつた。又それ丈の親しみを現すには、御互が御互に取つてあまりに陳腐過ぎた。

一三日経つてから細君は始めて其日外出した折の事を食事の時話題に上せた。

「此間宅へ行つたら、門司の叔父に會ひましてね。随分驚いちゃみました。まだ臺灣にゐるのかと思つたら、何時の間にか歸つて來てゐるんですもの」

門司の叔父といふのは油斷のならない男として彼等の間に知られてゐた。健三がまだ地方にゐる頃、彼が突然汽車で遣つて來て、急に入用が出來たから、是非共少し都合して呉れまいかと頼むので、健三は地

方の銀行に預けて置いた貯金を些少ながら用立てたら、立派に印紙を貼つた證文を後から郵便で送つて來た。其中に「但し利子の儀は」といふ文句迄書き添へてあつたので、健三は寧ろ堅過ぎる人だと思つたが、貸した金はそれぎり戻つて來なかつた。

「今何をしてゐるのかね」

「何をしてゐるんだか分りやしません。何とかの會社を起すんで、是非健三さんにも賛成して貰ひたいから、其内上る積だつて云つてました」

健三には其後を訊く必要もなかつた。彼が昔金を借りられた時分にも、此叔父は何かの會社を建て、るとかいふので彼はそれを本當にしてゐた。細君の父もそれを疑はなかつた。叔父は其父を旨く説きつて、門司迄引張つて行つた。さうして是が今建築中の會社だと云つて、縁もゆかりもない他人の建てゝる家を見せた。彼は實に此手段で細君の父から何千かの資本を捲き上げたのである。

健三は此人に就いてこれ以上何も知りたがらなかつた。細君も云ふのが厭らしかつた。然し何時もの通り會話は其處で切れてしまはなかつた。

「あの日はあまり好い御天氣だつたから、久し振りで御兄さんの所へも廻つて來ました」

「さうか」

細君の里は小石川臺町で、健三の兄の家は市ヶ谷藥王寺前だから、細君の訪問は大した迂回でもなかつた。

「御兄さんに島田の來た事を話したら驚いて居らつしやいましたよ。今更來られた義理ぢやないんだつて。健三もあんなものを相手にしなければ好いものにつて」

細君の顔には多少諷諷の意が現れてゐた。

「それを聞きに、御前わざ／＼薬王寺前へ廻つたのかい」

「またそんな皮肉を仰しやる。あなたは何うしてさう他の事を悪くばかり御取りになるんでせう。

妾 あんまり御無沙汰をして濟まないと思つたから、たゞ歸りに一寸伺つた丈ですわ」

彼が滅多に行つた事のない兄の家へ、細君がたまに訪ねて行くのは、つまり夫の代りに交際の義理を立てゝゐるやうなもので、いかな健三もそれには苦情をいふ餘地がなかつた。

「御兄さんは貴夫のために心配してゐらつしやるんですよ。あゝ云ふ人と交際ひだして、また何んな面倒が起らないとも限らないからつて」

「面倒つて何んな面倒を指すのかな」

「そりや起つて見なければ、御兄さんにだつて分りつ子ないでせうけれども、何しろ碌な事はないと思つてゐらつしやるんでせう」

碌な事があらうとは健三にも思へなかつた。

「然し義理が悪いからね」

「だつて御金を遣つて縁を切つた以上、義理の悪い譯はないぢやありませんか」

手切れの金は昔養育料の名前の下に健三の父の手から島田に渡されたのである。それはたしか健三が十二の春であつた。

「其上その御金をやる十四五年も前から貴夫は、もう貴夫の宅へ引取られてゐらしたんでせう」

いくつの年からいくつの年迄彼が全然島田の手で養育されたのか、健三にも判然分らなかつた。

「三つから七つ迄ですつて。御兄さんが左右仰有いましたよ」

「左右かしら」

健三は夢のやうに消えた自分の昔を回顧した。彼の頭の中には眼鏡で見るやうな細かい繪が澤山出た。

けれども其繪には何れを見ても日付がついてゐなかつた。

「證文にちやんと左右書いてあるさうですから大丈夫間違はないでせう」

彼は自分の離籍に關した書類といふものを見た事がなかつた。

「見ない譯はないわ。屹度忘れて居らつしやるんですよ」

「然し八つで宅へ歸つたにした所で復籍する迄は多少往來もしてゐたんだから仕方がないさ。全く縁が切れたといふ譯でもないんだからね」

細君は口を噤んだ。それが何故だか健三には淋しかつた。

「己も實は面白くないんだよ」

「ぢや御止しになれば好いのに。つまらないわ、貴夫、今になつてあんな人と交際ふのは。一體何うい

ふ氣なんでせう、先方は

「それが己には些も解らない。向うでも嘸詰らないだらうと思ふんだがね」

「御兄さんは何でもまた金にしようと思つて遣つて來たに違ひないから、用心しなくつちや不可いつて云つて居らつしやいましたよ」

「然し金は始めから斷つちまつたんだから、構はないさ」

「だつて是から先何を云ひ出さないとも限らないわ」

細君の胸には最初から斯うした豫感が働いてゐた。其處を既に防ぎ止めたとばかり信じてゐた理に強い健三の頭に、微かな不安が又新しく萌した。

二十

其不安は多少彼の仕事の上で即いて廻つた。けれども彼の仕事はまた其不安の影を何處かへ埋めてしまふ程忙しかつた。さうして島田が再び健三の玄關へ現れる前に、月は早くも末になつた。

細君は鉛筆で汚ならしく書き込んだ會計簿を持つて彼の前に出た。

自分の外で働いて取る金額の全部を擧げて細君の手に委ねるのを例にしてゐた健三は、それが意外であつた。彼は未だ曾て月末に細君の手から支出の明細書突き付けられた例がなかつた。

「まあ何うにかしてゐるんだらう」
彼は常に斯う考へた。それで自分に金の要る時は遠慮なく細君に請求した。月々買ふ書物の代價丈で

も随分の多額に上る事があつた。それでも細君は澄ましてゐた。經濟に暗い彼は時として細君の放漫をさへ疑つた。

「月々の勘定はちやんとして己に見せなければ不可いぜ」

細君は厭な顔をした。彼女自身から云へば自分程忠實な經濟家は何處にも居ない氣なのである。

「え、」

彼女の返事は是限であつた。さうして月末が來ても會計簿はつひに健三の手に渡らなかつた。健三も機嫌の好い時はそれを默認した。けれども悪い時は意地になつてわざと見せろと逼る事があつた。其癖見せられるとごちやくして中々解らなかつた。たとひ帳面づらは細君の説明を聽いて解るにしても、實際月に肴をどれ丈食つたものか、又は米がどれ程要つたものか、またそれが高過ぎるのか、安過ぎるのか、更に見當が付かなかつた。

此場合にも彼は細君の手から帳簿を受取つて、ざつと眼を通した丈であつた。

「何か變つた事でもあるのかい」

「何うかして頂かないと……」

細君は目下の暮し向に就いて詳しい説明を夫にして聞かせた。

「不思議だね。それで能く今日迄遣つて來られたものだね」

「實は毎月餘らないんです」

餘らうとは健三にも思へなかつた。先月末に舊い友達が四五人で何處かへ遠足に行くとかいふので、彼

にも勧誘の端書をよこした時、彼は二圓の會費がない丈の理由で、同行を斷つた覺もあつた。

「然しかつかつ位には行きさうなものだがな」

「行つても行かなくつても、是丈の収入で遣つて行くより仕方がないんですけれど」

細君は云ひ悪さうに、箆笥の抽匣に仕舞つて置いた自分の着物と帶を質に入れた顛末を話した。

彼は昔自分の姉や兄が彼等の晴着を風呂敷へ包んで、こつそり外へ持つて出たり又持つて入つたりしたのをよく目撃した。他に知れないやうに氣を配りがちな彼等の態度は、恰も罪を犯した日影者のやうに見

えて、彼の子供心に淋しい印象を刻み付けた。斯うした聯想が今の彼を殊更に侘びしく思はせた。

「質を置いたつて、御前が自分で置きに行つたのかい」

彼自身いまだ質屋の暖簾を潛つた事のない彼は、自分より貧苦の經驗に乏しい彼女が、平氣でそんな所へ出入する筈がないと考へた。

「いゝえ頼んだんです」

「誰に」

「山野のうちの御婆さんです。あすこには通ひつけの質屋の帳面があつて便利ですから」

健三は其先を訊かなかつた。夫が碌な着物一枚さへ拵へてやらないのに、細君が自分の宅から持つてきたものを質に入れて、家計の足にしなればならないといふのは、夫の恥に相違なかつた。

健三はもう少し働かうと決心した。その決心から來る努力が、月々幾枚かの紙幣に變形して、細君の手に渡るやうになつたのは、それから間もない事であつた。

彼は自分の新たに受取つたものを洋服の内隠袋から出して封筒の儘疊の上へ放り出した。黙つてそれを取り上げた細君は裏を見て、すぐ其紙幣の出所を知つた。家計の不足は斯の如くにして無言のうちに補は

れたのである。

其時細君は別に嬉しい顔もしなかつた。然し若し夫が優しい言葉に添へて、それを渡して呉れたなら、屹度嬉しい顔をする事が出來たらうと思つた。健三は又若し細君が嬉しさうにそれを受取つてくれたら

優しい言葉も掛けられたらうにと考へた。それで物質的の要求に應ずべく工面された此金は、二人の間に存在する精神上の要求を充たす方便としては寧ろ失敗に歸してしまつた。

細君は其折の物足らなさを回復するために、二三日経つてから、健三に一反の反物を見せた。

「あなたの着物を拵へようと思ふんですが、是は何うでせう」

細君の顔は晴々しく輝いてゐた。然し健三の眼にはそれが下手な技巧を交へてゐるやうに映つた。彼は其不純を疑つた。さうしてわざと彼女の愛嬌に誘はれまいとした。細君は寒さうに座を立つた。細君の座

を立つた後で、彼は何故自分の細君を寒がらせなければならぬ心理状態に自分が制せられたのかと考へて益不愉快になつた。

細君と口を利く次の機會が來た時、彼は斯う云つた。

「己は決して御前の考へてゐるやうな冷刻な人間ぢやない。たゞ自分の有つてゐる温かい情愛を堰き止

めて、外へ出られないやうに仕向けるから、仕方なしに左右するのだ」

「誰もそんな意地の悪い事をする人は居ないぢやありませんか」

「御前は始終してゐるぢやないか」

細君は恨めしさうに健三を見た。健三の論理は丸で細君に通じなかつた。

「貴夫の神経は近頃餘つ程變ね。何うしてもつと穩當に私を觀察して下さらないのでせう」

健三の心には細君の言葉に耳を傾ける餘裕がなかつた。彼は自分に不自然な冷かさに對して腹立たしい程の苦痛を感じてゐた。

「あなたは誰も何もしないのに、自分一人で苦しんでゐらつしやるんだから仕方がない」

二人は互に徹底する迄話し合ふ事のつひに出来ない男女のやうな氣がした。従つて二人とも現在の自分を改める必要を感じ得なかつた。

健三の新に求めた餘分の仕事は、彼の學問なり教育なりに取つて、さして困難のものではなかつた。ただ彼はそれに費やす時間と努力とを厭つた。無意味に暇を潰すといふ事が目下の彼には何よりも恐ろしく見えた。彼は生きてゐるうちに、何か爲遂せる、又仕遂せなければならぬと考へる男であつた。

彼が其餘分の仕事を片付けて家に歸るときは何時でも夕暮になつた。

或日彼は疲れた足を急がせて、自分の家の玄關の格子を手荒く開けた。すると奥から出て來た細君が彼の顔を見るなり、「あなた彼の人が又來ましたよ」と云つた。細君は島田の事を始終あの人あの人と呼んでゐるので、健三も彼女の様子と言葉から、留守のうちに誰が來たのか略見當が附いた。彼は無言の儘茶の間へ上つて、細君に扶けられながら洋服を和服に改めた。

二十二

彼が火鉢の傍に坐つて、煙草を一本吹かしてゐると、間もなく夕飯の膳が彼の前に運ばれた。彼はすぐ細君に質問を掛けた。

「上つたのかい」

細君には何が上つたのか解らない位此質問は突然であつた。一寸驚いて健三の顔を見た彼女は、返事を待ち受けてゐる夫の様子から始めて其意味を悟つた。

「あの人ですか。——でも御留守でしたから」

細君は座敷へ島田を上げなかつたのが、恰も夫の氣に障る事でもしたやうな調子で、言譯がましい答をした。

「上げなかつたのかい」

「えゝ。たゞ玄關で一寸」

「何とか云つてゐたかい」

「とうに伺ふ筈だつたけれども、少し旅行してゐたものだから御無沙汰をして濟みませんつて」

「旅行なんぞするのかな、田舎に用のある身體とも思へないが、御前にその行つた先を話したかい」

「そりや何とも云ひませんでした。たゞ娘の所で来て呉れつて頼まれたから行つて来たつて云ひました。大方あのお縫さんて人の宅なんぞせう」

お縫さんの嫁いた柴野といふ男には健三も其昔會つた覺があつた。柴野の今の任地先も此間吉田から聞いて知つてゐた。それは師團か旅團のある中國邊の或都會であつた。

「軍人なんですか、其お縫さんて人の御嫁に行つた所は」

健三が急に話を途切らしたので、細君はしばらく間を置いたあとで斯んな問を掛けた。

「能く知つてゐね」

「何時か御兄さんから伺ひましたよ」

健三は心のうちで昔見た柴野とお縫さんの姿を並べて考へた。柴野は肩の張つた色の黒い人であつたが、眼鼻立からいふと寧ろ立派な部類に屬すべき男に違なかつた。お縫さんは又すらりとした恰好の好い女で、顔は面長の色白といふ出来であつた。ことに美しいのは睫毛の多い切長の其眼のやうに思はれた。彼等の結婚したのは柴野がまだ少尉か中尉の頃であつた。健三は一度その新宅の門を潜つた記憶を有つてゐた。其時柴野は隊から歸つて来た身體を大きくして、長火鉢の猫板の上にある洋盃から冷酒をぐいぐい飲んだ。お縫さんは白い肌をあらはに、鏡臺の前で髪を撫でつけてゐた。彼はまた自分の分として取り配けられた握り鮓を頗りに皿の中から撮んで食べた。……

「お縫さんて人はよつほど容色が好いんですか」

「何故」

「だつて貴夫の御嫁にするつて話があつたんださうぢやありませんか」

成程そんな話もない事はなかつた。健三がまだ十五六の時分、ある友達を往來へ待たせて置いて、自分一人一寸島田の家へ寄らうとした時、偶然門前の泥溝に掛けた小橋の上に立つて往來を眺めてゐたお縫さんは、一寸微笑しながら出合頭の健三に會釋した。それを目撃した彼の友達は獨逸語を習ひ始めの子供であつたので、「フラウ門に倚つて待つ」と云つて彼をひやかした。然しお縫さんは年齒からいふと彼より一つ上であつた。其上その頃の健三は、女に對する美醜の鑑別もなければ好悪も有たなかつた。夫から羞恥に似たやうな一種妙な情緒があつて、女に近寄りがかる彼を、自然の力で、護謨球のやうに、却つて女から弾き飛ばした。彼とお縫さんの結婚は、他に面倒のあるなしを差措いて、到底物にならないものとして放棄されてしまつた。

二十三

「貴夫何うして其お縫さんて人を御貰ひにならなかつたの」

健三は膳の上から急に眼を上げた。追憶の夢を愕かされた人のやうに。

「丸で問題にやならない。そんな料簡は島田にあつた丈なんだから。それに己はまだ子供だつたしね」

「あの人の本當の子ぢやないんでせう」

「無論さ。お縫さんはお藤さんの連れつ子だもの」

お藤さんと云ふのは島田の後妻の名であつた。

「だけど、もしそのお縫さんて人と一所になつてゐらしたたら、何うでせう。今頃は」

「何うなつてるか判らないぢやないか、なつて見なければ」

「でも事によると、幸福かも知れせんわね。其方が」

「左右かも知れない」

健三は少し忌々しくなつた。細君はそれぎり口を噤んだ。

「何故そんな事を訊くのだい。詰らない」

細君は窘められるやうな気がした。彼女にはそれを乗り越す丈の勇氣がなかつた。

「どうせ私は始めつから御氣に入らないんだから……」

健三は箸を放り出して、手を頭の中に突込んだ。さうして其處に溜つてゐる雲脂をこしく、落とし始めた。

二人はそれなり別々の室で別々の仕事をした。健三は御機嫌ようと挨拶に來た子供の去つた後で例の如く書物を讀んだ。細君は其子供を寝かした後で、晝の残りの縫物を始めた。

お縫さんの話がまた二人の間の問題になつたのは、中一日置いた後の事で、それも偶然の切つ懸けからであつた。

其時細君は一枚の端書を持つて、健三の部屋へ這入つて來た。それを夫の手に渡した彼女は、何時ものやうに其儘立ち去らうともせず、彼の傍に腰を卸した。健三が受取つた端書を手に持つたなり何時迄も讀みさうにしないので、我慢しきれなくなつた細君はつひに夫を促した。

「あなた其端書は比田さんから來たんですよ」

健三は漸く書物から眼を放した。

「あの人の事で何か用事が出來たんですつて」

成程端書には島田の事で會ひたいから一寸來てくれと書いた上に、日と時刻が明記してあつた。わざわざ彼を呼び寄せる失禮も丁寧に詫びてあつた。

「何うしたんでせう」

「丸で判明らないね。相談でもなからうし。此方から相談を持ち懸けた事なんか丸でないんだから」

「みんなで交際つちや不可いつて忠告でもなさるんぢやなくつて。御兄さんも入らつしやると書いてあるでせう、其處に」

端書には細君の云つた通りの事がちやんと書いてあつた。

兄の名前を見た時、健三の頭に不圖又お縫さんの影が差した。島田が彼と此女を一所にして、後まで兩家の關係をつながうとした如く、此女の生母はまた彼の兄と自分の娘とを夫婦にしたいやうな希望を有つてゐたらしかつたのである。

「健ちやんの宅と斯んな間柄にならないとね、あたしも始終健ちやんの家へ行かれるんだけれども」

お藤さんが健三に斯んな事を云つたのも、願れば古い昔であつた。

「だつてお縫さんが今嫁いてる先は元からの許嫁なんでせう」

「許嫁でも場合によつたら斷る氣だつたんだらうよ」

「一體お縫さんは何方へ行きたかつたんでせう」

三〇九

「そんな事が判明るもんか」

「ぢや御兄さんの方は何うなの」

「それも判明らんさ」

健三の子供の時分の記憶の中には、細君の間に應ぜられるやうな人情が、つた材料が一つもなかつた。

二十四

健三はやがて返事の端書を書いて承知の旨を答へた。さうして指定の日が来た時、約束通り又津の守坂へ出掛けた。

彼は時間に對して頗る正確な男であつた。一面に於いて愚直に近い彼の性格は、一面に於いて却つて彼を神經的にした。彼は途中で二度ほど時計を出して見た。實際今の彼は起きると寢る迄、始終時間に追ひ懸けられてゐるやうなものであつた。

彼は途々自分の仕事に就いて考へた。其仕事は決して自分の思ひ通りに進行してゐなかつた。一步目的へ近付くと、目的は又一步彼から遠ざかつて行つた。

彼は又彼の細君の事を考へた。其當時強烈であつた彼女の歇私的里は、自然と輕くなつた今でも、彼の胸に猶暗い不安の影を投げて已まなかつた。彼はまた其細君の里の事を考へた。經濟上の壓迫が家庭を襲はうとしてゐるらしい氣配が、船に乗つた時の鈍い動搖を彼の精神に與へる種となつた。

彼はまた自分の姉と兄と、それから島田の事も一所に纏めて考へなければならなかつた。凡てが蘇廢の

影であり凋落の色であるうちに、血と肉と歴史とで結び付けられた自分をも併せて考へなければならなかつた。

姉の家へ来た時、彼の心は沈んでゐた。それと反對に彼の氣は興奮してゐた。

「いや何うもわざ／＼御呼び立て申して」と比田が挨拶した。是は昔の健三に對する彼の態度ではなかつた。然し變つて行く世相のうちに、彼がひとり姉の夫たる此人にだけ優者になり得たといふ誇りは、健三にとつて満足であるよりも、寧ろ苦痛であつた。

「一寸上がらうにも、何うにも斯うにも忙しくつて遣り切れないもんですから。現に昨夜なども宿直でしてね。今夜も實は頼まれたんですけれども、貴方と御約束があるから、斷つてやつとの事で今歸つて来た所で」

比田のいふ所を黙つて聽いてゐると彼が變な女を其勤先の近所に圍つてゐるといふ噂はまるで嘘のやうであつた。

古風な言葉で形容すれば、たゞ算筆に達者だといふ事の外に、大した學問も才幹もない彼が、今時の會社で、さう重寶がられる筈がないのに。——健三の心には斯んな疑問さへ湧いた。

「姉さんは」

「それにお夏が又例の喘息でね」

姉は比田のいふ通り針箱の上に載せた括り枕に倚りかゝつて、せい／＼云つてゐた。茶の間を覗きに立つた健三の眼に、其亂れた髪の手がむごたらしく映つた。

「何うです」

彼女は頭を真直に上げる事さへ叶はないで、小さな顔を横にした儘健三を見た。挨拶をしようと思ふ努力が、すぐ咽喉に障つたと見えて、今迄多少落ち付いてゐた咳嗽の発作が一度に來た。其咳嗽は一つがまだ濟まないうちに、後からく仕切りなしに出て來るので、傍で見ても氣が退けた。

「苦しうだな」

彼は獨り言のやうに斯う呟やいて、眉を擡めた。

見馴れない四十恰好の女が、姉の後から背中を撫つてゐる傍に、一本の杉箸を添へた水飴の入物が盆の上に乗せてあつた。女は健三に會釋した。

「何うも一昨日からね、あなた」

姉は斯うして三日も四日も不眠絶食の姿で衰へて行つたあと、又活作用の弾力で、ざり／＼元へ戻るのを、年來の習慣としてゐた。それを知らない健三ではなかつたが、目前此猛烈な咳嗽と消え入るやうな呼吸遣とを見てゐると、病氣に罹つた常人よりも自分の方が却つて不安で堪らなくなつた。

「口を利かうとすると咳嗽を誘ひ出すのでせう。靜かにしてゐらつしやい。私は彼方へ行くから」
發作の一仕切收まつた時、健三は斯う云つて、またもとの座敷へ歸つた。

二十五

比田は平氣な顔をして本を讀んでゐた。「いえなに又例の持病ですから」と云つて、健三の慰問には丸

で取り合はなかつた。同じ事を年に何度となく繰返して行くうちに、自然と末枯れて來る氣の毒な女房の姿は、此男にとつて毫も感傷の種にならないやうに見えた。實際彼は三十年近くも同棲して來た彼の妻に、たゞの一つ優しい言葉を掛けた例のない男であつた。

健三の這入つて來るのを見た彼は、すぐ讀み懸けの本を伏せて、鐵縁の眼鏡を外した。

「今一寸貴方が茶の間へ行つてゐらした間に、下らないものを讀み出したんです」

比田と讀書——是は又極めて似つかはしくない取合せであつた。

「何ですか、それは」

「なに健ちやんなんぞの讀むもんぢやありません、古いもんで」

比田は笑ひながら、机の上に伏せた本を取つて健三に渡した。それが意外にも常山紀談だつたので健三は少し驚いた。それにしても自分の細君が今にも絶息しさうな勢ひで咳き込んでゐるのを、丸で餘所事のやうに聽いて、こんなものを平氣で讀んでゐられる所が、如何にも能く此男の性質をあらはしてゐた。

「私や舊弊だから斯ういふ古い講談物が好きでしてね」

彼は常山紀談を普通の講談物と思つてゐるらしかつた。然しそれを書いた湯淺常山を講釋師と間違へる程でもなかつた。

「矢つ張り學者なんでせうね、其男は。曲亭馬琴と何方でせう。私や馬琴の八犬傳を持つてゐるんだが」
成程彼は桐の本箱の中に、日本紙へ活版で刷つた豫約の八犬傳を綺麗に重ね込んでゐた。

「健ちやんは江戸名所圖繪を御持ちですか」

「いゝえ」

「ありや面白い本ですね。私や大好きだ。なんなら貸して上げませうか。なにしろ江戸と云つた昔の日本橋や櫻田がすつかり分るんだからね」

彼は床の上にある別の本箱の中から、美濃紙版の淺黄の表紙をした古い本を一二冊取り出した。さうして恰も健三を江戸名所圖繪の名さへ聞いた事のない男のやうに取扱つた。其健三には子供の時分その本を蔵から引き摺り出して来て、頁から頁へと丹念に挿繪を拾つて見て行くのが、何よりの楽しみであつた時代の、懐かしい記憶があつた。中にも駿河町といふ所に描いてある越後屋の暖簾と富士山とが、彼の記憶を今代表する焼點となつた。

「此分では迎もその頃の悠長な心持で、自分の研究と直接關係のない本などを讀んでゐる暇は、藥にしかたくつても出て来まい」

健三は心のうちで斯う考へた。たゞ焦燥りに焦燥つてばかりゐる今の自分が、恨めしくもあり又氣の毒でもあつた。

兄が約束の時間迄に顔を出さないで、比田は其間を繋ぐためか、しきりに書物の話をつゞけようとした。書物の事なら何時迄話してゐても、健三にとつて迷惑にならないといふ自信でも持つてゐるやうに見えた。不幸にして彼の知識は、常山紀談を普通の講談ものとして考へる程度であつた。それでも彼は昔出た風俗畫報を一冊残らず綴ぢて持つてゐた。
本の話が盡きた時、彼は仕方がなしに問題を變へた。

「もう來さうなもんですね、長さんも。あれ程云つてあるんだから忘れる筈はないんだが。それに今日は明けの日だから、遅くとも十一時頃迄には歸らなきやならないんだから。何なら一寸迎に遣りませうか」
此時又變化が來たと見えて、火の着くやうに咳き入る姉の聲が茶の間の方で聞こえた。

二十六

やがて門口の格子を開けて、沓脱へ下駄を脱ぐ音がした。

「やつと來たやうですぜ」と比田が云つた。

然し玄關を通り抜けた其足音はすぐ茶の間へ這入つた。

「また悪いの。驚いた。些も知らなかつた。何時から」

短い言葉が感投詞のやうに又質問のやうに、座敷に坐つてゐる二人の耳に響いた。その聲は比田の推察通りやつぱり健三の兄であつた。

「長さん、先刻から待つてゐるんだ」

性急な比田はすぐ座敷から聲を掛けた。女房の喘息などは何うなつても構はないといつた風の其調子が、如何にも此男の特性をよく現はしてゐた。「本當に手前勝手な人だ」とみんなから云はれる丈あつて、彼は此場合にも、自分の都合より外に何も考へてゐないやうに見えた。

「今行きますよ」

長太郎は少し癩だと見えて、中々茶の間から出て來なかつた。

「重湯でも少し飲んだら好いでせう。厭？でもさう何も食べなくつちや身體が疲れる丈だから」
姉が息苦しくつて、受答へが出来かねるので、背中を撫つてゐた女が一口ごとに適宜な挨拶をした。平
牛健三よりは親しく其宅へ出入する兄は、見馴れない此女とも近付と見えた。其所爲か彼等の應對は容易
に盡きなかつた。

比田はふりつと膨れてゐた。朝起きて顔を洗ふ時のやうに、両手で黒い顔をこしく擦つた。仕舞ひに
健三の方を向いて、小さな聲で斯んな事を云つた。

「健ちやんあれだから困るんですよ。口ばかり多くつてね。此方も手がなから仕方なしに頼むんだが」
比田の非難は明かに健三の見知らない女の上に投げ掛けられた。

「何ですあの人は」
「そら梳手のお勢ですよ。昔健ちやんの遊びに来る時分、よく居たちやありませんか、宅に」
「へえ、」

健三には比田の家でそんな女に會つた覚えが全くなかつた。

「知りませんね」
「なに知らない事があるもんですか、お勢だもの。彼奴はね、御承知の通りまことに親切で實意のある
好い女なんだが、あれだから困るんです。喋舌るのが病なんだから」

よく事情を知らない健三には、比田のいふ事が、たゞ自分丈に都合のい、誇張のやうに聞こえるばかり
で、大した感銘も與へなかつた。

姉はまた咳き出した。その發作が一段落片付く迄は、さすがの比田も黙つてゐた。長太郎も茶の間を出
て來なかつた。

「何だか先刻より劇しい様ですね」
少し不安になつた健三は、さう云ひながら席を立たうとした。比田は一も二もなく留めた。

「なあに大丈夫、大丈夫。あれが持病なんですから大丈夫。知らない人が見ると一寸吃驚しますがね。
私なんざあもう年來馴れつ子になつてゐるから平氣なもんですよ。實際又あれを一々苦にしてゐるやうぢや、
とても今日迄一所に住んでゐる事は出来ませんからね」

健三は何とも答へる譯に行かなかつた。たゞ腹の中で、自分の細君が歇私的里的發作に冒された時の苦
しい心持を、自然の對照として描き出した。

姉の咳嗽が一收まり收まつた時、長太郎は始めて座敷へ顔を出した。
「何うも濟みません。もつと早く來る筈だつたが、生憎珍らしく客があつたもんだから」

「來たか長さん待つてたほい。冗談ぢやないよ。使でも出さうかと思つてた所です」
比田は健三の兄に向つてこの位な氣安い口調で話の出来る地位にあつた。

二十七

三人はすぐ用談に取り掛つた。比田が最初に口を開いた。
彼は一寸した相談事にも仔細ぶる男であつた。さうして仔細ぶればぶる程、自分の存在が周圍から強く

認められると考へてゐるらしかつた。「比田さん比田さんつて、立て、置きさへすりや好いんだ」と皆が蔭で笑つてゐた。

「時に長さん何うしたもんだらう」

「さう」

「何うもこりや天から筋が違ふんだから、健ちやんに話をする迄もなからうと思ふんだがね、私や」

「左右さ。今更そんな事を持ち出して来たつて、此方で取り合ふ必要もないだらうぢやないか」

「だから私も突つ跳ねたのさ。今時分そんな事を持ち出すのは、丸で自分の殺した子供を、もう一返生かして呉れつて、御寺様へ頼みに行くやうなものだからお止しなさいつて。だけど大將いくら何と云つても、坐り込んで動かないんだからね、仕方がない。然しあの男があゝやつて今頃私の宅へのんこのしやあで遣つて来るのも、實はといふと、矢つ張り昔〇の關係があつたからの事さ。だつてそりや昔も昔、すつと昔の話でさあ。其上たゞで借りやしましね……」

「またたゞで貸す風でもなしね」

「さうさ。口ぢや親類付合だとか何とか云つてる癖に、金にかけちやあかの他人より阿漕なんだから」

「来た時にさう云つて遣れば好いのに」

比田と兄との談話は中々元へ戻つて来なかつた。ことに比田は其處に健三のゐるのさへ忘れてしまつたやうに見えた。健三は好加減に何とか口を出さなければならなくなつた。

「一體何うしたんです。島田が此方へでも突然伺つたんですか」

「いやわざ／＼御呼び立て申して置いて、つい自分の勝手ばかり喋舌つて済みません。——ぢや長さん私から健ちやんに一應其顛末を御話する事にしようか」

「え、何うぞ」

話は意外にも單純であつた。——ある日島田が突然比田の所へ来た。自分も年を取つて頼りにするものがないので心細いといふ理由の下に、昔通り島田姓に復歸して貰ひたいから何うぞ健三にさう取次いでくれと頼んだ。比田も其要求の突飛なのに驚いて最初は拒絶した。然し何と云つても動かないので、兎も角も彼の希望丈は健三に通じようと受合つた。——たゞ是だけなのである。

「少し變ですなえ」

健三には何う考へても變としか思はれなかつた。

「變だよ」

兄も同じ意見を言葉にあらはした。

「何うせ變にや違ひない、何しろ六十以上になつて、少しやきが廻つてるからね」

「慾でやきが廻りやしないか」

比田も兄も可笑しさうに笑つたが、健三は獨り其仲間へ入る事が出来なかつた。彼は何時迄も變だと思ふ氣分に制せられてゐた。彼の頭から判断すると、そんな事は到底ありやう筈がなかつた。彼は最初に吉田が来た時の談話を思ひ出した。次に吉田と島田が一所に來た時の光景を思ひ出した。最後に彼の留守に旅先から歸つたと云つて、島田が一人で訊ねて來た時の言葉を思ひ出した。然し何處を何う思ひ出して、

其處から斯んな結果が生れて来ようとは考へられなかつた。

「何うしても變ですな」

彼は自分の爲に同じ言葉をもう一度繰返して見た。それから漸と氣を換へて斯う云つた。

「然しそりや問題にやならないでせう。たゞ斷りさへすりや好いんだから」

二十八

健三の眼から見ると、島田の要求は不思議な位理に合はなかつた。従つてこれを片付けるのも容易であつた。たゞ簡單に斷りさへすれば濟んだ。

「然し一旦は貴方の御耳迄入れて置かないと、私の落度になりますからね」と比田は自分を辯護するやうに云つた。彼は何處迄も此會合を眞面目なものにしなければ氣が濟まないらしかつた。それで言ふ事も時によつて變化した。

「それに相手が相手ですからね。まかり間違へば何をするか分らないんだから、用心しなくつちやいけませんよ」

「焼が廻つてるなら構はないぢやないか」と兄が冗談半分に彼の矛盾を指摘すると、比田は猶眞面目になつた。

「焼が廻つてるから怖いんです。なに先が當り前の人間なら、私だつて其場ですぐ斷つちまひませう」斯んな曲折は會談中に時々起つたが、要するに話は最初に戻つて、つまり比田が代表者として島田の要求

求を斷るといふ事になつた。それは三人が三人ながら始めから豫期してゐた結局なので、其處へ行き着く迄の筋道は、健三から見ると、寧ろ時間の空費に過ぎなかつた。然し彼はそれに對して比田に禮を述べる義理があつた。

「いえ何御禮なんぞ仰有られると恐縮します」といつた比田の方は却つて得意であつた。誰が見ても宅へも歸らずに忙しがつてゐる人の様子とは受取れない程、調子づいて來た。

彼は其處にある鹽煎餅を取つて矢鱈にほりく噛んだ。さうしてその相間々々には大きな湯呑へ茶を何杯も注ぎ替へて飲んだ。

「相變らず能く食べますね。今でも鰻飯を二つ位遣るんでせう」

「いや人間も五十になるともう駄目ですね。もとは健ちやんの見てゐる前で天ぶら蕎麥を五杯位へろりと片付けたもんでしたかね」

比田は其頃から食氣の強い男であつた。さうして餘計食ふのを自慢にしてゐた。それから腹の太いのを賞められたがつて、時機さへあれば始終叩いて見せた。

健三は昔此人に連れられて寄席などに行つた歸りに、能く二人して屋臺店の暖簾を潛つて、鮭や天麩羅の立食をした當時を思ひ出した。彼は健三に其寄席で聴いたしかをどりとかいふ三味線の手を教へたり、又はさばを讀むといふ隠語などを習ひ覚えさせたりした。

「どうも矢つ張り立食に限るやうですね。私も此年になる迄、段々方々食つて歩いて見たが、健ちやん、一遍輕井澤で蕎麥を食つて御覽なさい、騙されたと思つて。汽車の停つてゐるうちに、降りて食ふんです、

ブラットホームの上へ立つてね、流石本場丈あつて旨うがすぜ」

彼は信心を名として能く方々遊び廻る男であつた。

「それよか、善光寺の境内に元祖藤八拳指南所といふ看板が懸つてゐるには驚いたね、長さん」

「這入つて一つ遣つて來やしないか」

「だつて束脩が要るんだからね、君」

斯んな談話を聞いてゐると、健三も何時か昔の我に歸つたやうな心持になつた。同時に今の自分が、何んな意味で彼等から離れて何處に立つてゐるかも明かに意識しなければならなくなつた。然し比田は一向そこに氣が付かなかつた。

「健ちやんはたしか京都へ行つた事がありますね。彼處に、ちんちらでんき皿持てこ汁飲ましよつて鳴く鳥がゐるのを御存じですか」などと、訊いた。

先刻から落付いてゐた姉が、又劇しく咳き出した時、彼は漸く口を閉ぢた。さうして左もくさくしたと云はぬ許りに、左右の手の平を揃へて、黒い顔をこしく擦つた。

兄と健三は一寸茶の間の様子を覗きに立つた。二人共發作の靜まる迄姉の枕元に坐つてゐた後で、別々に比田の家を出た。

二十九

健三は自分の背後にこんな世界の控へてゐる事を遂に忘れることが出来なくなつた。此世界は平生の彼

にとつて遠い過去のものであつた。然しいざといふ場合には、突然現在に變化しなければならぬ性質を帯びてゐた。

彼の頭には願仁坊主に似た比田の毬栗頭が浮いたり沈んだりした。猫のやうに顫の詰つた姉の息苦しく喘いでゐる姿が薄暗く見えた。血の氣の竭きかけた兄に特有なひすばつた長い顔も出たり引込んだりした。昔この世界に人となつた彼は、その後自然の力でこの世界から獨り脱け出してしまつた。さうして脱け出したまゝ、永く東京の地を踏まなかつた。彼は今再びその中へ後戻りをして、久し振に過去の臭を嗅いだ。それは彼に取つて、三分の一の懐かしさと、三分の二の厭らしさを齎す混合物であつた。

彼は又其世界とは丸で關係のない方角を眺めた。すると其處には時々彼の前を横切る若い血と輝いた眼を有つた青年がゐた。彼は其人々の笑ひに耳を傾けた。未來の希望を打ち出す鐘のやうに朗かなその響が、健三の暗い心を躍らした。

或日彼は其青年の一人に誘はれて、池の端を散歩した歸りに、廣小路から切通しへ抜ける道を曲つた。彼等が新しく建てられた見番の前へ來た時、健三は不圖思ひ出したやうに青年の顔を見た。

彼の頭の中には自分と丸で縁故のない或女の事が閃いた。其女は昔藝者をしてゐた頃人を殺した罪で、二十年餘りも牢屋の中で暗い月日を送つた後、漸と世の中へ顔を出す事が出来るやうになつたのである。

「嗚辛いだらう」

容色を生命とする女の身になつたら、殆ど堪へられない淋しみが其處にあるに違ないと健三は考へた。然しいくらでも春が永く自分の前に續いてゐるとしか思はない伴の青年には、彼の言葉が何程の効果にも

ならなかつた。此青年はまだ二十三四であつた。彼は始めて自分と青年との距離を悟つて驚いた。

「さう云ふ自分も矢つ張り此藝者と同じ事なのだ」

彼は腹の中で自分と自分に斯う云ひ渡した。若い時から白髪が生えたがる性質の彼の頭には、氣の所爲か近頃めつきり白い筋が増して來た。自分はまだくと思つてゐるうちに、十年は何時の間にか過ぎた。

「然し他事ぢやないね君。其實僕も青春時代を全く牢獄の裡で暮したのだから」

青年は驚いた顔をした。

「牢獄とは何です」

「學校さ、それから圖書館さ。考へると兩方ともまあ牢獄のやうなものだね」

青年は答へなかつた。

「然し僕が若し長い間の牢獄生活をつゞけなければ、今日の僕は決して世の中に存在してゐないんだから仕方がない」

健三の調子は半ば辯解的であつた。半ば自嘲的であつた。過去の牢獄生活の上に現在の自分を築き上げた彼は、其現在の自分の上には是非共未來の自分を築き上げなければならなかつた。それが彼の方針であつた。さうして彼から見ると正しい方針に違なかつた。けれども其方針によつて前へ進んで行くのが、此時の彼には徒に老ゆるといふ結果より外に何物をも持ち來さないやうに見えた。

「學問ばかりして死んでしまつても人間は詰らないね」
「そんな事はありませぬ」

彼の意味はつひに青年に通じなかつた。彼は今の自分が、結婚當時の自分と、何んなに變つて、細君の眼に映るだらうかを考へながら歩いた。其細君はまた子供を生むたびに老けて行つた。髪の毛なども氣の引ける程抜ける事があつた。さうして今は既に三番目の子を胎内に宿してゐた。

三十

家へ歸ると細君は奥の六疊に手枕をしたなり寐てゐた。健三は其傍に散らばつてゐる赤い片端だの物指だの針箱だのを見て、又かといふ顔をした。

細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遅く起きた。健三を送り出してから又横になる日も少くはなかつた。斯うして飽く迄眠りを食らないと、頭が痺れたやうになつて、其日一日何事をしても判然しないといふのが、常に彼女の辯解であつた。健三は或は左右かも知れないと思つたり、又はそんな事があるものかと考へたりした。ことに小言を言つたあとで、寐られるときは、後の方の感じが強く起つた。

「不貞寐をするんだ」

彼は自分の小言が、歇私的里性の細君に對して、何う反應するかを、よく觀察してやる代りに、單なる面當のために、斯うした不自然の態度を彼女が彼に示すものと解釋して、苦々しい呟きを口の内で漏らす事がよくあつた。

「何故夜早く寐ないんだ」

彼女は宵つ張であつた。健三に斯う云はれる度に、夜は眼が冴えて寐られないから起きてゐるのだといふ答辯を吃度した。さうして自分の起きてゐたい時迄は必ず起きて縫物の手を已めなかつた。

健三は斯うした細君の態度を悪んだ。同時に彼女の歇私的里を恐れた。それからもしや自分の解釋が間違つてゐるはしまいかといふ不安にも制せられた。

彼は其處に立つた儘、しばらく細君の寐顔を見詰めてゐた。眩の上に載せられた其横顔は寧ろ蒼白かつた。彼は黙つて立つてゐた。お住といふ名前さへ呼ばなかつた。

彼は不圖眼を轉じて、あらはな白い腕の傍に放り出された一束の書物に氣を付けた。それは普通の手紙の重なり合つたものでもなければ、又新しい印刷物を一纏めに括つたものとも見えなかつた。總體が茶色が、つて既に多少の時代を帯びてゐる上に、古風なかんじん捺で丁寧な結び目がしてあつた。其書もの

一端は、殆ど細君の頭の下に敷かれてゐると思はれる位、彼女の黒い髪で、健三の目を遮つてゐた。彼はわざ／＼それを引き出して見る氣にもならず、又眼を蒼白い細君の額の上に注いだ。彼女の頬は滑り落ちるやうにこけてゐた。

「まあ御瘦せなすつた事」
久し振に彼女を訪問した親族のある女は、近頃の彼女の顔を見て驚いたやうに、斯んな評を加へた事があつた。其時健三は何故だか此細君を瘦せさせた凡ての原因が自分一人にあるやうな心持がした。

彼は書齋に入つた。三十分も経つたと思ふ頃、門口を開ける音がして、二人の子供が外から歸つて來た。坐つてゐる健三の

耳には、彼等と子守との問答が手に取るやうに聞こえた。子供はやがて駆け込むやうに奥へ入つた。其處では又細君が蒼蠅といつて、彼等を叱る聲がした。

夫からしばらくして細君は先刻自分の枕元にあつた一束の書き物を手に持つた儘、健三の前にあらはれた。

「先程御留守に御兄いさんが入らつしやいましたね」
健三は萬年筆の手を止めて、細君の顔を見た。

「もう歸つたのかい」
「え、今一寸散歩に出掛けましたから、もうちき歸りませうつて御止めしたんですけれども、時間が

ないからつて御上りになりませんでした」
「さうか」

「何でも谷中に御友達とかの御葬式があるんですつて。それで急いで行かないと間に合はないから、上つてゐられないんだと仰しやいました。然し歸りに暇があつたら、もしかすると寄るかも知れないから、歸つたら待つてゐるやうに云つて呉れつて、云ひ置いて行らつしやいました」

「何の用なのかね」
「矢つ張りあの人の事なんださうです」

兄は島田の事で來たのであつた。

細君は手に持った書付の束を健三の前に出した。

「是を貴夫に上げて呉れと仰しやいました」

健三は怪訝な顔をしてそれを受取った。

「何だい」

「みんなあの人に關係した書類なんださうです。健三に見せたら参考になるだらうと思つて、用筆筒の抽匣の中に仕舞つて置いたのを、今日出して持つて來たつて仰しやいました」

「そんな書類があつたのかしら」

彼は細君から受取つた一括りの書付を手に載せた儘、ほんやり時代の付いた紙の色を眺めた。それから何の意味なしに、裏表を引繰返して見た。書類は厚さにして略二寸もあつたが、風の通らない濕氣た所に長い間放り込んであつた所爲か、蟲に食はれた一筋の痕が偶然健三の眼を懐古的にした。彼は其不規則な筋を指の先でざら／＼撫で、見た。けれども今更丁寧に絡けたかんじん撚の結び目を解いて、一々中を檢める氣も起らなかつた。

「開けて見たつて何が出て來るものか」

彼の心は此一句でよく代表されてゐた。

「御父さまが後々の爲にちやんと一纏にして取つて御置になつたんですつて」

「左右か」

健三は自分の父の分別と理解力に對して大した尊敬を拂つてゐなかつた。

「おやぢの事だから屹度何でもかんでも取つて置いたんだらう」

「然しそれも皆貴夫に對する御親切からなんぞせう。あんな奴だから己のゐなくなつた後に、何んな事を云つて來ないとも限らない、其時には是が役に立つつて、わざ／＼一纏にして、御兄さんに御渡になつたんださうですよ」

「左右かね、己は知らない」

健三の父は中氣で死んだ。その父のまだ達者であるつと前から彼はもう東京にゐなかつた。彼は親の死目にさへ會はなかつた。斯んな書付が自分の眼に觸れないで、長い間兄の手元に保管されてゐたのも、別段の不思議ではなかつた。

彼は漸く書類の結目を解いて一所に重なつてゐるものを、一々ほごし始めた。手續書と書いたものや、取替せ一札の事と書いたものや、明治二十一年子一月約定金請取の證と書いた半紙二つ折の帳面やらが順にあらはれて來た。其帳面の仕舞には、右本日受取右月賦金は皆濟相成候事と島田の手蹟で書いて黒い判がべたりと捺してあつた。

「おやぢは月々三圓か四圓づゝ取られたんだな」

「あの人にですか」

細君は其帳面を逆さまに覗き込んでゐた。

結
と

「べて若干になるかしら。然し此外にまだ一時に遣つたものがある筈だ。おやぢの事だから、屹度その受取を取つて置いたに違ない。何處かにあるだらう」

書付は夫から夫へと續々出て來た。けれども、健三の眼には何れも是もごちやく／＼して容易に解らなかつた。彼はやがて四つ折にして一纏に重ねた厚みのあるものを取り上げて中を開いた。

「小學校の卒業證書迄入れてある」

其小學校の名は時によつて變つてゐた。一番古いものには第一大學區第五中學區第八番小學など、いふ朱印が押してあつた。

「何ですかそれは」

「何だか己も忘れてしまつた」

「よつほど古いものね」

證書のうちには賞状も二三枚交つてゐた。昇り龍と降り龍で丸い輪廓を取つた真中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に斷つてあつた。

「書物を貰つた事があるんだがな」

彼は勸善訓蒙だの輿地誌略だのを抱いて喜びの餘り飛んで宅へ歸つた昔を思ひ出した。御褒美をもらふ前の晩夢に見た蒼い龍と白い虎の事も思ひ出した。是等の遠いものが、平生と違つて今の健三には甚だ近く見えた。

細君には此古臭い免狀が猶の事珍らしかつた。夫の一旦下へ置いたのを又取り上げて、一枚々々丁寧に剝練つて見た。

「變ですわね。下等小學第五級だの六級だのつて。そんなものが在つたんでせうか」

「在つたんだね」

健三は其儘外の書付に手を着けた。讀みにくい彼の父の手蹟が大いに彼を苦しめた。

「之を御覽、迎も讀む勇氣がないね。只でさへ判明らない所へ持つて來て、無暗に朱を入れたり棒を引いたりしてあるんだから」

健三の父と島田との懸合に就いて必要な下書らしいものが細君の手に渡された。細君は女丈あつて、綿密にそれを讀み下した。

「貴夫の御父さまはあの島田つて人の世話をなすつた事があるのね」

「そんな話は己も聞いてはゐるが」

「此處に書いてありますよ。——同人幼少にて勤向相成りがたく當方へ引き取り五箇年間養育致候縁合を以てと」

細君の讀み上げる文章は、丸で舊幕時代の町人が町奉行か何かへ出す訴狀のやうに聞えた。其口調に動かされた健三は、自然古風な自分の父を眼の前に髣髴した。其父から、將軍の鷹狩に行く時の模様などを、

それ相當の敬語で聞かされた昔も思ひ合された。然し事實の興味が主として働きかけてゐる細君の方では丸で文體などに頓着しなかつた。

「その縁故で貴夫はあの人の所へ養子に遣られたのね。此處にさう書いてありますよ」

健三は因果な自分を自分で憐んだ。平氣な細君は其續きを讀み出した。

「右健三三歳の砌り養子に差遣はし置候處平吉儀妻常と不和を生じ、遂に離別と相成候につき當時八歳の健三を當方へ引き取り今日迄十四箇年間養育致し、——あとは眞赤でごちやく／＼して讀めないわね」

細君は自分の眼の位置と書付の位置とを色々配合して後を讀まうと企てた。健三は腕組をして黙つて待つてゐた。細君はやがてくす／＼笑ひ出した。

「何が可笑しいんだ」

「だつて」

細君は何も云はずに、書付を夫の方に向け直した。さうして人さし指の頭で、細かく割註のやうに朱で書いた所を抑へた。

「一寸其處を讀んで御覽なさい」

健三は八の字を寄せながら、其一行を六づかしさうに讀み下した。

「取扱ひ所勤務中遠山藤と申す御家へ通じ合ひ候が事の起り。——何だ下らない」

「然し本當なんぞでせう」

「本當は本當さ」

「それが貴夫の八つの時なのね。それから貴夫は御自分の宅へ御歸りになつた譯ね」

「然し籍を返さないんだ」

「あの人か？」

細君はまた其書付を取り上げた。讀めない所は其儘にして置いて、讀める所丈眼を通して、自分のまだ知らない事實が出て来るだらうといふ興味が、少からず彼女の好奇心を唆つた。

書付の仕舞の方には、島田が健三の戸籍を元通りにして置いて實家へ返さないのみならず、いつの間にか戸主に改めた彼の印形を濫用して金を借り散らした例などが擧げてあつた。

愈手を切る時に養育料として島田に渡した金の證文も出て來た。それには、然る上は健三離縁本籍と引替に當金——圓御渡し被下、殘金——圓は毎月三十日限り月賦にて御差入の積御對談云々と長たらしく書いてあつた。

「凡て變挺な文句許りだね」

「親類取扱人比田寅八つて下に印が押してあるから、大方比田さんでも書いたんでせう」

健三はつい此間會つた比田の萬事に心得顔な様子と、此證文の文句とを引き比べて見た。

三十三

葬式の歸りに寄るかも知れないと云つた兄は遂に顔を見せなかつた。

「あんまり遅くなつたから、すぐ御歸りになつたんでせう」

健三には其方が便宜であつた。彼の仕事は前の日か前の晩を潰して調べたり考へたりしなければ義務を果す事の出来ない性質のものであつた。従つて必要な時間を他に食ひ削られるのは、彼に取つて甚だしい苦痛になつた。

彼は兄の置いて行つた書類をまた一纏めにして、元のかんじん撫で括らうとした。彼が指先に力を入れた時、其のかんじん撫はぶつりと切れた。

「あんまり古くなつて、弱つたのね」

「まさか」

「だつて書付の方は蟲が食つてる位ですもの、貴夫」

「左右云へばさうかも知れない。何しろ抽斗に投げ込んだなり、今日迄放つて置いたんだから。然し兄貴も能くまあ斯んなものを取つて置いたものだね。困つちや何でも賣る癖に」

細君は健三の顔を見て笑ひ出した。

「誰も買ひ手がないでせう。そんな蟲の食つた紙なんか」

「だがさ。能く紙屑籠の中へ入れてしまはなかつたと云ふ事さ」

細君は赤と白で擦つた細い糸を火鉢の抽斗から出して来て、其處に置かれた書類を新しく絡けた上、それを夫に渡した。

「己の方にや仕舞つて置く所がないよ」

彼の周囲は書物で一杯になつてゐた。手文庫には文藝とノートがぎつしり詰つてゐた。空地のあるのは

夜具蒲團の仕舞つてある一間の戸棚丈であつた。細君は苦笑して立ち上つた。

「御兄さんは二三日うち屹度また入らつしやいますよ」

「あの事ですか」

「それも左右ですけれども、今日御葬式に入らつしやる時に、袴が要るから借してくれつて、此處で穿いて入らしたんですもの。屹度又返しに入らつしやるに極つてゐますわ」

健三は自分の袴を借りなければ葬式の供に立てない兄の境遇を、一寸考へさせられた。始めて學校を卒業した時彼は其兄から貰つたべろくの薄羽織を着て友達と一所に池の端で寫眞を撮つた事をまだ覚えてゐた。其友達の一人在健三に向つて、此中で一番先に馬車へ乗るものは誰だらうと云つた時に、彼は返事をしないで、たゞ自分の着てゐる羽織を淋しさうに眺めた。其羽織は古い絹の紋付に違ひなかつたが、悪く云へば申し譯の爲めに破けずになる位な見すほらしい程度のものであつた。懇意な友人の新婚披露に招かれて星が岡の茶寮に行つた時も、着るものがないので、袴羽織共凡て兄のを借りて間に合せた事もあつた。

彼は細君の知らない斯んな記憶を頭の中に呼び起した。然しそれは今の彼を得意にするよりも却つて悲しくした。今昔の感——さう云ふ在來の言葉で一番よく現せる情緒が自然と彼の胸に湧いた。

「袴位ありさうなものだがね」

「みんな長い間に失くして御仕舞ひなすつたんでせう」

「困るなあ」

「どうせ宅にあるんだから、要る時に貸して上げさへすりや夫で好いでせう。毎日使ふものぢやなし」

「宅にある間はそれで好いがね」

細君は夫に内證で自分の着物を質に入れたついで此間の事件を思ひ出した。夫には何時自分が兄と同じ境遇に陥らないものでもないといふ悲觀的な哲學があつた。

昔の彼は貧しいながら一人世の中に立つてゐた。今の彼は切り詰めた餘裕のない生活をしてゐる上に、周囲のものからは、活力の心棒のやうに思はれてゐた。それが彼には辛かつた。自分のやうなものが親類中で一番好くなつてゐると考へられるのは猶更情なかつた。

三十四

健三の兄は小役人であつた。彼は東京の真中にある或大きな局へ勤めてゐた。其宏壯な建物のなかに永い間憐れな自分の姿を見出す事が、彼には一種の不調和に見えた。

「僕なんぞはもう老朽なんだからね。何しろ若くつて役に立つ人が後から後からと出て来るんだから」
其建物のなかには何百といふ人間が日となく夜となく烈しく働いてゐた。氣力の盡きかけた彼の存在は丸で形のない影のやうなものに違なかつた。

「あゝ厭だ」

活動を好まない彼の頭には常に斯んな觀念が潛んでゐた。彼は病身であつた。年齒より早く老けた。年齒より早く干乾びた。さうして色澤の悪い顔をしながら、死ににでも行く人のやうに働いた。

「何しろ夜寝ないんだから、身體に障つてね」

彼はよく風邪を引いて咳嗽をした。ある時は熱も出た。すると其熱が必ず肺病の前兆でなければならぬやうに彼を脅した。

實際彼の職業は強壯な青年にとつても苦しい性質のものに違なかつた。彼は隔晩に局へ泊らせられた。さうして夜通し起きて働かなければならなかつた。翌日の朝彼はほんやりして自分の宅へ歸つて來た。其日一日は何をする勇氣もなく、只ぐたりと寝て暮らす事さへあつた。それでも彼は自分のため又家族のために働くべく餘儀なくされた。

「今度は少し危険いやうだから、誰かに頼んで呉れないか」

改革とか整理とかいふ噂のある度に、健三はよく斯んな言葉を彼の口から聞かされた。東京を離れてゐる時などは、わざ／＼手紙で依頼して來た事も一遍や二遍ではなかつた。彼は其都度誰それにと云つて、わざ／＼要路の人を指名した。然し健三にはたゞ名前が知れてゐる丈で、自分の兄の位置を保證してもらふ程の親しみのあるものは一人もなかつた。健三は頰杖を突いて考へさせられる許りであつた。

彼は斯うした不安を何度となく繰返しながら、昔から今日迄同じ職務に従事して、動きもしなければ發展もしなかつた。健三よりも七つ許り年上な彼の半生は、恰も變化を許さない器械の様なもので、次第に消耗して行くより外には何の事實も認められなかつた。

「二十四五年もあんな事をしてゐる間には何か出來さうなものだかね」
健三は時々自分の兄を斯んな言葉で評したくなつた。其兄の派出好で勉強嫌であつた昔も眼の前に見え

るやうであつた。三味線を弾いたり、一絃琴を習つたり、白玉を丸めて鍋の中へ放り込んだり、寒天を煮て切溜で冷したり、凡ての時間は其頃の彼に取つて食ふ事と遊ぶ事ばかりに費されてゐた。

「みんな自業自得だと云へば、まあそんなものさね」

是が今の彼の折々他に洩す述懐になる位彼は忘ける者であつた。

兄弟が死に絶えた後、自然健三の生家の跡を襲ぐやうになつた彼は、父が亡くなるのを待つて、家屋敷をすぐ賣り拂つてしまつた。それで元からある借金を濟して、自分は小さな宅へ這入つた。それから其處に納まり切らない道具類を賣拂つた。

間もなく彼は三人の子の父になつた。そのうちで彼の最も可愛がつてゐた惣領の娘が、年頃になる少し前から悪性の肺結核に罹つたので、彼は其娘を救ふために、あらゆる手段を講じた。然し彼のなし得る凡ては残酷な運命に對して全くの徒勞に歸した。二年越煩つた後で彼女が遂に斃れた時、彼の家の箆笥は丸で空になつてゐた。儀式に要る袴は無論、一寸した紋付の羽織さへなかつた。彼は健三の外國で着古した洋服を貰つて、それを大事に着て毎日局へ出勤した。

三十五

一三日経つて健三の兄は果して細君の豫想通り袴を返しに來た。

「何うも遅くなつて御氣の毒さま。有難う」

彼は腰板の上に雙方の端を折返して小さく疊んだ袴を、風呂敷の中から出して細君の前に置いた。大の

見榮坊で、一寸した包物を持つのも厭がつた昔に比べると、今の兄は全く色氣が抜けてゐた。其代り膏氣もなかつた。彼ははさ／＼した手で、汚れた風呂敷の隅を掴んで、それを鄭寧に折つた。

「こりや好い袴だね。近頃拵へたの」

「いゝえ。中々そんな勇氣はありません。昔からあるんです」

細君は結婚のとき此袴を着けて勿體らしく坐つた夫の姿を思ひだした。遠い所で極簡略に行はれた其結婚の式に兄は列席してゐなかつた。

「へえ、左右かね。成程さう云はれると何處かで見たやうな氣もするが。然し昔のものは矢つ張り丈夫なんだね。ちつとも敗んでゐないぢやないか」

「滅多に穿かないんですもの。それでも一人であるうちに能くそんな物を買ふ氣になれたのね、あの人が。私今でも不思議だと思ひますわ」

「或は婚禮の時に穿く積でわざ／＼拵へたのかも知れないね」

二人は其時の異様な結婚式に就いて笑ひながら話し合つた。

東京からわざ／＼彼女を伴れて來た細君の父は、娘に振袖を着せながら、自分は一通りの禮装さへ調べてゐなかつた。セルの單衣を着流しの儘で仕舞には胡坐さへ搔いた。婆さん一人より外に誰も相談する相手のない健三の方では猶の事困つた。彼は結婚の儀式に就いて全くの無方針であつた。もと／＼東京へ歸つてから貰ふといふ約束があつたので、媒妁人も其地にはゐなかつた。健三は参考のため此媒妁人が書いて送つて呉れた注意書のやうなものを讀んで見た。それは立派な紙に楷書で認められた嚴しいものには違

なかつたが、中には東鑑などが例に引いてある丈で、何の實用にも立たなかつた。

「雌蝶も雄蝶もあつたもんぢやないのよ貴方。だいち御盃の縁が缺けてゐるんですもの」

「それで三々九度を遣つたのかね」

「えゝ。だから夫婦中が斯んなにがたびしするんでせう」

兄は苦笑した。

「健三も中々の氣六かしやだから、お住さんも骨が折れるだらう」

細君はたゞ笑つてゐた。別段兄の言葉に取り合ふ氣色も見えなかつた。

「もう歸りさうなものですかね」

「今日は待つて、例の事件を話して行かなくつちや……」

兄はまだ其後を云はうとした。細君はふいと立つて茶の間へ時計を見に這入つた。其處から出て來た時、

彼女は此間の書類を手にしてゐた。

「是が要るんでせう」

「いえ夫はたゞ參考迄に持つて來たんだから、多分要るまい。もう健三に見せて呉れたんでせう」

「えゝ見せました」

「何と云つてたかね」

細君は何とも答へやうがなかつた。

「随分澤山色々な書付が這入つてゐますわね。此中には」

「御父さんが、今に何か事があると不可いつて、丹念に取つて置いたんだから」

細君は夫から頼まれて其中の最も大切らしい一部分を彼の爲に代讀した事は云はなかつた。兄もそれぎり書類に就いて語らなくなつた。「二人は健三の歸る迄の時間をたゞの雑談に費した。其健三は約三十分程して歸つて來た。

三十六

彼が何時もの通り服装を改めて座敷へ出た時、赤と白と撚り合はせた細い絲で括られた例の書類は兄の膝の上にあつた。

「先達ては」

兄は油氣の抜けた指先で、一度解きかけた絲の結び目を元の通りに締めた。

「今一寸見たら此中には君に不必要なものが紛れ込んでゐるね」

「左右ですか」

此大事さうに仕舞込まれてあつた書付に、兄が長い間眼を通さなかつた事を健三は知つた。兄は又自分の弟がそれ程熱心にそれを調べてゐない事に氣が付いた。

「お由の送籍願が這入つてゐるんだよ」

お由といふのは兄の妻の名であつた。彼が其人と結婚する當時に必要であつた區長宛の願書が其處から出て來ようとは、二人とも思ひがけなかつた。

兄は最初の妻を離別した。次の妻に死なれた。其二度目の妻が病氣の時、彼は夫として心配の様子もなく能く出歩いた。病症が悪阻だから大丈夫といふ安心もあるらしく見えたが、容體が險惡になつて後も、彼は依然として其態度を改める様子がなかつたので、人はそれを氣に入らない妻に對する仕打とも解釋した。健三も或は左右だらうと思つた。

三度目の妻を迎へる時、彼は自分から望みの女を指名して父の許諾を求めた。然し弟には一言の相談もしなかつた。それがため我の強い健三の、兄に對する不平が、罪もない義姉の方に迄影響した。彼は教育も身分もない人を自分の姉と呼ぶのは厭だと主張して、氣の弱い兄を苦しめた。

「なんて捌けない人だらう」

蔭で批評の口にする斯うした言葉は、彼を反省させるよりも却つて頑固にした。習俗を重んずるために學問をしたやうな悪い結果に陥つて自ら知らなかつた彼には、とかく自分の不見識を認めて見識と誇りたがる弊があつた。彼は慚愧の眼をもつて當時の自分を回顧した。

「送籍願が紛れ込んでゐるなら、それを御返しするから、持つて行つたら好いでせう」

「いゝえ寫だから、僕も要らないんだ」

兄は紅白の絲に手も觸れなかつた。健三は不圖其日附が知りたくなつた。

「一體何時頃でしたかね。それを區役所へ出したのは」

「もう古い事さ」

兄は是丈云つたぎりであつた。其の唇には微笑の影が差した。最初も二返目も失敗つて、最後にやつと自分の氣に入つた女と一所になつた昔を忘れる程、彼は驚愕してゐなかつた。同時にそれを口へ出す程若くもなかつた。

「御幾年でしたかね」と細君が訊いた。

「お由ですか。お由はお住さんと一つ違ですよ」

「まだ御若いのね」

兄はそれには何とも答へずに、先刻から膝の上に置いた書類の帯を急に解き始めた。

「まだ斯んなものが這入つてゐたよ。是も君にや關係のないものだ。さつき見て僕もちよいと驚いたが、
」

彼はごたくした故紙の中から、何の雜作もなく一枚の書体を取出した。それは喜代子といふ彼の長女の出産届の下書であつた。「右者本月二十三日午前十一時五十分出生致し候」といふ文句の「本月二十三日」丈に棒が引懸けて消してある上に、蟲の食つた不規則な線が筋違に入つてゐた。

「是も御父さんの手蹟だ。ねえ」

彼は其一枚の反故を大事らしく健三の方へ向け直して見せた。

「御覽、蟲が食つてるよ。尤も其筈だね。出産届ばかりぢやない、もう死亡届迄出てゐるんだから」
結核で死んだ其子の生年月を、兄は口のうちで靜かに讀んでゐた。

兄は過去の人であつた。華美な前途はもう彼の前に横たはつてゐなかつた。何かにつけて後を振り返り勝な彼と對坐してゐる健三は、自分の進んで行くべき生活の方向から逆に引き戻されるやうな氣がした。

「淋しいな」

健三は兄の道伴になるには餘りに未來の希望を多く持ち過ぎた。其癖現在の彼も可なりに淋しいものに違なかつた。其現在から順に推した未來の、當然淋しかるべき事も彼にはよく解つてゐた。

兄は此間の相談通り島田の要求を斷つた旨を健三に話した。然し何んな手續きでそれを斷つたのか、又先方がそれに對して何んな挨拶をしたのか、さういふ細かい點になると、全く要領を得た返事をしなかつた。

「何しろ比田からさう云つて來たんだから慥たらう」

其比田が島田に會ひに行つて話を付けたとも、又は手紙で會見の始末を知らせて遣つたとも、健三には判明らなかつた。

「多分行つたんだらうと思ふがね。それとも彼の人の事だから、手紙丈で済まして仕舞つたのか。其處はつい聽いて來るのを忘れたよ。尤もあの後一遍姉さんの見舞かたく行つた時にや、比田が相變らず留守だつたので、つい會ふ事が出来なかつたのさ。然し其時姉さんの話ちや、何でも忙しいんで、まだ其儘にしてあるやうだつて云つてたがね。あの男も随分無責任だから、ことによると行かないのかも知れないよ」

健三の知つてゐる比田も無責任の男に相違なかつた。其代り頼むと何でも引き受ける性質であつた。ただ他から頭を下けて頼まれるのが嬉しくつて物を受合ひたがる彼は、頼み方が氣に入らないと容易に動か

なかつた。
「然しこんだの事なんざあ、島田がぢかに比田の所へ持ち込んだんだからねえ」
兄は暗に比田自身が先方へ出向いて話を付けなければ義理の悪いやうな事を云つた。其癖彼はこんな場合に決して自分が懸合事杯に出掛ける人ではなかつた。少し氣を遣はなければならぬ面倒が起ると必ず顔を背けた。さうして事情の許す限り凝と辛抱して獨り苦しんだ。健三には此矛盾が腹立たしくも可笑しくもない代りに何となく氣の毒に見えた。

「自分も兄弟だから他から見たら何處か似てゐるのかも知れない」
斯う思ふと、兄を氣の毒がるのは、つまり自分を氣の毒がるのと同じ事にもなつた。
「姉さんはもう好いんですか」
問題を變へた彼は、姉の病氣に就いて経過を訊ねた。

「あゝ、どうも喘息つてもものは不思議だねえ。あんなに苦しんでても直癒るんだから」
「もう話が出來ますか」
「出來るところか、中々好く饒舌つてね。例の調子で。——姉さんの考へちや、島田はお縫さんの所へ行つて、智慧を付けられて來たんだらうつて云ふんだがね」

「まさか。それよりあの男だから彼んな非常識な事を云つて來るのだと解釋する方が適當でせう」

「やい」

兄は考へてゐた。健三は馬鹿らしいといふ顔付をした。

「でなければね。屹度年を取つて皆から邪魔にされるんだらうつて」

健三はまだ黙つてゐた。

「何しろ淋しいには違ないんだね。それも彼奴の事だから、人情で淋しいんぢやない、慾で淋しいんだ」

兄はお縫さんの所から毎月彼女の母の方へ手當が届く事を何うしてか知つてゐた。

「何でも金鵒勳章の年金か何かをお藤さんが貰つてゐるんだとさ。だから島田も何處からか貰はなくつち

や淋しくつて堪らなくなつたらうよ。何しろあの位慾張つてゐるんだから」

健三は慾で淋しがつてゐる人に對して大した同情も起し得なかつた。

三十八

事件のない日が又少し續いた。事件のない日は、彼に取つて沈黙の日に過ぎなかつた。

彼は其間に時々己の追憶を辿るべく餘儀なくされた。自分の兄を氣の毒がりつゝも、彼は何時の間にか、

其兄と同じく過去の人となつた。

彼は自分の生命を兩断しようとして試みた。すると綺麗に切り棄てられべき筈の過去が、却つて自分を追掛

けて來た。彼の眼は行手を望んだ。然し彼の足は後へ歩きがちであつた。

さうして其行き詰まりには、大きな四角な家が建つてゐた。家には幅の廣い階子段のついた二階があつ

た。其二階の上も下も、健三の眼には同じやうに見えた。廊下で圍まれた中庭もまた真四角であつた。

不思議な事に、其廣い宅には人が誰も住んでゐなかつた。それを淋しいとも思はずにゐられる程の幼い

彼には、まだ家といふものゝ經驗と理解が缺けてゐた。

彼は幾つとなく續いてゐる部屋だの、遠く迄真直に見える廊下だのを、恰も天井の付いた町のやうに考

へた。さうして人の通らない往來を一人で歩く氣でそこいら中驅け廻つた。

彼は時々表二階へ上つて、細い格子の間から下を見下した。鈴を鳴らしたり、腹掛を掛けたりした馬が

何匹も續いて彼の眼の前を過ぎた。路を隔てた真ん向うには大きな唐金の佛様があつた。其佛様は胡坐を

かいて蓮臺の上に坐つてゐた。太い錫杖を擔いでゐた。それから頭に笠を被つてゐた。

健三は時々薄暗い土間へ下りて、其處からすぐ向側の石段を下りるために馬の通る往來を横切つた。彼

は斯うしてよく佛様へ攀ぢ上つた。着物の襷へ足を掛けたり、錫杖の柄へ捉まつたりして、後から肩に手

が届くか、又は笠に自分の頭が觸れると、其先はもう何うする事も出来ずにまた下りて來た。

彼はまた此四角な家と唐金の佛様の近所にある赤い門の家を覚えてゐた。赤い門の家は狭い往來から細

い小路を二十間も折れ曲つて這入つた突き當りにあつた。其奥は一面の高藪で蔽はれてゐた。

此狭い往來を突き當つて左へ曲ると長い下り坂があつた。健三の記憶の中に出てくる其坂は、不規則な

石段で下から上迄疊み上げられてゐた。古くなつて石の位置が動いた爲が、段の方々には凸凹があつた。

石と石の罅隙からは青草が風に靡いた。それでも其處は人の通行する路に違なかつた。彼は草履穿の儘で、

何度か其高い石段を上つたり下つたりした。

坂を下り盡すと又坂があつて、小高い行手に杉の木立が蒼黒く見えた。丁度其坂と坂の間の、谷になつ

た窪地の左側に、又一軒の萱葺があつた。家は表から引込んでゐる上に、少し右側の方へ片寄つてゐるが、往來に面した一部分には掛茶屋の様な雑な構が拵へられて、常には二三脚の床几さへ體よく据ゑてあつた。葭簀の隙から覗くと、奥には石で圍んだ池が見えた。その池の上には藤棚が釣つてあつた。水の上には差し出された兩端を支へる二本の棚柱は池の中に埋まつてゐた。周圍には躑躅が多かつた。中には緋鯉の影があちこちと動いた。濁つた水の底を幻影の様に赤くする其魚を健三は是非捕りたいと思つた。或日彼は誰も宅にゐない時を見計らつて、不細工な布袋竹の先へ一枚絲を着けて、餌と共に池の中に投げ込んだら、すぐ絲を引く氣味の悪いものに脅された。彼を水の底に引つ張り込まなければ已まない其強い力が二の腕迄傳はつた時、彼は恐ろしくなつて、すぐ竿を放り出した。さうして翌日靜かに水面に浮いてゐた一尺餘りの緋鯉を見出した。彼は獨り怖がつた。……

「自分は其時分誰と共に住んでゐたのだらう」
彼には何等の記憶もなかつた。彼の頭は丸で白紙のやうなものであつた。けれども理解力の索引に訴へて考へれば、何うしても島田夫婦と共に暮したと云はなければならなかつた。

三十九

それから舞臺が急に變つた。淋しい田舎が突然彼の記憶から消えた。すると表に欄干窓の付いた小さな宅が臙氣に彼の前にあらはれた。門のない其宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細長かつた。さうして右にも左にも折れ曲つてゐた。

彼の記憶がほんやりしてゐるやうに、彼の家も始終薄暗かつた。彼は日光と其家とを連想する事が出来なかつた。

彼は其處で疱瘡をした。大きくなつて聞くと、種痘が元で、本疱瘡を誘ひ出したのだとかいふ話であつた。彼は暗い欄子のうちで轉け廻つた。總身の肉を所嫌はず掻き撈つて泣き叫んだ。

彼はまた偶然廣い建物の中に幼い自分を見出した。區切られてゐる様で續いてゐる仕切のうちには人がちらほら居た。空いた場所の疊だか薄縁だか、黄色く光つて、あたりを伽藍堂の如く淋しく見せた。彼は高い所にゐた。其處で辨當を食つた。さうして油揚の胴を干瓢で結へた稻荷鮓の恰好に似たものを、上から下へ落した。彼は勾欄につらまつて何度も下を覗いて見た。然し誰もそれを取つて呉れるものはなかつた。伴の大人はみんな正面に氣を取られてゐた。正面ではぐらくと柱が搖れて大きな宅が潰れた。すると其の潰れた屋根の間から、髭を生やした軍人が威張つて出て來た。——其頃の健三はまだ芝居といふものゝ觀念を有つてゐなかつたのである。

彼の頭には此芝居と外れ鷹とが何の意味なしに結び付けられてゐた。突然鷹が向うに見える青い竹藪の方へ筋違に飛んで行つた時、誰だか彼の傍に居るものが「外れたく」と叫んだ。すると誰だかまた手を叩いて其鷹を呼び返さうとした。——健三の記憶は此處でぶつりと切れてゐた。芝居と鷹と何方を先に見たのか、夫さへ彼には不分明であつた。従つて彼が田圃や藪ばかり見える田舎に住んでゐたのと、狭苦しい町内の往來に向いた薄暗い宅に住んでゐたのと、何方が先になるのか、それも彼にはよく判明らなかつた。さうして其時代の彼の記憶には、殆ど人といふものゝ影が働いてゐなかつた。

然し島田夫婦が彼の父母として明瞭に彼の意識に上つたのは、それから間もない後の事であつた。其時夫婦は變な宅にゐた。門口から右へ折れると、他の堀際傳ひに石段を三つ程上らなければならなかつた。そこからは幅三尺ばかりの路地で、抜けると廣くて賑かな通りへ出た。左は廊下を曲つて、今度は反對に二三段下りる順になつてゐた。すると其處に長方形の廣間があつた。廣間に沿うた土間も長方形であつた。土間から表へ出ると、大きな河が見えた。其上を白帆を懸けた船が何艘となく往つたり來たりした。河岸には柵を結つた中へ薪が一杯積んであつた。柵と柵の間にある空地は、だら／＼下りに水際迄續いた。石垣の隙間からは辨慶蟹がよく鉦を出した。

島田の家は此細長い屋敷を三つに區切つたもの、真中にあつた。もとは大きな町人の所有で、河岸に面した長方形の廣間が其店になつてゐたらしく思はれるけれども、その持主の何者であつたか、又何うして彼が其處を立ち退いたものか、それらは凡て健三の知識の外に横はる祕密であつた。一頃その廣い部屋のある西洋人が借りて英語を教へた事があつた。まだ西洋人を異人といふ昔の時代だつたので、島田の妻のお常は、化物と同居でもしてゐるやうに氣味を悪がつた。尤も此西洋人は上靴を穿いて、島田の借りてゐる部屋の縁側迄のそ／＼歩いてくる癖を有つてゐた。お常が癩の氣味だとか云つて蒼い顔をして寝てゐると、其處の縁側へ立つて座敷を覗き込みながら、見舞を述べたりした。その見舞の言葉は日本語か、英語か、又はたゞ手間似だけか、健三には丸で解つてゐなかつた。

四十

西洋人は何時の間にか去つてしまつた。小さい健三が不圖心付いて見ると、其廣い室は既に扱所といふものに變つてゐた。扱所といふのは今の區役所の様なものらしかつた。みんなが低い机を一行に並べて事務を執つてゐた。テーブルや椅子が今日のやうに廣く用ひられない時分の事だつたので、疊の上に長く坐るのが、夫程の不便でもなかつたのだらう。呼び出されるものも、また自分から遣つて來るものも、悉く自分の下駄を土間へ脱ぎ捨て、掛り／＼の机の前へ長まつた。

島田は此扱所の頭であつた。従つて彼の席は入口からすつと遠い一番奥の突當りに設けられた。其處から直角に折れ曲つて、河の見える櫺子窓の際迄に、人の數が何人ゐるか、机の數が幾脚あつたか、健三の記憶は慥にそれを彼に語り得なかつた。

島田の住居と扱所とは、もとより細長い一つ家を仕切つた迄の事なので、彼は出勤と云はず退出と云はず、少からぬ便宜を有つてゐた。彼には天氣の好い時でも土を踏む面倒がなかつた。雨の降る日には傘を差す億劫を省く事が出來た。彼は自宅から縁側傳ひで勤めに出た。さうして同じ縁側を歩いて宅へ歸つた。斯ういふ關係が、小さい健三を少からず大膽にした。彼は時々公の場所へ顔を出して、みんなから相手にされた。彼は好い氣になつて、書記の硯箱の中にある朱墨を弄つたり、小刀の鞘を拂つて見たり、他に蒼蠅がられるやうな惡戯を續けざまにした。島田はまた出來る限りの專横をもつて、此小暴君の態度を是認した。

島田は吝嗇な男であつた。妻のお常は島田よりも猶吝嗇であつた。

「爪に火を點すつてえのは、あの事だね」
彼が實家に歸つてから後、斯んな評が時々彼の耳に入つた。然し當時の彼は、お常が長火鉢の傍へ坐つて、下女に味噌汁をよそつて遣るのを何の氣もなく眺めてゐた。

「それぢや何ほ何でも下女が可哀さうだ」

彼の實家のものは苦笑した。

お常はまた飯櫃や御菜の這入つてゐる戸棚に、いつでも錠を卸した。たまに實家の父が訪ねて來ると、屹度蕎麥を取寄せて食はせた。其時は彼女も健三も同じものを食つた。その代り飯時が來ても決して何時ものやうに膳を出さなかつた。それを當然のやうに思つてゐた健三は、實家へ引き取られてから、間食の上三度の食事が重なるのを見て、大いに驚いた。

然し健三に對する夫婦は金の點に掛けて寧ろ不思議な位寛大であつた。外へ出る時は黄八丈の羽織を着せたり、縮緬の着物を買ふために、わざ／＼越後屋迄引つ張つて行つたりした。其越後屋の店へ腰を掛けて、柄を擇り分けてゐる間に、夕暮の時間が逼つたので、大勢の小僧が廣い間口の雨戸を、兩側から一度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなつて、大きな聲を揚げて泣き出した事もあつた。

彼の望む玩具は無論彼の自由になつた。其中には寫し繪の道具も交つてゐた。彼はよく紙を繼ぎ合はせた暮の上に、三番叟の影を映して、烏帽子姿に鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜んだ。彼は新しい獨樂を買つて貰つて、時代を着けるために、それを河岸際の泥溝の中に浸けた。所が其泥溝は薪積場の柵と柵との間から流れ出して河へ落ち込むので、彼は獨樂の失くなるのが心配さに、日に何遍となく柵所の

土間を抜けて行つて、何遍となくそれを取り出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む蟹の穴を棒で突つついた。それから逃げ損つたもの、甲を叩いて、いくつも生挿りにして袂へ入れた。……
要するに彼は此吝嗇な島田夫婦に、餘所から貰ひ受けた一人つ子として、異數の取扱ひを受けてゐたのである。

四十一

然し夫婦の心の奥には健三に對する一種の不安が常に潛んでゐた。

彼等が長火鉢の前で差向ひに坐り合ふ夜寒の宵などには、健三によく斯んな質問を掛けた。

「御前の御父さんは誰だい」

健三は島田の方を向いて彼を指した。

「ぢや御前の御母さんは」

健三はまたお常の顔を見て彼女を指した。是で自分達の要求を一應満足させると、今度は同じやうな事を外の形で訊いた。

「ぢや御前の本當の御父さんと御母さんは」

健三は厭々ながら同じ答を繰返すより外に仕方がなかつた。然しそれが何故だか彼等を喜ばした。彼等は顔を見合せて笑つた。

或時はこんな光景が殆ど毎日のやうに三人の間に起つた。或時は單に是丈の問答では濟まなかつた。こ

とお常は執濃かつた。

「御前は何處で生れたの」

斯う聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門——高敷で蔽はれた小さな赤い門の家を擧げて答へなければならなかつた。お常は何時此質問を掛けても、健三が差支なく同じ返事の出来るやうに、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であつた。けれども彼女はそんな事には一向頓着しなかつた。

「健坊、御前本當は誰の子なの。隠さずにさう御云ひ」

彼は苦められるやうな心持がした。時には苦しいより腹が立つた。向うの聞きたがる返事を與へずに、わざと黙つてゐたくなつた。

「御前誰が一番好きだ。御父さん？御母さん？」

健三は彼女の意を迎へるために、向うの望むやうな返事をするのが厭で堪らなかつた。彼は無言のま、棒のやうに立つてゐた。それを只年齒の行かないためとのみ解釋したお常の觀察は、寧ろ簡單に過ぎた。彼は心のうちで彼女の斯うした態度を忌み悪んだのである。

夫婦は全力を盡して健三を彼等の専有物にしようといふ力めた。また事實上健三は彼等の専有物に相違なかつた。従つて彼等から大事にされるのは、つまり彼等のために彼の自由を奪はれるのと同じ結果に陥つた。彼には既に身體の束縛があつた。然しそれよりも猶恐ろしい心の束縛が、何も解らない彼の胸に、ほんやりした不満足影を投げた。

夫婦は何かにつけて彼等の恩恵を健三に意識させようとした。それで或時は「御父さんが」といふ聲を大きくした。或時はまた「御母さんが」といふ言葉に力を入れた。御父さんと御母さんを離れたたゞの菓子を食べたり、たゞの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられてゐた。

自分達の親切を、無理にも子供の胸に外部から叩き込まうとする彼等の努力は、却つて反對の結果を其子供のの上に引き起した。健三は蒼蠅がつた。

「なんでそんなに世話を焼くのだらう」

「御父さんが」とか「御母さんが」とか出るたびに、健三は己獨りの自由を欲しがつた。自分の買つて貰ふ玩具を喜んだり、錦繪を飽かず眺めたりする彼は、却つてそれ等を買つてくれる人を嬉しがらなくなつた。少くとも兩つのもを綺麗に切り離して、純粹な樂みに耽りたかつた。

夫婦は健三を可愛がつてゐた。けれども其愛情のうちには變な報酬が豫期されてゐた。金の力で美しい女を圍つてゐる人が、其女の好きなものを、云ふが儘に買つて呉れるのと同じ様に、彼等は自分達の愛情そのものゝ發現を目的として行動する事が出来ずに、たゞ健三の歡心を得るために親切を見せなければならなかつた。さうして彼等は自然のために彼等の不純を罰せられた。しかも自ら知らなかつた。

四十二

同時に健三の氣質も損はれた。順良な彼の天性は次第に表面から落ち込んで行つた。さうして其陥缺を補ふものは強情の二字に外ならなかつた。

彼の我儘は日増に募つた。自分の好きなものが手に入らないと、往來でも道端でも構はずに、すぐ其處へ坐り込んで動かなくなつた。ある時は小僧の背中から彼の髪の毛を力に任せて撈り取つた。ある時は神社に放し飼の鳩を何うしても宅へ持つて歸るのだと主張して已まなかつた。養父母の寵を欲し、専有し得る狭い世界の中に起きたり寝たりする事より外に何も知らない彼には、凡ての他人が、たゞ自分の命令を聞くために生きてゐるやうに見えた。彼は云へば通るとばかり考へるやうになつた。

やがて彼の横着はもう一步深入りをした。

ある朝彼は親に起こされて、眠い眼を擦りながら縁側へ出た。彼は毎朝寝起きに其處から小便をする癖を有つてゐた。所が其日は何時もより眠かつたので、彼は用を足しながらついで途中で寝てしまつた。

さうして其後を知らなかつた。

眼が覺めて見ると、彼は小便の上に轉け落ちてゐた。不幸にして彼の落ちた縁側は高かつた。大通りから河岸の方へ滑り込んでゐる地面の中途に當るので、普通の倍程あつた。彼はその出來事のためにとつと腰を抜かした。

驚いた養父母はすぐ彼を千住の名倉へ伴れて行つて出来る丈の治療を加へた。然し強く痛められた腰は容易に立たなかつた。彼は醋の臭のする黄色いどろくしたものを毎日局部に塗つて座敷に寝てゐた。それが幾日續いたか彼は知らなかつた。

「まだ立てないかい。立つて御覽」

お常は毎日のやうに催促した。然し健三は動けなかつた。動けるやうになつてもわざと動かなかつた。

彼は寢ながらお常のやさもきする顔を見てひそかに喜んだ。

彼は仕舞に立つた。さうして平生と何の異なる所なく其處いら中歩き廻つた。するとお常の驚いて嬉しがりがやうが、如何にも芝居じみた表情に充ちてゐたので、彼はいつそ立たすにもう少し寝てゐればよかつたといふ氣になつた。

彼の弱點がお常の弱點とまともに相搏つ事も少くはなかつた。

お常は非常に嘘を吐く事の巧い女であつた。それから何んな場合でも、自分に利益があるときへ見れば、すぐ涙を流す事の出来る重寶な女であつた。健三をほんの子供だと思つて氣を許してゐた彼女は、其裏面をすつかり彼に曝露して自ら知らなかつた。

或日一人の客と相對して坐つてゐたお常は、其席で話題に上つた甲といふ女を、傍で聽いてゐても聴きづらい程罵つた。所が其客が歸つたあとで、甲が又偶然彼女を訪ねて來た。するとお常は甲に向つて、そらぞらしい御世辭を使ひ始めた。遂に、今誰さんとあなたの事を大變賞めてゐた所だといふやうな不必要な嘘を吐いた。健三は腹を立てた。

「あんな嘘を吐いてらあ」

彼は一徹な子供の正直を其儘甲の前に披瀝した。甲の歸つたあとでお常は大變に怒つた。

「御前と一所にゐると顔から火の出るやうな思ひをしなくつちやならない」

健三はお常の顔から早く火が出れば好い位に感じた。

彼の胸の底には彼女を忌み嫌ふ心が我知らず常に何處かに働いてゐた。いくらお常から可愛がられても、

それに酬いる丈の情合が此方に出て來得ないやうな醜いものを、彼女は彼女の人格の中に藏してゐたのである。さうして其醜いものを一番能く知つてゐたのは、彼女の懐に温められて育つた駄々子に外ならなかつたのである。

四十三

其中變な現象が島田とお常との間に起つた。

ある晩健三が不圖眼を覺まして見ると、夫婦は彼の傍ではけしく罵り合つてゐた。出來事は彼に取つて突然であつた。彼は泣き出した。

其翌晩も彼は同じ争ひの聲で熟睡を破られた。彼はまた泣いた。

斯うした騒がしい夜が幾つとなく重なつて行くに連れて、二人の罵る聲は次第に高まつて來た。仕舞には雙方共手を出し始めた。打つ音、踏む音、叫ぶ音が、小さな彼の心を恐ろしからせた。最初彼が泣き出すと已んだ二人の喧嘩が、今では寢ようが覺めようが、彼に用捨なく進行するやうになつた。

幼稚な健三の頭では何の爲めに、つひぞ見馴れない此光景が毎夜深更に起るのか、丸で解釋出來なかつた。彼はたゞそれを嫌つた。道徳も理非も持たない彼に、自然はたゞそれを嫌ふやうに教へたのである。

やがてお常は健三に事實を話して聞かせた。其話によると、彼女は世の中で一番の善人であつた。これに反して島田は大變な悪ものであつた。然し最も悪いのはお藤さんであつた。「あいつが」とか「あの女が」とかいふ言葉を使ふとき、お常は口惜しくつて堪まらなといふ顔付をした。眼から涙を流した。然

しさうした劇烈な表情は却つて健三の心持を悪くする丈で、外に何の效果もなかつた。

「彼奴は儲だよ。御母さんにもお前にも儲だよ。骨を粉にしても仇討をしなくつちや」

お常は齒をぎり／＼嚙んだ。健三は早く彼女の傍を離れたくなつた。

彼は始終自分の傍にゐて、朝から晩迄彼を味方にしたがるお常よりも、寧ろ島田の方を好いた。其島田は以前と違つて、大抵は宅にゐない事が多かつた。彼の歸る時刻は何時も夜更らしかつた。従つて日中は減多に顔を合せる機會がなかつた。

然し健三は毎晩暗い灯火の影で彼を見た。其險惡な眼と怒りに顫へる脣とを見た。咽喉から渦捲く煙のやうに洩れて出る其憤りの聲を聞いた。

それでも彼は時々健三を伴れて以前の通り外へ出る事があつた。彼は一口も酒を飲まない代りに大變甘いものを嗜んだ。ある晩彼は健三とお藤さんの娘のお縫さんとを伴れて、賑やかな通りを散歩した歸りに汁粉屋へ寄つた。健三のお縫さんに會つたのは此時が始めてあつた。それで彼等は碌に顔さへ見合せなかつた。口は丸で利かなかつた。

宅へ歸つた時、健三はお常から、まづ島田に何處へ伴れて行かれたかを訊かれた。それからお藤さんの宅へ寄りはないかと念を押された。最後に汁粉屋へは誰と一所に行つたといふ詰問を受けた。健三は島田の注意に拘らず、事實を有の儘に告げた。然しお常の疑ひはそれでも中々解けなかつた。彼女はいろいろな鎌を掛けて、それ以上の事實を釣り出さうとした。

「彼奴も一所なんだらう。本當を御云ひ。云へば御母さんが好いものを上げるから御云ひ。あの女も行

細君は何年前か夫の所へお常から来た長い手紙の上書をまだ覚えてゐた。

「左右だらうよ。己も能く知らないが」

「其波多野といふ人は大方まだ生きてゐるんでせうね」

健三は波多野の顔さへ見た事がなかつた。生死杯は無論考への中になかつた。

「警部だつて云ふぢやありませんか」

「何んだか知らないね」

「あら、貴夫が自分でさう仰しやつた癖に」

「何時」

「あの手紙を私に御見せになつた時よ」

「左右かしら」

健三は長い手紙の内容を少し思ひ出した。其中には彼女が幼い健三の世話をした時の辛苦ばかりが並べ立て、あつた。乳がないので最初からおぢや丈で育てた事だの、下性が悪くつて寝小便の始末に困つた事だの、凡てさうした顛末を、飽きる程委しく述べた中に、甲府とかにゐる親類の裁判官が、月々彼女に金を送つてくれるので、今では大變仕合せだと書いてあつた。然し肝腎の彼女の夫が警部であつたか何うか、其處になると健三には全く覚えがなかつた。

「ことによると、もう死んだかも知れないね」

「生きてゐるかも知りませんわ」

二人の間には波多野の事ともつかず、又お常の事ともつかず、斯んな問答が取り換はされた。

「あの人が不意に遣つて来たやうに、其女の人も、何時突然訪ねて来ないとも限らないわね」

細君は健三の顔を見た。健三は腕組をしたなり黙つてゐた。

四十五

健三も細君もお常の書いた手紙の傾向をよく覚えてゐた。彼女とはさして縁故のない人ですら、親切に毎月若干かづゝの送金をして呉れるのに、小さい時分あれ程世話になつて置きながら、今更知らん顔をしてゐられた義理でもあるまいと云つた風の筆意が、一頁ごとに見透かされた。

其時彼は此手紙を東京にゐる兄の許に送つた。勤先へこんなものを度々寄こされては迷惑するから、少し氣を付けるやうに先方へ注意してくれと頼んだ。兄からはすぐ返事が来た。もと／＼養家先を離縁になつて、他家へ嫁に行つた以上は他人である、其上健三はその養家さへ既に出て仕舞つた後なのだから、今になつて直接本人へ文通などされては困るといふ理由を持ち出して、先方を承知させたから安心しろと、其返事には書いてあつた。

お常の手紙は其後ふつり来なくなつた。健三は安心した。然し何處かに心持の悪い所があつた。彼はお常の世話を受けた昔を忘れる譯に行かなかつた。同時に彼女を忌み嫌ふ念は昔の通り變らなかつた。要するに彼のお常に對する態度は、彼の島田に對する態度と同じ事であつた。さうして島田に對するよりも一層嫌惡の念が劇しかつた。

「島田一人でもう澤山な所へ、又新しくそんな女が遣つて來られちや困るな」

健三は腹の中で斯う思つた。夫の過去に就いて、それ程知識のない細君の腹の中は猶の事であつた。細君の同情は今其生家の方にばかり注がれてゐた。もと可なりの地位にあつた彼女の父は、久しく浪人生活を續けた結果、漸々經濟上の苦境に陥つて來たのである。

健三は時々宅へ話しに來る青年と對坐して、晴々しい彼等の様子と自分の内面生活とを對照し始めるやうになつた。すると彼の眼に映する青年は、みんな前ばかり見詰めて、愉快に先へくと歩いて行くやうに見えた。

或日彼は其青年の一人に向つて斯う云つた。

「君等は幸福だ。卒業したら何にならうとか、何をしようとか、そんな事ばかり考へてゐるんだから」

青年は苦笑した。さうして答へた。

「それは貴方方時代の事でせう。今の青年はそれ程香氣でもありません。何にならうとか、何をしようとか思はない事は無論ないでせうけれども、世の中が、さう自分の思ひ通りにならない事も亦能く承知してゐますから」

成程彼の卒業した時代に比べると、世間は十倍も世知辛くなつてゐた。然しそれは衣食住に關する物質的の問題に過ぎなかつた。従つて青年の答には彼の思はくと多少喰ひ違つた點があつた。

「いや君等は僕のやうに過去に煩はされないから仕合せだと云ふのさ」
青年は解しがたいといふ顔をした。

「あなただつて些も過去に煩はされてゐるやうには見えませんよ。矢つ張り己の世界は是からだといふ所があるやうですな」

今度は健三の方が苦笑する番になつた。彼は其青年に佛蘭西のある學者が唱へ出した記憶に關する新説を話した。

人が溺れかゝつたり、又は絶壁から落ちようとすする間際に、よく自分の過去全體を一瞬間の記憶として、其頭に描き出す事があるといふ事實に、此哲學者は一種の解釋を下したのである。

「人間は平生彼等の未來ばかり望んで生きてゐるのに、其未來が咄嗟に起つたある危険のために突然塞がれて、もう己は駄目だと事が極ると、急に眼を轉じて過去を振り向くから、そこで凡ての過去の經驗が一度に意識に上るのだといふんだね。その説によると」

青年は健三の紹介を面白さうに聴いた。けれども事狀を一向知らない彼は、それを健三の身の上の上に引直して見る事が出来なかつた。健三も一刹那にわが全部の過去を思ひ出すやうな危険な境遇に置かれたものとして今の自分を考へる程の馬鹿でもなかつた。

四十六

健三の心を不愉快な過去に捲き込む端緒になつた島田は、それから五六日程して、つひに又彼の座敷にあらはれた。

其時健三の眼に映じた此老人は正しく過去の幽靈であつた。また現在の人間でもあつた。それから薄暗

い未來の影にも相違なかつた。

「何處迄此影が己の身體に付いて回るだらう」

健三の胸は好奇心の刺戟に促されるよりも寧ろ不安の連漪に揺れた。

「此間比田の所を一寸訪ねて見ました」

島田の言葉遣ひは此前と同じやうに鄭重であつた。然し彼が何で比田の家へ足を運んだのか、其點になると、彼は全く知らん顔をして澄ましてゐた。彼の口振は丸で無沙汰見舞かたぐし其方へ用のあつた序に立ち寄つた人の如くであつた。

「あの邊も昔と違つて大分變りましたね」

健三は自分の前に坐つてゐる人の眞面目さの程度を疑つた。果して此男が彼の復讐を比田迄頼み込んだのだらうか、又比田が自分達と相談の結果通り、斷然それを拒絶したのだらうか。健三は其明白な事實さへ疑はずには居られなかつた。

「舊はそら彼處に瀑があつて、みんな夏になると能く出掛けたものですがね」

島田は相手に頓着なくたゞ世間話を進めて行つた。健三の方では無論自分から進んで不愉快な問題に觸れる必要を認めないので、たゞ老人の迹に跟いて引つ張られて行く丈であつた。すると何時の間にか島田の言葉遣が崩れて來た。仕舞に彼は健三の姉を呼び捨てにし始めた。

「お夏も年を取つたね。尤ももう大分久しく會はないには違ないが。昔はあれで中々勝氣な女で、能く私に喰つて掛つたり何かしたもものさ。其代り元々兄弟同様の間柄だから、いくら喧嘩をしたつて、仲の直

るのも亦早いには早いが。何しろ困ると睨つて呉れつて能く泣き付いて來るんで、私や可哀想だからその度に若干かづ、都合して遣つたよ」

島田の云ふ事は、姉が蔭で聽いてゐたら嘸怒るだらうと思ふやうに横柄であつた。それから手前勝手な立場からばかり見た歪んだ事實を他に押し付けようとする邪氣に充ちてゐた。

健三は次第に言葉少なになつた。仕舞には黙つたなり凝と島田の顔を見詰めた。

島田は妙に鼻の下の長い男であつた。其上往來などで物を見るときは必ず口を開けてゐた。だから一寸馬鹿のやうであつた。けれども善良な馬鹿としては決して誰の眼にも映する男ではなかつた。落ち込んだ彼の眼は其底で常に反對の何物かを語つてゐた。眉は寧ろ險しかつた。狭くて高い彼の額の上にある髪は、

若い時分から左右に分けられた例がなかつた。法印か何ぞのやうに常に後へ撫で付けられて居た。彼は不圖健三の眼を見た。さうして相手の腹を讀んだ。一旦横風の昔に返つた彼の言葉遣ひが又何時の間にか現在の鄭寧さに立ち戻つて來た。健三に對して過去の己に返らうとすると試みを遂に斷念してしまつた。

彼は室の内をきよろしく見廻し始めた。殺風景を極めた其室の中には生憎額も掛物も掛つてゐなかつた。「李鴻章の書は好きですか」

彼は突然斯んな問を發した。健三は好きとも嫌ひとも云ひ兼ねた。

「好きなら上げて好ござんす。あれでも價值にしたら今ぢや餘つ程するでせう」

昔島田は藤田東湖の僞筆に時代を着けるのだと云つて、白髮蒼顏萬死餘云々と書いた半切の唐紙を、臺

所の竈の上に釣るしてゐた事があつた。彼の健三に呉れるといふ李鴻章も、何處の誰が書いたものか頗る怪しかつた。島田から物を貰ふ氣の絶對になかつた健三は取り合はずにゐた。島田は漸く歸つた。

四十七

「何しに來たんでせう、あの人は」
目的なしに只來る筈がないといふ感じが細君には強くあつた。健三も丁度同じ感じに多少支配されてゐた。

「解らないね、何うも。一體魚と獸程違ふんだから」

「何が」

「あゝ云ふ人と己など、はさ」

細君は突然自分の家族と夫との關係を思ひ出した。兩者の間には自然の作つた溝があつて、御互を離隔してゐた。片意地な夫は決してそれを飛び超えて呉れなかつた。溝を拵へたものの方で、それを埋めるのが當然ぢやないかと云つた風の氣分で何時迄も押し通してゐた。里ではまた反對に、夫が自分の勝手で此溝を掘り始めたのだから、彼の方で其處を平にしたら好からうと云ふ考へを有つてゐた。細君の同情は無論自分の家族の方に在つた。彼女はわが夫を世の中と調和する事の出來ない偏窟な學者だと解釋してゐた。同時に夫が里と調和しなくなつた原因の中に、自分が主な要素として這入つてゐる事も認められてゐた。細君は黙つて話を切上げようとした。然し島田の方にはばかり氣を取られてゐた健三には其意味が通じな

かつた。

「お前はさう思はないかね」

「そりや彼の人と貴夫となら魚と獸位違ふでせう」

「無論外の人と己と比較してゐるやしない」

話はまた島田の方へ戻つて來た。細君は笑ひながら訊いた。

「李鴻章の掛物を何うとか云つてたのね」

「己に遣らうかつて云ふんだ」

「御止しなさいよ。そんな物を貰つてまた後から何んな無心を持ち懸けられるかも知れないわ。遣るつて云ふのは、大方口の先丈なんぞでせう。本當は買つて呉れつていふ氣なんですよ、屹度」

夫婦には李鴻章の掛物よりもまだ外に買ひたいものが澤山あつた。段々大きくなつて來る女の子に、相當の着物を着せて表へ出す事の出來ないのも、細君から云へば、夫の氣の付かない心配に違ひなかつた。二圓五十錢の月賦で、此間拵へた雨合羽の代を、月々洋服屋に拂つてゐる夫も、あまり長閑な心持になれよう筈がなかつた。

「復籍の事は何も云ひ出さなかつた様ですわね」

「うん何も云はない。丸で狐に抓まれたやうなものだ」

始めから此方の氣を引く爲にわざとそんな突飛な要求を持ち出したものか、又は眞面目な懸合として、それを比田へ持ち込んだ後、比田からきつぱり斷られたので、始めて駄目だと覺つたものか、健三には丸

で見當が付かなかつた。

「何方でせう」

「到底解らないよ、あゝいふ人の考へは」

島田は實際何方でも遣りかねない男であつた。

彼は三日程して又健三の玄關を開けた。其時健三は書齋に灯火を點けて机の前に坐つてゐた。丁度彼の頭に思想上のある問題が一筋の端緒を見せかけた所であつた。彼は一圖にそれを手近迄手繰り寄せようと、して骨を折つた。彼の思索は突然截ち切られた。彼は苦い顔をして室の入口に手を突いた下女の方を顧みた。

「何もさう度々来て、他の邪魔をしなくつても好きさうなものだ」

彼は腹の中で斯う呟いた。斷然面會を謝絶する勇氣を有たない彼は、下女を見たなり少時黙つてゐた。

「御通し申しますか」

「うん」

彼は仕方なしに答へた。それから「奥さんは」と訊ねた。

「少し御氣分が悪いと仰しやつて先刻から伏せつてゐらつしやいます」

細君の寝るときは歇私的里の起つた時に限るやうに健三には思へてならなかつた。彼は漸く立ち上つた。

電氣燈のまだ戸毎に點されない頃だつたので、客間には例の通り暗い洋燈が點いてゐた。其洋燈は細長い竹の臺の上に油壺を嵌め込むやうに拵へたもので、鼓の胴の恰好に似た平たい底が疊へ据わるやうに出来てゐた。

健三が客間へ出た時、島田はそれを自分の手元に引き寄せて心を出したり引つ込みましたりしながら灯火の具合を眺めてゐた。彼は改まつた挨拶もせず、「少し油煙がたまる様です」と云つた。

成程火屋が薄黒く燻つてゐた。丸心の切方が平に行かない所を、無暗に灯を高くすると、斯んな變調を來すのが此洋燈の特徴であつた。

「換へさせませう」

家には同じ型のもものが三つばかりあつた。健三は下女を呼んで茶の間にあるのと取り換へさせようとした。然し島田は生返事をする限で、容易に煤で曇つた火屋から眼を離さなかつた。

「何ういふ加減だらう」

彼は獨り言を云つて、草花の模様丈を不透明に擦つた丸い蓋の隙間を覗き込んだ。

健三の記憶にある彼は、斯んな事を能く氣にするといふ點に於いて、頗る几帳面な男に相違なかつた。

彼は寧ろ潔癖であつた。持つて生れた倫理上の不潔癖と金錢上の不潔癖の償ひにでもなるやうに、座敷や縁側の塵を氣にした。彼は尻をからけて、拭掃除をした。跣足で庭へ出て要らざる所迄掃いたり水を打つたりした。

物が壊れると彼は屹度自分で修復した。或は修復さうとした。それがために何の位な時間が要つても、

又何んな努力が必要になつて来て、彼は決して厭はなかつた。さういふ事が彼の性にある許りでなく、彼には手に握つた一錢銅貨の方が、時間や努力よりも遙に大切に見えたのである。

「なにそんなものは宅で出来る。金を出して頼むがものはない。損だ」

損をするといふ事が彼には何よりも恐ろしかつた。さうして目に見えない損は幾何しても解らなかつた。

「宅の人はあんまり正直過ぎるんで」

お藤さんは昔健三に向つて、自分の夫を評するとき、斯んな言葉を使つた。世の中をまだ知らない健

三にも其眞實でない事はよく解つてゐた。たゞ自分の手前、嘘と承知しながら、夫の品性を取り繕ふのだ

らうと善意に解釋した彼は、其時お藤さんに向つて何も云はなかつた。併し今考へて見ると、彼女の批評

にはもう少し慥な根柢があるらしく思へた。

「必竟大きな損に氣のつかない所が正直なんだらう」

健三はたゞ金銭上の慾を満たさうとして、其慾に伴はない程度の幼稚な頭腦を精一杯に働かせてゐる老

人を寧ろ憐れに思つた。さうして凹んだ眼を今擦り硝子の蓋の傍へ寄せて、研究でもする時のやうに、暗

い灯を見詰めてゐる彼を氣の毒な人として眺めた。

「彼は斯うして老いた」

島田の一生を煎じ詰めたやうな一句を眼の前に味つた健三は、自分は果して何うして老ゆるのだらうかと考へた。彼は神といふ言葉が嫌であつた。然し其時の彼の心にはたしかに神といふ言葉が出た。さうして、若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば此強慾な老人の一生と大した變りはないかも知れ

ないといふ氣が強くなつた。

其時島田は洋燈の螺旋を急に廻したと見え、細長い火屋の中が、赤い火で一杯になつた。それに驚いた彼は、又螺旋を逆に廻し過ぎたらしく、今度はたゞでさへ暗い灯火を猶の事暗くした。

「何うも何處か調子が狂つてますね」

健三は手を敲いて下女に新しい洋燈を持つて來させた。

四十九

其晩の島田は此前來た時と態度の上に於いて何の異なる所もなかつた。應對には何處迄も健三を獨立した人と認めるやうな言葉ばかり使つた。

然し彼はもう先達の掛物に就いては丸で忘れてゐるかの如くに見えた。李鴻章の李の字も口にしなかつ

た。復籍の事は猶更であつた。噫にさへ出す様子を見せなかつた。

彼は成るべく唯の話をしようとした。然し二人に共通した興味のある問題は、何處を何う探しても落ちてゐる筈がなかつた。彼のいふ事の大部分は、健三に取つて全くの無意味から餘り遠く隔たつてゐるとも

思へなかつた。

健三は退屈した。然し其退屈のうちには一種の注意が徹つてゐた。彼は此老人が或日或物を持つて、今より判明した姿で、屹度自分の前に現れてくるに違ないといふ豫覺に支配された。其或物がまた必ず自分に不愉快な若くは不利益な形を具へてゐるに違ないといふ推測にも支配された。

彼は退屈のうちに細いながら可なり鋭い緊張を感じた。その所爲か、島田の自分を見る眼が、さつき擦硝子の蓋を通して油煙に燻つた洋燈の灯を眺めてゐた時とは全く變つてゐた。

「隙があつたら飛び込もう」

落ち込んだ彼の眼は鈍い癖に明かに此意味を物語つてゐた。自然健三はそれに抵抗して身構へなければならなくなつた。然し時によると、其身構へをさらりと投げ出して、飢ゑたやうな相手の眼に、落付を與へて遣りたくなるやうな場合もあつた。

其時突然奥の間で細君の唸るやうな聲がした。健三の神経は此聲に對して普通の人以上の敏感を有つてゐた。彼はすぐ耳を侍てた。

「誰か病氣ですか」と島田が訊いた。

「え、妻が少し」

「左右ですか、それはいけませんね。何處が悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかつた。何時何處から嫁に來た女かさへ知らないらしかつた。従つて彼の言葉にはたゞ挨拶がある丈であつた。健三も此人から自分の妻に對する同情を求めようとは思つてゐなかつた。

「近頃は時候が悪いから、能く氣を付けないといけませんね」

子供は疾うに寝付いた後なので奥は寂としてゐた。下女は一番懸け離れた臺所の傍の三疊にゐるらしかつた。斯んな時に細君をたつた一人で置くのが健三には何れより苦しかつた。彼は手を眺めて下女を呼んだ。

「一寸奥へ行つて奥さんの傍に坐つて呉れ」

「へえ、」

下女は何の爲だか解らないと云つた様子をして間の襖を締めた。健三は又島田の方へ向き直つた。けれども彼の注意は寧ろ老人を離れてゐた。腹の中で早く歸つて呉れ、ば好いと思ふので、其腹が言葉にも態度にもありくと現れた。

夫でも島田は容易に立たなかつた。話の接穂がなくなつて、手持無沙汰で仕方なくなつた時、始めて座蒲團から滑り落ちた。

「何うも御邪魔をしました。御忙しい所を。何れまた其内」

細君の病氣に就いては何事も云はなかつた彼は、沓脱へ下りてから又健三の方を振り向いた。

「夜分なら大抵御暇ですか」

健三は生返事をしたなり立つてゐた。

「實は少し御話したい事があるんですが」

健三は何の御用ですかとも聞き返さなかつた。老人は健三の手に持つた暗い灯影から、鈍い眼を光らし又彼を見上げた。其眼には矢つ張り何處かに隙があつたら彼の懐に潜り込もうといふ人の悪い厭な色が動いてゐた。

「ぢや御免」

最後に格子を開けて外へ出た島田は斯う云つてとうく暗がりに消えた。健三の門には軒燈さへ點いて

るなかつた。

五十

健三はすぐ奥へ来て細君の枕元に立つた。

「何うかしたのか」

細君は眼を開けて天井を見た。健三は蒲團の横からまた其眼を見下した。

襖の影に置かれた洋燈の灯は客間のよりも暗かつた。細君の眸が何處に向つて注がれてゐるのか能く分らない位暗かつた。

「何うかしたのか」

健三は同じ問をまた繰返さなければならなかつた。それでも細君は答へなかつた。

彼は結婚以來斯ういふ現象に何度となく遭遇した。然し彼の神経はそれに慣らされるには餘りに鋭敏過ぎた。遭遇するたびに、同程度の不安を感じるのが常であつた。彼はすぐ枕元に腰を卸した。

「もう彼方へ行つても好い。此處には己が居るから」

ほんやり蒲團の裾に坐つて、退屈さうに健三の様子を眺めてゐた下女は無言の儘立ち上つた。さうして「御休みなさい」と敷居の所へ手を突いて御辭儀をしたなり襖を立て切つた。後には赤い筋を引いた光るものが疊の上に残つた。彼は肩を擧めながら下女の振り落して行つた針を取り上げた。何時もなら婢を呼び返して小言を云つて渡す所を、今の彼は黙つて手に持つたまゝ、しばらく考へてゐた。彼は仕舞に其針

をふつりと襖に立てた。さうして又細君の方へ向き直つた。

細君の眼はもう天井を離れてゐた。然し判然何處を見ても思へなかつた。黒い大きな瞳子には生きた光があつた。けれども生きた動が缺けてゐた。彼女は魂と直接に繋がつてゐないやうな眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔の向いた見當を眺めてゐた。

「おい」

健三は細君の肩を揺つた。細君は返事をせず只首丈をそろりと動かして心持健三の方に顔を向けた。けれども其處に夫の存在を認める何等の輝もなかつた。

「おい、己だよ。分るかい」

斯ういふ場合に彼の何時でも用ひる陳腐で簡略でしかもぞんざいな此言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解つてゐる憐憫と苦痛と悲哀があつた。それから跪いて天に禱る時の誠と願もあつた。

「何うぞ口を利いて呉れ。後生だから己の顔を見て呉れ」

彼は心のうちで斯う云つて細君に頼むのである。然し其痛切な頼を決して口へ出して云はうとはしなかつた。感傷的な氣分に支配され易い癖に、彼は決して外表的になれない男であつた。

細君の眼は突然平生の我に歸つた。さうして夢から覺めた人のやうに健三を見た。

「貴夫？」

彼女の聲は細くかつ長かつた。彼女は微笑しかけた。然しまだ緊張してゐる健三の顔を認めた時、彼女は其笑ひを止めた。

「あの人はもう歸つたの」
「うん」

二人はしばらく黙つてゐた。細君は又頸を曲けて、傍に寝てゐる子供の方を見た。

「能く寝てるのね」

子供は一つ床の中に小さな枕を並べてすやく寝てゐた。

健三は細君の額の上に自分の右の手を載せた。

「水で頭でも冷して遣らうか」

「いゝえ、もう好ござんす」

「大丈夫かい」

「えゝ」

「本當に大丈夫かい」

「えゝ。貴夫ももう御休みなさい」

「己はまだ寝る譯に行かないよ」

健三はもう一遍書齋へ入つて静な夜を一人更かさなければならなかつた。

五十一

彼の眼が芽えてゐる辭に彼の頭は澄み渡らなかつた。彼は思索の綱を中断された人のやうに、考察の進

路を遮る霧の中で苦しんだ。

彼は明日の朝多くの人より一段高い所に立たなければならぬ憐れな自分の姿を想ひ見た。其憐れな自分の顔を熱心に見詰めたり、または不得意な自分の云ふ事を眞面目に筆記したりする青年に對して濟まない氣がした。自分の虚榮心や自尊心を傷けるのも、それらを超越する事の出来ない彼には、大きな苦痛であつた。

「明日の講義もまた纏まらないのかしら」

斯う思ふと彼は自分の努力が急に厭になつた。愉快に考への筋道が運んだ時、折々何者にか煽動されて起る「己の頭は悪くない」といふ自信も己惚も忽ち消えてしまつた、同時に此頭の働きを攪き亂す自分の周圍に就いての不平等も常時よりは高まつて來た。

彼は仕舞に投げるやうに洋筆を放り出した。

「もう已めた。何うでも構はない」

時計はもう一時過ぎてゐた。洋燈を消して暗闇を縁側傳ひに廊下へ出ると、突當りの奥の間の障子二枚丈が灯に映つて明るかつた。健三は其一枚を開けて内に入つた。

子供は犬ころのやうに塊つて寝てゐた。細君も靜かに眼を閉ぢて仰向に眠つてゐた。

音のしないやうに氣を付けて其傍に坐つた彼は、心持頭を延ばして、細君の顔を上から覗き込んだ。それからそつと手を彼女の寐顔の上に翳した。彼女は口を閉ぢてゐた。彼の掌には細君の鼻の穴から出る生暖かい呼吸が微かに感ぜられた。其呼吸は規則正しかつた。また穩かだつた。

彼は漸く出した手を引いた。するともう一度細君の名を呼んで見なければまだ安心が出来ないといふ氣が彼の胸を衝いて起つた。けれども彼は直に其衝動に打勝つた。次に彼はまた細君の肩へ手を懸けて、再び彼女を揺り起さうとしたが、それも已めた。

「大丈夫だらう」

彼は漸く普通の人の斷案に歸着する事が出来た。然し細君の病氣に對して神經の鋭敏になつて居る彼には、それが何人も斯ういふ場合に取らなければならぬ尋常の手續きのやうに思はれたのである。

細君の病氣には熟睡が一番の薬であつた。長時間彼女の傍に坐つて、心配さうに其顔を見詰めて居る健三に、何よりも有難い其眠りが、靜かに彼女の臉の上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るやうな氣が常にした。然し其眠りがまた餘り長く續き過ぎると、今度は自分の視線から隠された彼女の眼が却つて不安の種になつた。つひに睫毛の鎖してゐる奥を見るために、彼は正體なく寢入つた細君を、態態揺り起して見る事が折々あつた。細君がもつと寐かして置いて呉れ、ば好いのにといふ訴へを疲れた顔色に現はして重い臉を開くと、彼は其時始めて後悔した。然し彼の神經は斯んな氣の毒な眞似をして迄も、彼女の實在を確めなければ承知しなかつたのである。

やがて彼は寐衣を着換へて、自分の床に入つた。さうして濁りながら動いてゐるやうな彼の頭を、靜かな夜の支配に任せた。夜は其濁りを清めて呉れるには餘りに暗過ぎた。然し騒がしい其動きを止めるには十分靜かであつた。翌朝彼は自分の名を呼ぶ細君の聲で眼を覺ました。

「貴夫もう時間ですよ」

まだ床を離れない細君は、手を延ばして彼の枕元から取つた袂時計を眺めてゐた。下女が組板の上で何か刻む音が臺所の方で聞こえた。

「婢はもう起きてるのか」

「え、先刻起しに行つたんです」

細君は下女を起して置いて又床の中に這入つたのである。健三はすぐ起き上つた。細君も同時に立つた。昨夜の事は二人共丸で忘れたやうに何とも云はなかつた。

五十二

二人は自分達の此態度に對して何の注意も省察も拂はなかつた。二人は二人に特有な因果關係を有つてゐる事を冥々の裡に自覺してゐた。さうして其因果關係が一切の他人には全く通じないのだといふ事も能く呑み込んでゐた。だから事狀を知らない第三者の眼に、自分達が或は變に映りはしまいかといふ疑念さへ起さなかつた。

健三は黙つて外へ出て、例の通り仕事をした。然し其仕事の眞際中に彼は突然細君の病氣を想像する事があつた。彼の眼の前に、夢を見てゐるやうな細君の黒い眼が不意に浮んだ。すると彼はすぐ自分の立つてゐる高い壇から降りて宅へ歸らなければならぬやうな氣がした。或は今にも宅から迎が来るやうな心持になつた。彼は廣い室の片隅に居て眞ん向うの突當りにある遠い戸口を眺めた。彼は仰向いて兜の鉢金

を伏せたやうな高い丸天井を眺めた。假漆で塗り上げた角材を幾段にも組み上げて、高いものを一層高く見えるやうに工夫した其天井は、小さい彼の心を包むに足りなかつた。最後に彼の眼は自分の下に黒い頭を並べて、神妙に彼の云ふ事を聴いてゐる多くの青年の上に落ちた。さうして復卒然として現實に歸るべく彼等から餘儀なくされた。

是程細君の病氣に惱まされてゐた健三は、比較的島田のために祟られる恐れを抱かなかつた。彼は此老人を因業で強慾な男と思つてゐた。然し一方では又それ等の性癖を十分發揮する能力が無いものとして寧ろ見縊つてもゐた。たゞ要らぬ會談に惜しい時間を潰されるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の煩ひになつた。

「何を云つて來る氣かしら、此次は」

襲はれる事を豫期して、暗にそれを苦にするやうな健三の口振が、細君の言葉を促した。

「何うせ分つてゐるぢやありませんか。そんな事を氣になさるより早く絶交した方が餘つ程得ですわ」

健三は心の裡で細君のいふ事を肯がつかつた。然し口では却つて反對な返事をした。

「それ程氣にしちや居ないさ、あんな者。もと／＼恐ろしい事なんかないんだから」

「恐ろしいつて誰も云やしませんわ。けれども面倒臭いことや違ひないでせう、いくら貴夫だつて」

「世の中にはたゞ面倒臭い位な單純な理由で已める事の出来ないものが幾何でもあるさ」
多少片意地の分子を含んでゐる斯んな會話を細君と取り換へさせた健三は、その次島田の來た時、例よりは忙しい頭を抱へてゐるにも拘らず、つひに面會を拒絶する譯に行かなかつた。

島田のちと話したい事があると云つたのは、細君の推察通り矢つ張り金の問題であつた。隙があつたら飛び込もうとして、此間から覗ひを付けてゐた彼は、何時迄待つても際限がないと思つたものか、機會のあるなしに頓着なく、つひに健三に肉薄し始めた。

「何うも少し困るので。外に何處と云つて頼みに行く所もない私なんだから、是非一つ」

老人の言葉の何處かには、義務として承知して貰はなくつちや困ると云つた風の横着さが潜んでゐた。

然しそれは健三の神經を自尊心の一角に於いて傷め付ける程強くも現れてゐなかつた。

健三は立つて書齋の机の上から自分の紙入を持つて來た。一家の會計を司どつてゐない彼の財囊は無論

輕かつた。空の儘視箱の傍に幾日も横たはつてゐる事さへ珍らしくはなかつた。彼は其中から手に觸れる

丈の紙幣を攫み出して島田の前に置いた。島田は變な顔をした。

「何うせ貴方の請求通り上げる譯には行かないんです。それでも有つ丈悉皆上げたんですよ」

健三は紙入の中を開けて島田に見せた。さうして彼の歸つたあとで、空の財布を容間へ放り出した儘また書齋へ入つた。細君には金を遣つた事を一口も云はなかつた。

五十三

翌日例刻に歸つた健三は、机の前に坐つて、大事らしく何時もの所に置かれた昨日の紙入に眼を付けた。革で拵へた大型の此二つ折は彼の持物として寧ろ立派過ぎる位上等な品であつた。彼はそれを倫敦の最も賑やかな町で買つたのである。

外國から持つて歸つた記念が、何の興味も惹かなくなりつゝある今の彼には、此紙入も無用の長物と見える外はなかつた。細君が何故丁寧ていねいにそれを元の場所へ置いて呉れたのだらうかとさへ疑つた彼は、皮肉ひにくな一瞥いちべつを空つほうの入物いれものに與へたぎり、手も觸れずに幾日かを過ぎた。

其内何かで金の要る日が來た。健三は机の上の紙入を取り上げて細君の鼻の先へ出した。

「おい少し金を入れて呉れ」

細君は右の手で物指を持つた儘夫の顔を下から見上げた。

「這入つてる筈ですよ」

彼女は此間島田の歸つたあとで何事も夫から聽かうとしなかつた。それで老人に金を奪られたことも全く夫婦間の話題に上つてゐなかつた。健三は細君が事狀を知らないで斯ういふのかと思つた。

「あれはもう遣つちやつたんだ。紙入は疾うから空つほうになつてゐるんだよ」

細君は依然として自分の誤解に氣が付かないらしかつた。物指を疊の上へ投げ出して手てを夫の方へ差し延べた。

「一寸拜見」

健三は馬鹿々々しいと云ふ風をして、それを細君に渡した。細君は中を檢めた。中からは四五枚の紙幣が出た。

「そら矢つ張り入つてゐるぢやありませんか」

彼女は手垢てあかの付いた數だらけの紙幣を、指の間に挟んで、一寸胸のあたり迄上げて見せた。彼女の舉動は自分の勝利に誇るものゝ如く微かろかな笑に伴つた。

「何時入れたのか」

「あの人の歸つた後です」

健三は細君の心遣こころづかいを嬉しく思ふよりも寧ろ珍らしく眺めた。彼の理解してゐる細君は斯んな氣の利いた事を滅多にする女ではなかつたのである。

「己が内證で島田に金を奪られたのを氣の毒とでも思つたものかしら」

彼は斯う考へた。然し口へ出して其理由を彼女に訊き糺して見る事はしなかつた。夫と同じ態度をつひに失はすにゐた彼女も、自ら進んで己を説明する面倒を敢てしなかつた。彼女の填補した金は斯くして黙つて受取られ、又黙つて消費されてしまつた。

其内細君の御腹が段々大きくなつて來た。起居に重苦しさうな氣息をし始めた。氣分も能く變化した。

「私今度のことによると助からないかも知れませんが」

彼女は時々何に感じてか斯う云つて涙を流した。大抵は取り合はずにゐる健三も、時として相手にさせられなければ濟まなかつた。

「何故だい」

「何故だかさう思はれて仕方がないんですもの」

質問も説明も是以上には上る事の出来なかつた言葉のうちに、ほんやりした或ものが常に潛んでゐた。其或ものは單純な言葉を傳はつて、言葉の届かない遠い所へ消えて行つた。鈴の音が鼓膜の及ばない幽か

な世界に潛り込むやうに。

彼女は悪阻で死んだ健三の兄の細君の事を思ひ出した。さうして自分が長女を生む時に同じ病で苦しんだ昔と照し合せて見たりした。もう二三日食物が通らなければ滋養灌腸をする筈だった際どい所を、よく通り抜けたものだなどと考へると、生きてゐる方が却つて偶然の様な気がした。

「女は詰らないものね」

「それが女の義務なんだから仕方がない」

健三の返事は世間並であつた。けれども彼自身の頭で批判すると、全くの出鱈目に過ぎなかつた。彼は腹の中で苦笑した。

五十四

健三の気分にも上り下りがあつた。出任せにもせよ細君の心を休めるやうな事ばかりは云つてはるなかつた。時によると、不快さうに寝てゐる彼女の體たらくが癢に障つて堪らなくなつた。枕元に突つ立つた儘、わざと慳食に要らざる用を命じて見たりした。

細君も動かなかつた。大きな腹を疊へ着けたなり打つとも蹴るとも勝手にしろといふ態度をとつた。平生からあまり口數を利かない彼女は益々沈黙を守つて、それが夫の氣を焦立たせるのを目の前に見ながら澄ましてゐた。

「詰りしづといのだし」

健三の胸には斯んな言葉が細君の凡ての特色でもあるかのやうに深く刻み付けられた。彼は外の事を丸で忘れて仕舞はなければならなかつた。いふといふ觀念があらゆる注意の焦點になつて來た。彼は餘所を眞闇にして置いて、出来る丈強烈な憎惡の光を此四字の上に投げ懸けた。細君は又魚か蛇のやうに餘つて其憎惡を受取つた。従つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫は何うしても氣違染みた癩癩持として評價されなければならなかつた。

「貴夫がさう邪慳になさると、また歇私的里を起しますよ」

細君の眼からは時々斯んな光が出た。何ういふものか健三は非道くその光を怖れた。同時に劇しくそれを惡んだ。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部では強ひて勝手にしろといふ風を装つた。其強硬な態度の何處かに何時でも假装に近い弱點があるのを細君は能く承知してゐた。

「どうせ御産で死んでしまふんだから構やしない」

彼女は健三に聞えよがしに呟いた。健三は死んぢまへと云ひたくなつた。

或晩彼は不圖眼を覺まして、大きな眼を開いて天井を見詰めてゐる細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて歸つた髮剃があつた。彼女が黒檀の鞘に折り込まれた其刃を眞直に立てずに、たゞ黒い柄杓を握つてゐるので、寒い光は彼の視覺を襲はずに濟んだ。それでも彼はぎよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髮剃を撈ぎ取つた。

「馬鹿な眞似をするな」

斯ういふと同時に、彼は髮剃を投げた。髮剃は障子に嵌め込んだ硝子に中つて其一部分を推いて向う側

の縁に落ちた。細君は茫然として夢でも見てゐる人のやうに一口も物を云はなかつた。

彼女は本當に情に逼つて刃物三昧をする氣なのだらうか、又は病氣の發作に自己の意志を捧げべく餘儀なくされた結果、無我無中で切ものを弄ぶのだらうか、或は單に夫に打ち勝たうとする女の策略から斯うして人を驚かすのだらうか、驚かすにしても其眞意は果して何處にあるのだらうか。自分に對する夫を平和で親切な人に立ち返らせる積なのだらうか、又はたゞ淺墓な征服慾に驅られてゐるのだらうか、——健三は床の中で一つの出來事を五條にも六條にも解釋した。さうして時々眠れない眼をそつと細君の方に向けて其動靜をうかつた。寝てゐるとも起きてゐるとも付かない細君は、丸で動かなかつた。恰も死を街ふ人のやうであつた。健三は又枕の上でまた自分の問題の解決に立ち歸つた。

其解決は彼の實生活を支配する上に於いて、學校の講義よりも遙に大切であつた。彼の細君に對する基調は、全く其解決一つでちやんと定められなければならなかつた。今よりすつと單純であつた昔、彼は一圖に細君の不可思議な舉動を、病の爲とのみ信じ切つてゐた。其時代には發作の起るたびに、神の前に己を懺悔する人の誠を以つて、彼は細君の膝下に跪いた。彼はそれを夫として最も親切で又最も高尚な處置と信じてゐた。

「今だつて其原因が判然分りさへすれば」

彼には斯ういふ慈愛の心が充ち満ちてゐた。けれども不幸にして其原因は昔のやうに單純には見えなかつた。彼はいくらでも考へなければならなかつた。到底解決の付かない問題に疲れて、とろ／＼と眠ると又すぐ起きて講義をしに出掛けなければならなかつた。彼は昨夕の事に就いて、つひに一言も細君に口を

利く機會を得なかつた。細君も日の出と共にそれを忘れてしまつたやうな顔をしてゐた。

五十五

斯ういふ不愉快な場面の後には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入つて來た。二人は何時となく普通夫婦の利くやうな口をきき出した。

けれども或時の自然は全くの傍觀者に過ぎなかつた。夫婦は何處迄行つても背中合の儘で暮した。二人の關係が極端な緊張の度合に達すると、健三はいつも細君に向つて生家へ歸れと云つた。細君の方ではまた歸らうが歸るまいが此方の勝手だといふ顔をした。その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何遍でも繰返して憚らなかつた。

「ぢや當分子供を伴れて宅へ行つてゐませう」

細君は斯う云つて一旦里へ歸つた事もあつた。健三は彼等の食料を毎月送つて遣るといふ條件の下に、また昔のやうな書生生活に立ち歸れた自分を喜んだ。彼は比較的廣い屋敷に下女とたつた二人ぎりになつた此突然の變化を見て、少しも淋しいとは思はなかつた。

「あゝ晴々して好い心持だ」

彼は八疊の座敷の眞中に小さな餉臺を据ゑて其上で朝から夕方迄ノートを書いた。丁度極暑の頃だつたので、身體の強くない彼は、よく仰向になつてばかりと疊の上に倒れた。何時替へたとも知れない時代の着いた其疊には、彼の背中を蒸すやうな黄色い古びが心迄透つてゐた。

彼のノートもまた暑苦しい程細かな字で書き下された。蠅の頭といふより外に形容のしやうのない其原稿を、成る可くだけ餘計拵へるのが、其時の彼に取つては何よりの愉快であつた。そして苦痛であつた。又義務であつた。

巢鴨の植木屋の娘とかいふ下女は、彼のために二三の盆栽を宅から持つて来て呉れた。それを茶の間の縁に置いて、彼が飯を食ふ時給仕をしながら色々な話をした。彼は彼女の親切を喜んだ。けれども彼女の盆栽を輕蔑した。それは何處の縁日へ行つても、一三十錢出せば、鉢ごと買へる安價な代物だつたのである。

彼は細君の事をかつて考へずにノートばかり作つてゐた。彼女の里へ顔を出さうなど、いふ氣は丸で起らなかつた。彼女の病氣に對する懸念も悉く消えてしまつた。

「病氣になつても父母が付いてゐるぢやないか。もし悪ければ何とか云つて來るだらう」

彼の心は二人一所にゐる時よりも遙に平靜であつた。細君の關係者に會はないのみならず、彼はまた自分の兄や姉にも會ひに行かなかつた。其代り向うでも來なかつた。彼はたつた一人で、日中の勉強につゞく涼しい夜を散歩に費やした。さうして繼布のあたつた青い蚊帳の中に入つて寝た。

一箇月あまりすると細君が突然遣つて來た。其時健三は日のかぎつた夕暮の空の下に、廣くもない庭先を逍遙してゐた。彼の歩みが書齋の縁側の前へ來た時、細君は半分朽ち懸けた枝折戸の影から急に姿を現はした。

「貴夫故のやうになつて下さらなくつて」

健三は細君の穿いてゐる下駄の表が變にさゝくれて、其後の方が如何にも見苦しく擦り減らされてゐるの氣が付いた。彼は憐れになつた。紙入の中から一枚の一回紙幣を出して細君の手に握らせた。

「見つともないから是で下駄でも買つたら好いだらう」

細君が歸つてから幾日か経つた後彼女の母は始めて健三を訪れた。用事は細君が健三に頼んだのと大同小異で、もう一遍彼等を引取つて呉れといふ主意を疊の上で布衍したに過ぎなかつた。既に本人に歸りたい意志があるのを拒絶するのは、健三から見ると無情な舉動であつた。彼は一も二もなく承知した。細君は又子供を連れて駒込へ歸つて來た。然し彼女の態度は里へ行く前と毫も違つてゐなかつた。健三は心のうちで彼女の母に騙されたやうな氣がした。

斯うした夏中の出來事を自分丈で繰り返して見るたびに、彼は不愉快になつた。是が何時迄續くのだらうかと考へたりした。

五十六

同時に島田はちよいと健三の所へ顔を出す事を忘れなかつた。利益の方面で一度手掛りを得た以上、放したらそれつ切だといふ懸念が猶更彼を蒼蠅くした。健三は時々書齋に入つて、例の紙入を老人の前に持ち出さなければならなかつた。

「好い紙入ですね。へえ、外國のものは矢つ張り何處か違ひますね」